

寝屋川市所在

小路遺跡（その3）

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う発掘調査報告書

2004年3月

財団法人 大阪府文化財センター



1. 調査地付近航空写真（南西より）



2. 調査地全景写真（南西より）

序 文

本報告書は、第二京阪道路（北大阪道路）の予定地内で実施した小路遺跡の報告です。調査地は、大阪府寝屋川市小路・高宮に所在し、縄文時代から中世の遺跡である小路遺跡にあたっています。

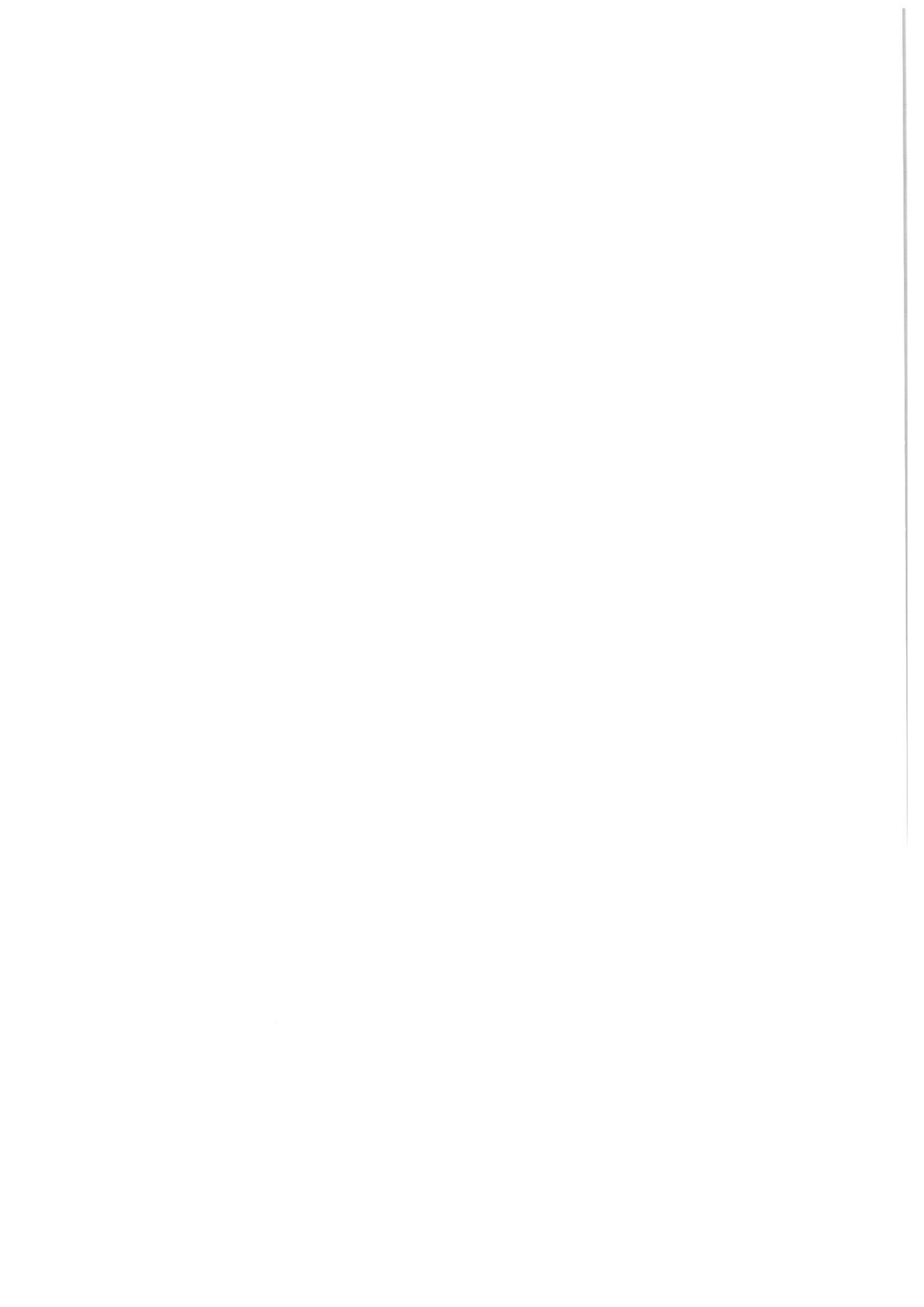
遺跡は、旧河内湖の北岸の、枚方丘陵南西斜面の扇状地上の微高地に立地しています。北方には、白鳳時代に創建された国指定の高宮廃寺、旧石器～平安時代の遺跡である高宮遺跡があります。

今回の調査で、北河内では初めての発見となる前方後方形の周溝墓と3基の方形周溝墓を検出しました。北河内の歴史を考察していく上で、貴重な資料を提供することができました。

最後に、調査にあたってご助力、ご支援をいただいた関係諸機関、地元関係各位に深く謝意を表します

2004年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好



例 言

1. 本書は、第二京阪道路とそれに平行して建設される一般国道1号バイパス（大阪北道路）予定地内で実施した、大阪府寝屋川市に所在する小路遺跡（その3）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに財団法人 大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査は、平成14年度に財団法人 大阪府文化財センター調査部長・玉井 功、中部調査事務所長・藤田憲司および第一係長・一瀬和夫の指導のもと、同所調査第一係技師・木下保明が担当した。現地調査は平成14年4月26日から15年1月31日までの期間で実施した。
4. 本書作成に係わる整理作業は、京阪支所長・渡邊昌宏、調査第五係長・秋山浩三の指導の下に、技師・木下保明が行った。
5. 現地調査の実施および整理作業にあたっては、関係諸機関をはじめ以下の方々にお世話になった。記して感謝の意を表する。（敬称略・順不同）
堀江門也 松岡良憲（大阪府教育委員会文化財保護課）、泉 拓良（奈良大学）、福岡晃彦 赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、米田敏幸（八尾市教育委員会）、南出俊彦 鈴木廣司 出口 勲 杉本厚典 松尾洋次郎 宮本飛鳥 島田裕弘 小暮律子 相良英樹 内海 慎 寺崎 聰 藤江 隆 乾 義子 井上教子 久木真美（財団法人 大阪府文化財センター）
6. 本書で用いた遺構写真については調査担当者が撮影し、遺物の撮影・焼付けについては当センター主査・上野貞子が担当した。
7. 自然科学分析については、放射線炭素年代測定、花粉化石分析、珪藻化石分析を（株）パレオ・ラボに委託し、その結果を本書に掲載した。
8. 本書の執筆はⅢ-3-(4)の周溝墓出土土器を相良、Ⅲ-3-(5)を宮本、Ⅲ-3-(6)を松尾、他は木下が行った。報告書作成するにあたって、文章の統一は行っていない。
9. 本調査に関わる図面・遺物・写真などは、財団法人 大阪府文化財センター京阪支所で保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 断面図中の標高は、東京湾平均海面（T.P.）を用いた。
2. 図中の方位・座標値は「日本測地系（改正前）」の平面直角座標第Ⅵ系による。単位（m）を省略している。
3. 本書で使用した土壌色の記述は、小川正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖24版』2002年版を参考にした。
4. 遺物には、通し番号を付け、実測図・写真ともに共通している。

目 次

巻首図版	1. 調査地付近航空写真（南西より）	
	2. 調査地全景写真（南西より）	
序文		
例言		
凡例		
I. 調査に至る経過と調査の方法	1
1. 調査に至る経過		
2. 調査の方法		
II. 位置と環境	3
1. 位置と地形的環境		
2. 歴史的環境		
III. 調査成果	5
1. 基本層序		
2. 遺構		
3. 遺物		
IV. 自然科学的分析	32
1. 放射性炭素年代測定 山形秀樹（パレオ・ラボ）	
2. 小路遺跡の花粉化石群集 新山雅広（パレオ・ラボ）	
3. 小路遺跡の珪藻化石群集 黒澤一男（パレオ・ラボ）	
V. まとめ	38

挿 図 目 次

図 1	地区割概念図	2
図 2	調査区・トレンチ配置図（斜線部は下層確認トレンチ）	2
図 3	調査地周辺の遺跡分布図	4
図 4	基本堆積層序模式図	6
図 5	1 C 区下層確認トレンチ北壁断面図	7
図 6	2 B 下層確認トレンチ北壁断面図（上段）・3 C 区下層確認トレンチ東壁断面図（下段）	8
図 7	第 1 面遺構全体図	9・10
図 8	第 2 面遺構全体図	11
図 9	周溝墓内土器出土状況図	12
図 10	前方後方形周溝墓・方形周溝墓遺構実測図	13
図 11	1 区遺構断面図	14
図 12	1 区下層確認トレンチ（第 4 面）平面図	15

図13	土器・瓦実測図（中世・古代）	17
図14	土器実測図（古墳時代）（1）	19
図15	土器実測図（古墳時代）（2）	20
図16	土器・埴輪実測図（古墳時代）（3）	22
図17	縄文土器実測図	23
図18	石器実測図（1）	24
図19	石器実測図（2）	25
図20	石器実測図（3）	26
図21	石器実測図（4）	27
図22	石器実測図（5）	28
図23	石器実測図（6）	29
図24	鉄器・土製品実測図	31
図25	花粉・珪藻化石採取地点	35

付図 航空測量平面図

表 目 次

表 1	石器・石製品観察表	30
表 2	放射線炭素年代測定および暦年代較正の結果	33
表 3	花粉化石産出一覧表	35
表 4	珪酸化石産出表（種群は小杉・1988に基づく）	37

図 版 目 次

図版 1	遺跡	1. 1 A区第1面全景（西より）
		2. 1 B区第1面全景（東より）
		3. 1 C区第1面全景（北より）
		4. 2 A区第1面全景（南より）
		5. 2 B区第1面全景（南より）
		6. 3 A区第1面全景（南より）
		7. 3 B区第1面全景（北より）
		8. 3 C区第1面全景（北より）
図版 2	遺跡	1. 1 A区第2面全景（西より）
		2. 1 A区東半第2面全景（南より）
		3. 1 C区第3面全景（北より）
		4. 2 A区第3面全景（南より）
		5. 2 B区第3面全景（東より）

- 6. 3 A区第3面全景 (南より)
- 7. 3 B区第3面全景 (北より)
- 8. 3 C区第3面全景 (北より)
- 図版3 遺跡
 - 1. 1 A区第3面全景 (南東より)
 - 2. 1 B区第3面全景 (東より)
- 図版4 遺跡
 - 1. 前方後方形周溝墓 (西より)
 - 2. 土器29出土状況 (南東より)
 - 3. 土器33・35～37・40・41出土状況 (南西より)
 - 4. 土器28出土状況 (南東より)
 - 5. 土器39出土状況 (南東より)
- 図版5 遺跡
 - 1. 前方後方形周溝墓 (南西より)
 - 2. 方形周溝墓2・3 (手前) (西より)
- 図版6 遺跡
 - 1. 1 C区下層確認トレンチ (西より)
 - 2. 3 C区下層確認トレンチ (北より)
- 図版7 遺物
 - 1. 土師器；皿(2～6)・羽釜(8)、瓦器；皿(7)、中世陶器；搦鉢(9)・甕(10)、白磁；壺(11)・椀(12・13)、須恵器；杯蓋(14～16)・壺(18)、緑釉陶器；椀(19～21)、製塩土器(22)
 - 2. 軒丸瓦(24)
- 図版8 遺物
 - 唐津焼；椀(1)、黒色土器；椀(23)、須恵器；瓶子(17)・杯蓋(50)・杯身(52・53)・器台(54)、土師器；竈(48)・甕(44)
- 図版9 遺物
 - 土師器；甕(40)・壺(27・28・30・31・33・39)・器台(41)
- 図版10 遺物
 - 1. 土師器；壺(29・32・34・35・37・42)・甕(38)・鉢(43)
 - 2. 韓式土器(55～57)、円筒埴輪(58～60)
- 図版11 遺物
 - 1. 石鏃(67・68)、石匙(70)、楔形石器(71・72)、剥片(69・73)
 - 2. 剥片(74～78)
- 図版12 遺物
 - 1. 剥片(79～85)
 - 2. 剥片(86～95)
- 図版13 遺物
 - 1. 紡錘車(96)
 - 2. 石錘(97)
 - 3. 砥石(99)
 - 4. 砥石(98)
 - 5. 磨石(101)
- 図版14 遺物
 - 1. 砥石(100)、磨石(102)
 - 2. 磨石(103・104)
 - 3. 石皿(105)
- 図版15 遺物
 - 1. 縄文土器(61～66)
 - 2. 輸入銭貨(106～108)、金属製品(109・110)、土製品(111～113)

I. 調査に至る経過と調査の方法

1. 調査に至る経過

今回の調査は、第二京阪道路とそれに平行して建設される一般国道1号バイパス（大阪北道路）予定路線内で実施した、大阪府寝屋川市小路・高宮地内に所在する小路遺跡（その3）の遺跡発掘調査である。道路予定地内に埋蔵文化財の遺構・遺物の有無を確かめるために2000年度に大阪府文化財センターが確認調査を実施し、遺構・遺物が良好な状態で残存していることが分り¹⁾、本調査を実施することになった。国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所および日本道路公団関西支社枚方工事事務所と大阪府教育委員会文化財保護課で協議され、現地調査を（財）大阪府文化財センターが実施することになった。発掘調査は2002年6月7日から着手し、2003年1月31日に終了した。

2. 調査の方法

遺物の取り上げと遺構の登録は、平面直角座標第Ⅵ系（日本測地系）を基準とし、Ⅰ～Ⅵの6段階の区画を設定して行った。第Ⅰ区画は1万分の1地区割図を利用したもので、東西8km・南北6kmとなる。第Ⅱ区画は東西・南北とも4分割、計16に分けたもので、2500分の1地区割図に相当する。東西2.0km・南北1.5kmとなる。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画を東西20分割・南北15分割したもので、一辺100mとなる。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を東西・南北ともに10分割したものである。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画を4分割した一辺5mの区画である。第Ⅵ区画は、第Ⅴ区画の北東端を基点に計測するものである。ちなみに、調査地はⅠ6（第Ⅰ区画）-16（第Ⅱ区画）-F9・F10・G9・G10（第Ⅲ区画）にあたる。

調査対象地内に現在使用中の里道・用水路がある関係上、調査区を大きく3箇所に分けて、調査を実施した。また、各調査区も掘削土の仮置き場を確保するため2～3のブロックに分割した。調査にあたって、各地区毎に遺構番号と遺物の登録番号を付した。

調査は現代盛土、現代耕作土を重機によって掘削し、以下の層位は遺物を含んでいるので人力で掘り下げた。遺構面は2面に分けて精査を行い、遺構と遺物を検出した。調査は当初、古墳時代の遺構面を最終面として実施したが、同時におこなわれた周辺の調査で縄文土器の出土が確認されたので、各区に下層確認トレンチを設置し、縄文時代の遺構・遺物を対象として調査した。

調査の記録は、各区の壁面を観察し、縮尺20分の1の断面図を作成した。また、遺物の出土状況図、遺構の断面図、全体平面図をそれぞれ縮尺10分の1、20分の1、100分の1で実測した。航空測量は第3遺構面で行い、縮尺50分の1の実測図と縮尺200分の1の縮小図を作成した。

<註>

- 1) 一瀬和夫・田中龍男ほか編『讚良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡、長尾窯跡群、長尾東地区』（財）大阪府文化財センター

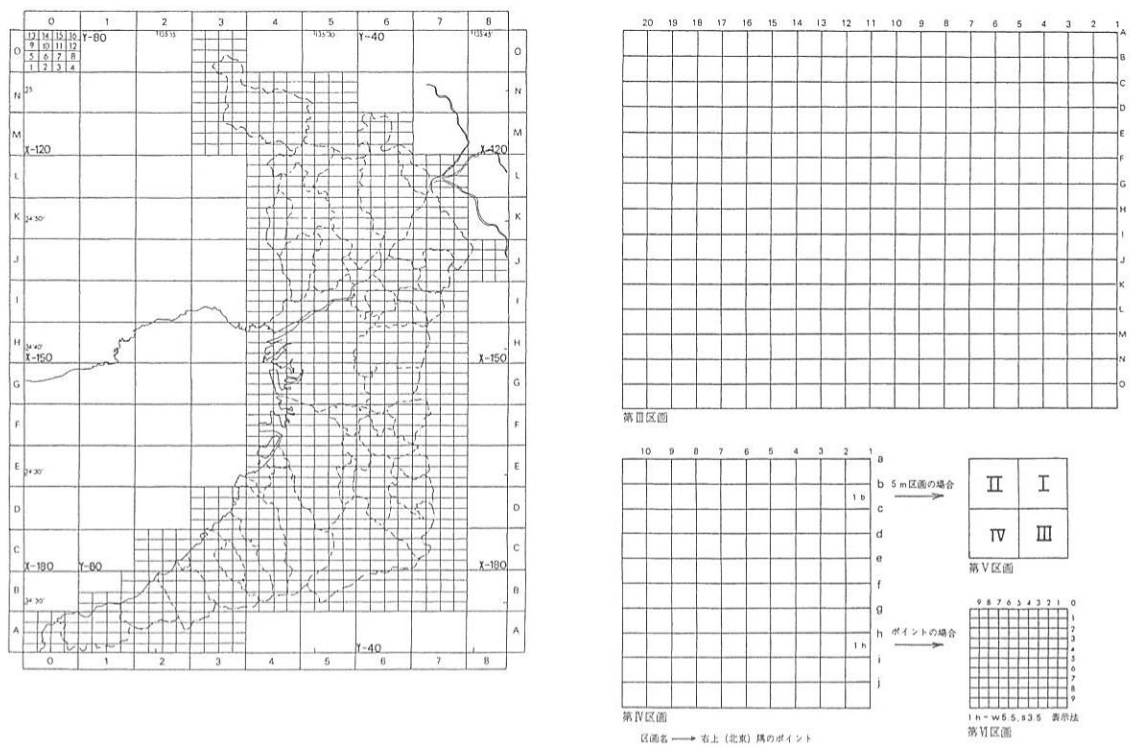


図1 地区割概念図

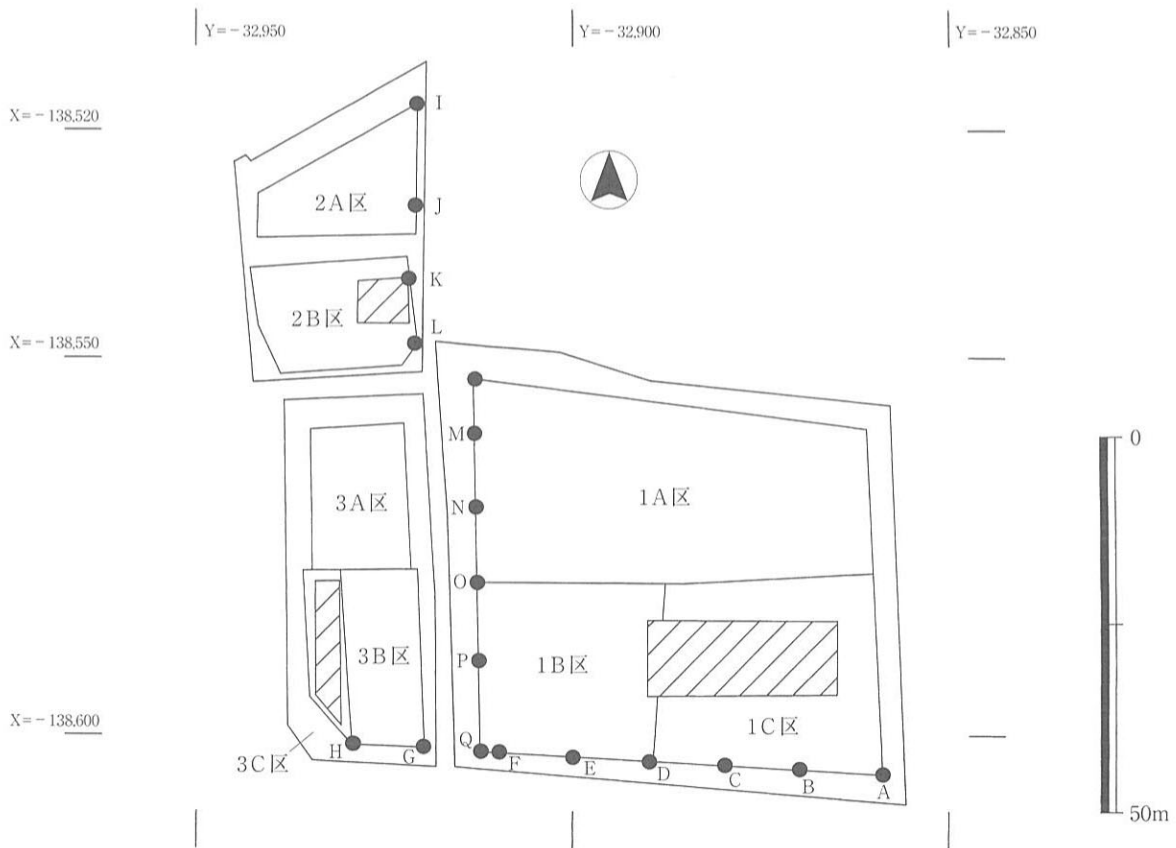


図2 調査区・トレンチ配置図 (斜線部は下層確認トレンチ)

II. 位置と環境

1. 位置と地形的環境

調査地は寝屋川市の南西部の小路・高宮地区に所在し、南側を西流する讃良川を挟んで四條畷市と接する。当地は、縄文時代から中世の遺跡である小路遺跡にあたっている。遺跡は旧河内湖の北岸に位置し、生駒山地西麓から派生する洪積層の大阪層群によって形成される枚方丘陵の南西斜面の扇状地上の微高地に立地している。調査区の北東部は丘陵堆積と扇状地堆積の境に近接している。

2. 歴史的環境

小路遺跡周辺の遺跡の分布は、図3に示す通りである。以下、時代毎に概要を述べる。

旧石器時代の遺跡には、翼状剥片を利用した瀬戸内技法の国府型ナイフが出土した高宮遺跡・太秦遺跡・讃良川遺跡がある。また、四條畷市域には、国府型ナイフを含むナイフ形石器、削器、彫器、細石刃、舟底形石器、石刃、翼状剥片、石核などが出土した更良岡山遺跡、木葉状尖頭器が出土した岡山南遺跡、有舌尖頭器が出土した南山下遺跡がある。

縄文時代前期の遺跡には、土坑から北白川下層式・大歳山式土器、サヌカイト製石鏃が出土した高宮遺跡があり、中期の遺跡には「キャリパー式土器」が出土した交野市星田旭遺跡、船元式土器を中心とした比較的多くの土器が出土した讃良川遺跡、船元式・星田式土器などが出土した讃良郡条里遺跡、船元式土器が出土した南山下遺跡・砂遺跡がある。後・晩期の遺跡には小路遺跡、滋賀里式・船橋式・長原式の土器が出土した高宮八丁遺跡、滋賀里式土器が出土した長保寺遺跡、中津式、滋賀里式、船橋式土器などが出土した更良岡山遺跡がある。その他、石鏃・石錐・石槍・磨石などが出土した三味頭遺跡がある。

弥生時代前期の遺跡には、高宮八丁遺跡、四條畷市雁屋遺跡がある。中期には、高地性集落である太秦遺跡、方形周溝墓が検出された大尾遺跡がある。後期になると遺跡の数は飛躍的に増える。池の瀬遺跡、寝屋遺跡などがある。

古墳時代には、墓跡として前期の全長約80mの前方後円墳の忍ヶ丘古墳、中期には四條畷市の前方後円墳の墓ノ堂古墳がある。後期になると太秦古墳群、打上神社古墳群、更良岡山古墳群、三味頭遺跡がある。集落跡には古墳時代中期後半から後期の楠遺跡、薮屋北遺跡、高宮遺跡があり、竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑などが検出されている。長保寺遺跡でも掘立柱建物、船材を転用して井戸枠して使用した井戸、土坑が検出されている。その他に高宮八丁遺跡、薮屋遺跡などがある。

飛鳥から白鳳時代の集落跡には高宮遺跡などがある。高宮遺跡は、竪穴住居、掘立柱建物、柵列などから構成されている。掘立柱建物の中には、一辺が約1mを超える柱穴をもつ大型の掘立柱建物も検出されている。大尾遺跡では、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物群や土坑墓が検出されている。長保寺遺跡では掘立柱建物、井戸、土坑が検出されている。白鳳時代の寺院には高宮廃寺があり、1979年の寝屋川市の調査により、金堂・講堂・中門・回廊跡など主要伽藍配置の規模・位置などが明らかにされ、薬師寺式伽藍配置と判明した。また、出土瓦の観察から、高宮廃寺は数回の火災にあい、奈良時代末か

ら平安時代初頭に一旦廃絶し、鎌倉時代に再興されたことが分った。

奈良時代の遺跡には高宮遺跡があり、大型掘立柱建物群が検出されている。平安時代の遺跡には高柳遺跡、神田東後遺跡、長保寺遺跡、高宮遺跡などがある。高宮遺跡では中世の墓跡・集落跡、大尾遺跡からは中世の区画溝と火葬墓が検出されている。また、現在の水田にその痕跡を遺す讃良郡条里遺跡がある。

参考文献

1. 寝屋川市史編纂委員会『寝屋川市史』 第1巻・考古資料編Ⅰ 1999年
2. 寝屋川市教育委員会『高宮遺跡－発掘調査概要報告Ⅵ』 1985年3月
3. 大阪府教育委員会『大阪文化財分布図』 1996年



図3 調査地周辺の遺跡分布図 (1:50000) 国土地理院 1:50000地形図『大阪東北部』より作製

Ⅲ. 調査成果

1. 基本層序

調査地は、北東から南西に傾斜する緩やかな斜面上に立地する。そのため、調査地には耕作地が階段状に造成されている。また、A区とB区の間で約50cmの高低差が存在する。

基本層序は、最上層には現代盛土が、次に旧耕作土が堆積している。これら2層は重機によって掘削した。第1層は、旧耕作土の下の上面にマンガン・鉄分などが酸化し沈殿した所謂床土である。第2層は灰黄褐色の砂泥層で、近世の遺物を包含する耕作土である。場所により2～3層に分かれる所がある。第3層は灰色のシルト層で、中世末から近世初頭の遺物を包含する耕作土である。この層も場所により2～3層に分かれる。第1～3層は基本的に全調査区を通じて認められる。第4層は、調査区が北東から南西に傾斜しているので、地形が低くなる第1・3区のほぼ南半から南西に堆積し、第5層は、1B・3B区のさらに南側に堆積している。第4層は、灰褐色の泥砂層で、平安時代から古墳時代の遺物を包含している。第5層は黄灰色の砂泥層で、古墳時代後期の遺物が出土している。

第2層の上面を、第1遺構面として調査を実施した。第3遺構面は調査区の北半では第3層の下、南半では第4・5層の下となる。また、1A区で、第3層の下面で古代から古墳時代の遺構と重複して検出された新しい遺構面（中世）を第2遺構面とした。

縄文時代の遺構と遺物を確認するために、1C区では下層確認トレンチを第4層下面から設置し、第6層から第8層を掘り下げ第9層上面（第4面）で縄文時代の流路を検出した。第6・7層は流水に伴う粗砂層が主で、第8層はシルト層である。図5の1～3が第6層、4～22が第7層、23・24が第8層、25は第9層となる。また、27～33は第7層上面で成立する自然流路、34～74は縄文時代の自然流路（溝90）である。7層からサヌカイト片が、23からは時期不明の縄文土器の細片と石皿・磨石が出土している。また、第9層以下にも確認トレンチを設置し、堆積層の観察と花粉化石群集・珪藻化石群集の分析を実施した。第9層以下は丘陵堆積層と考えられ、表面に縦方向の亀裂がみられる。植物化石の分析の結果でも、第9層以下の各層は、水成環境で堆積したものとは考えがたく、非常に乾燥した環境のもとに土壌が堆積したことが判明している。

2B区では、3層の下から下層確認トレンチを設置して土層の観察を行った。層序は第6層が流水に伴う砂層、第7層はシルト層、第8層は基本的には粗砂・細砂層であるが、10層は有機物を多く含んでいる。以下は丘陵堆積層となる。図6（上段）の1が第6層、2・3が第7層、4～15が第8層、16～19が丘陵堆積層となる。3層からサヌカイト・チャート片が出土している。

3C区では、下層確認トレンチを第5層の下面から設置し土層の確認を行った。層序は、図6（下段）の1・2は第6層、3～9は第7層で基本的にはシルト層で砂層が間に混じる。10～15は第8層で主に粘土層となる。16～26は丘陵堆積層である。11から磨石、12から縄文土器の破片と磨石が出土している。また、第7層下面で重なり合った2条の流路（27～29、30～36）、第8層の下面で南北に2条の流路（37～41、42～51）を検出した。下層の両流路から縄文時代前期の遺物が出土している。

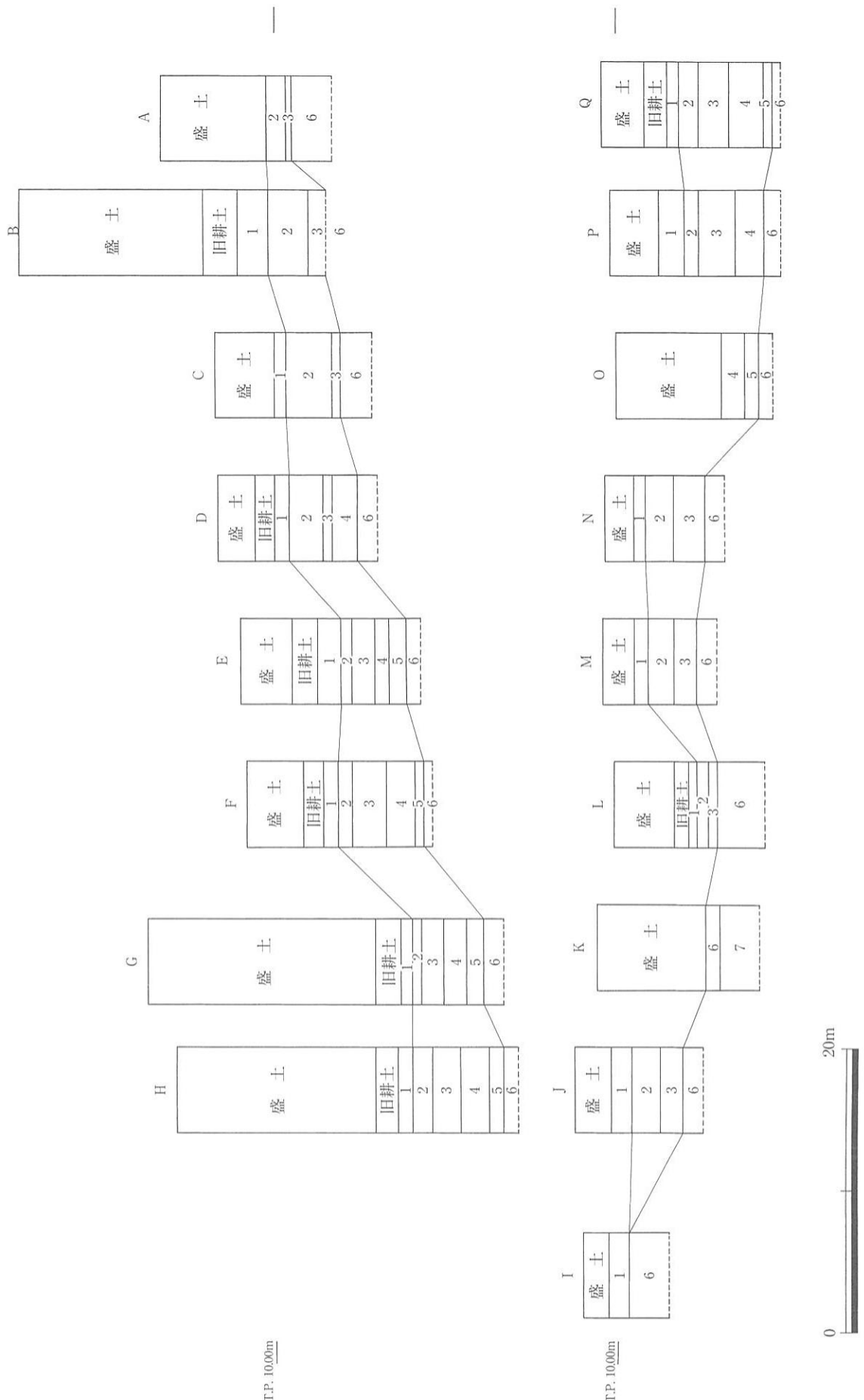
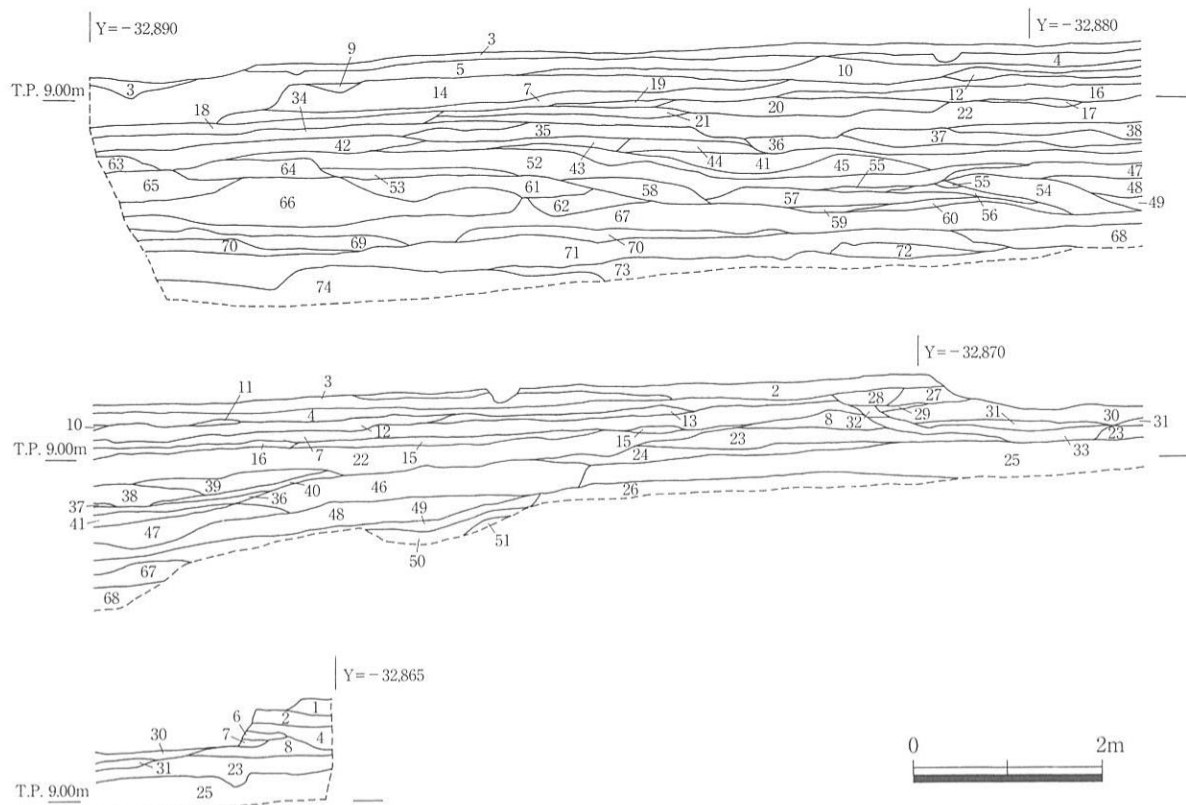
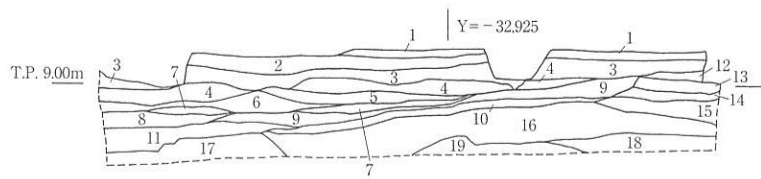


图4 基本堆积层序模式图

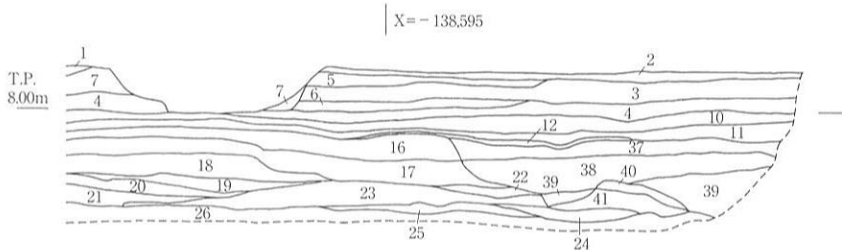
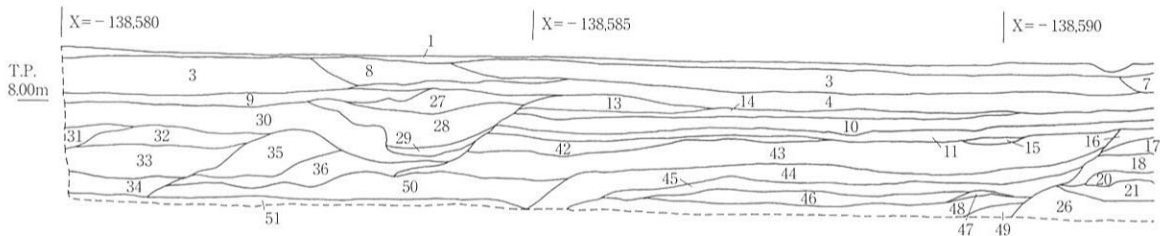


- | | | |
|-------------------------|------------------------|------------------------|
| 1. 黄褐色 10YR 5/6 泥砂 | 26. 褐灰色 7.5YR 4/1 シルト | 51. 灰黄色 2.5Y 6/2 細砂 |
| 2. にぶい黄褐色 10YR 4/3 細砂 | 27. にぶい黄褐色 10YR 6/4 細砂 | 52. 灰色 5Y 6/1 細砂 |
| 3. にぶい黄褐色 10YR 5/3 細砂 | 28. 灰黄褐色 10YR 6/2 細砂 | 53. 黒褐色 2.5Y 3/2 泥砂 |
| 4. 褐色 10YR 5/1 粗砂 | 29. にぶい黄色 2.5Y 6/3 細砂 | 54. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 粗砂 |
| 5. 明緑灰色 2.5GY 7/1 粘土 | 30. 褐灰色 10YR 6/1 粗砂 | 55. にぶい黄褐色 10YR 5/3 粗砂 |
| 6. にぶい黄色 2.5Y 6/3 細砂 | 31. 灰黄色 2.5Y 6/2 粗砂 | 56. 灰色 7.5Y 5/1 砂泥 |
| 7. にぶい黄褐色 10YR 5/3 粗砂 | 32. 灰色 7.5Y 6/1 泥砂 | 57. 灰色 7.5Y 5/1 微砂 |
| 8. 灰白色 10YR 7/1 粗砂 | 33. にぶい黄褐色 10YR 6/4 粗砂 | 58. 灰黄色 2.5Y 6/2 粗砂 |
| 9. 灰白色 7.5Y 7/2 泥砂 | 34. オリーブ灰色 5GY 5/1 粘土 | 59. 暗灰黄色 2.5Y 4/2 細砂 |
| 10. 灰白色 7.5Y 7/1 泥砂 | 35. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 細砂 | 60. 黒褐色 2.5Y 3/1 砂泥 |
| 11. 灰黄褐色 10YR 4/2 細砂 | 36. 黄灰色 2.5Y 4/1 砂泥 | 61. 暗灰黄色 2.5Y 4/2 泥砂 |
| 12. 灰黄褐色 10YR 5/2 細砂 | 37. 灰色 7.5Y 6/1 微砂 | 62. 暗灰黄色 2.5Y 4/2 粗砂 |
| 13. にぶい黄色 2.5Y 6/3 細砂 | 38. 灰黄色 2.5Y 6/2 細砂 | 63. 黄灰色 2.5Y 6/1 泥砂 |
| 14. にぶい黄褐色 10YR 5/3 粗砂 | 39. 灰黄褐色 10YR 6/2 細砂 | 64. 暗灰黄色 2.5Y 4/2 粗砂 |
| 15. 浅黄色 2.5Y 7/3 細砂 | 40. 灰色 7.5Y 6/1 砂泥 | 65. 灰色 5Y 5/1 泥砂 |
| 16. にぶい黄褐色 10YR 5/3 細砂 | 41. 黒褐色 10YR 2/2 砂泥 | 66. 灰黄色 2.5Y 6/2 細砂 |
| 17. 黄褐色 2.5Y 5/4 細砂 | 42. 灰色 7.5Y 6/1 細砂 | 67. 黄灰色 2.5Y 4/1 泥砂 |
| 18. 黒褐色 2.5Y 3/2 泥砂 | 43. にぶい黄褐色 10YR 5/3 細砂 | 68. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 粗砂 |
| 19. 灰黄褐色 2.5Y 6/2 細砂 | 44. 黒褐色 10YR 3/1 泥砂 | 69. 黄灰色 2.5Y 5/1 泥砂 |
| 20. 黄灰色 2.5Y 5/1 泥砂 | 45. にぶい黄褐色 10YR 7/2 細砂 | 70. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 粗砂 |
| 21. オリーブ灰色 2.5GY 6/1 泥砂 | 46. 灰色 7.5Y 5/1 泥砂 | 71. 灰黄色 2.5Y 6/2 細砂 |
| 22. 灰色 5Y 6/1 細砂 | 47. 黄灰色 2.5Y 4/1 泥砂 | 72. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 泥砂 |
| 23. 青灰色 10BG 5/1 砂泥 | 48. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 粗砂 | 73. 灰黄褐色 10YR 5/2 粗砂 |
| 24. 灰色 10Y 6/1 砂泥 | 49. 黒褐色 10YR 3/2 シルト | 74. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 粗砂 |
| 25. 黒色 10YR 1.7/1 シルト | 50. 灰オリーブ色 5Y 6/2 細砂 | |

図5 1C区下層確認トレンチ北壁断面図



- | | | |
|---------------------|--------------------|-------------------------|
| 1. 灰色 5Y6/1 細砂 | 8. 黄灰色 2.5Y5/1 粗砂 | 15. 黄灰色 2.5Y5/1 粗砂 |
| 2. 明褐色 7.5YR5/8 シルト | 9. 灰色 7.5Y6/1 細砂 | 16. オリーブ灰色 2.5GY5/1 シルト |
| 3. 灰色 10Y6/1 シルト | 10. 暗灰黄色 N3/ シルト | 17. 褐色 10YR5/1 砂泥 |
| 4. 灰白色 5Y7/1 細砂 | 11. 灰色 5Y5/1 粗砂 | 18. 灰色 10Y5/1 粗砂 |
| 5. 灰オリーブ色 5Y5/2 細砂 | 12. 灰色 7.5Y5/1 細砂 | 19. 黒褐色 5YR3/1 シルト |
| 6. 黄灰色 2.5Y5/1 泥砂 | 13. 灰黄色 2.5Y6/2 細砂 | |
| 7. 灰色 5Y4/1 粗砂 | 14. 灰色 5Y5/1 細砂 | |



- | | | |
|-------------------------|-------------------------|-----------------------|
| 1. 黄灰色 2.5Y4/1 泥砂 | 18. 灰色 7.5Y6/1 泥砂 | 35. 灰オリーブ色 5Y5/2 微砂 |
| 2. 黒褐色 10YR3/1 砂泥 | 19. 灰色 7.5Y5/1 細砂 | 36. 黒色 10Y2/1 泥砂 |
| 3. 灰色 5Y6/1 粘土 | 20. 灰色 7.5Y5/1 泥砂 | 37. 暗オリーブ灰色 5GY5/1 泥砂 |
| 4. 灰白色 10Y7/2 泥砂 | 21. 灰黄色 2.5Y6/2 粗砂 | 38. 暗オリーブ灰色 5GY3/1 砂泥 |
| 5. 灰黄褐色 10YR5/2 粗砂 | 22. 灰色 10Y5/1 泥砂 | 39. オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂 |
| 6. 灰色 7.5Y4/1 泥砂 | 23. 灰色 7.5Y6/1 微砂 | 40. 暗緑灰色 7.5GY 4/1 砂泥 |
| 7. 灰黄褐色 10YR4/2 細砂 | 24. 灰色 7.5Y6/1 粗砂 | 41. 黄灰色 2.5Y4/1 粗砂 |
| 8. 暗灰黄色 2.5Y5/2 細砂 | 25. 灰色 5Y5/1 砂泥 | 42. 灰色 7.5Y4/1 砂泥 |
| 9. オリーブ灰色 2.5GY5/1 粘土 | 26. 灰色 5Y5/1 砂泥 | 43. 暗オリーブ灰色 2.5GY 泥砂 |
| 10. オリーブ灰色 5GY5/1 粘土 | 27. 暗灰黄色 2.5Y5/2 細砂 | 44. オリーブ黒色 10Y3/1 砂泥 |
| 11. オリーブ灰色 10Y4/2 泥砂 | 28. 灰黄色 2.5Y6/2 細砂 | 45. 灰色 7.5Y5/1 泥砂 |
| 12. オリーブ黒色 10Y3/2 泥砂 | 29. 灰色 10Y5/1 微砂 | 46. 灰色 7.5Y4/1 泥砂 |
| 13. 灰色 10Y6/1 粘土 | 30. 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 砂泥 | 47. オリーブ黒色 5Y2/2 砂泥 |
| 14. 灰オリーブ色 5Y5/2 粘土 | 31. 灰色 7.5Y4/1 微砂 | 48. オリーブ黒色 10Y3/1 泥砂 |
| 15. 灰オリーブ色 5Y5/2 砂礫 | 32. 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂 | 49. 灰色 5Y4/1 砂泥 |
| 16. 暗オリーブ灰色 2.5GY3/1 泥砂 | 33. 灰色 5Y6/1 細砂 | 50. 灰色 10Y6/1 粗砂 |
| 17. 灰色 7.5Y4/1 砂泥 | 34. オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂 | 51. 灰色 7.5Y5/1 粗砂 |

図6 2B下層確認トレンチ北壁断面図(上段)・3C区下層確認トレンチ東壁断面図(下段)

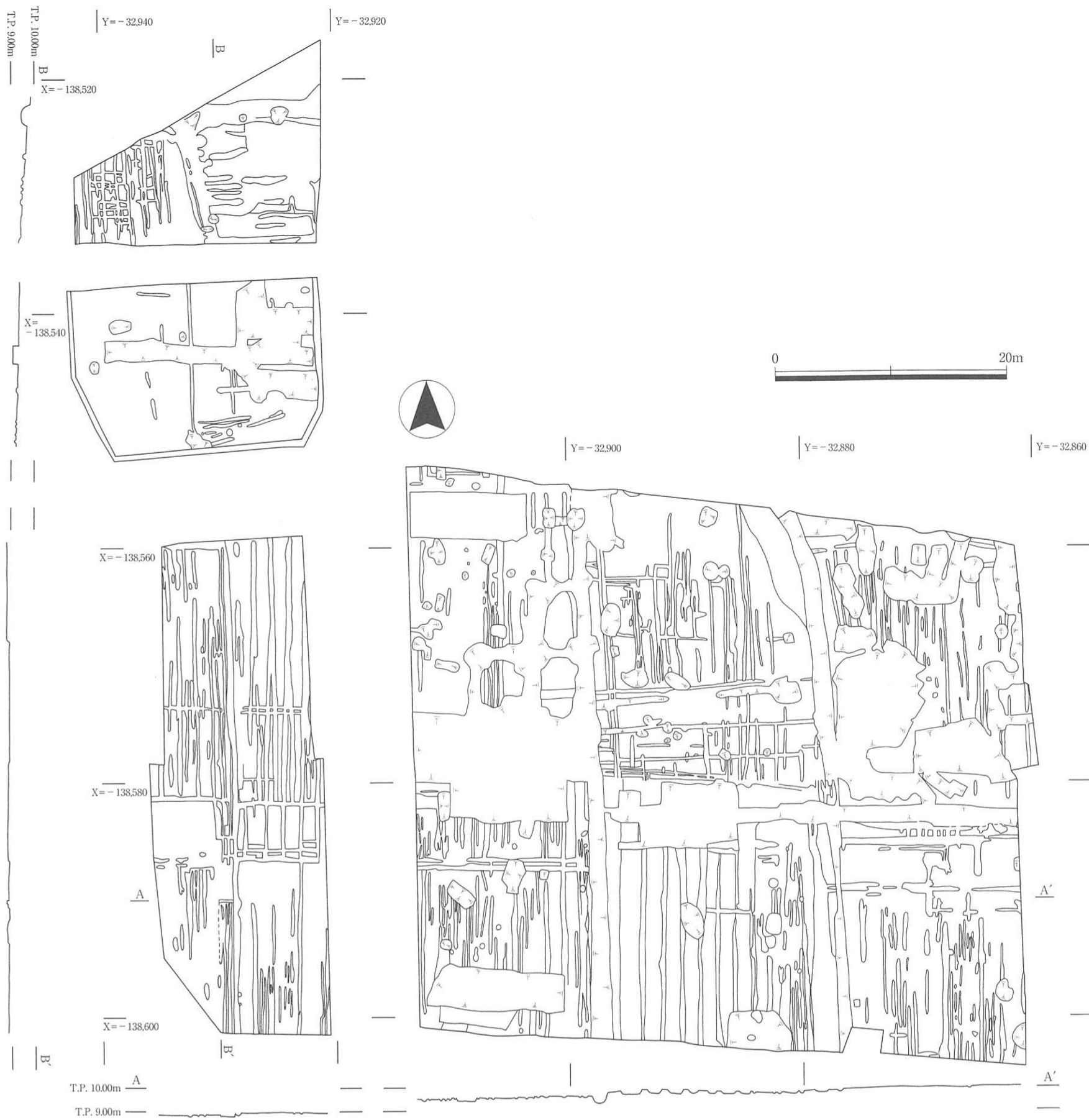


图7 第1面遺構全体図

2. 遺構

今回の調査によって、縄文時代から近世の遺構を検出した。中世・近世の遺構では耕作に伴うと考えられる溝、土坑、古代の遺構では自然流路、古墳時代の遺構では前方後方形周溝墓、方形周溝墓、溝、土坑、自然流路、縄文時代の土坑、自然流路を検出した。

(1) 第1面の遺構 (図7)

第1遺構面は近世の遺構面で、溝を多数検出した。第1区では、東西・南北方向にほぼ真っ直ぐにのびる溝を検出したが、南北方向の溝が圧倒的に多い。どちらの方向の溝も座標の方位にほぼ一致している。これらの溝は耕作に伴うものと考えられ、溝の中から近世陶磁器の破片が出土している。通常の溝の幅は、0.1~0.5m、深さは5~20cmであるが、南半中央部の溝群には幅が2mを測るものがある。長さは途中で途切れるものが多いが、20mを超えるものもある。第1区では、耕作面が造成されているとみられ、遺構面が東西に3段になっている。東から西へ低くなり、両端が分る中段の幅は約20mである。この造成は第3層が成立した段階で、一部斜面の高い側を削平した後に第3層を客土した可能性がある。第3層から中世末から近世初頭の遺物が出土するので、造成時期もそれと同じであると思われる。この造成した区画は、多少の変化はあるが、現代まで受け継がれていると考えられる。

第2区の北半では、幅約2m、深さ0.4mの東西溝が検出された。A区では東西で段になり、東側が高く、段際に溝が走っている。東半では東西方向の溝が主で、西半では5~10cmの細い溝が格子状に検出された。B区では攪乱の影響もあるが、耕作溝がほとんどみられない。溝のない南西部で多数の牛の足跡を検出した。第3区でも耕作溝を検出しているが、ほとんど南北方向の溝である。

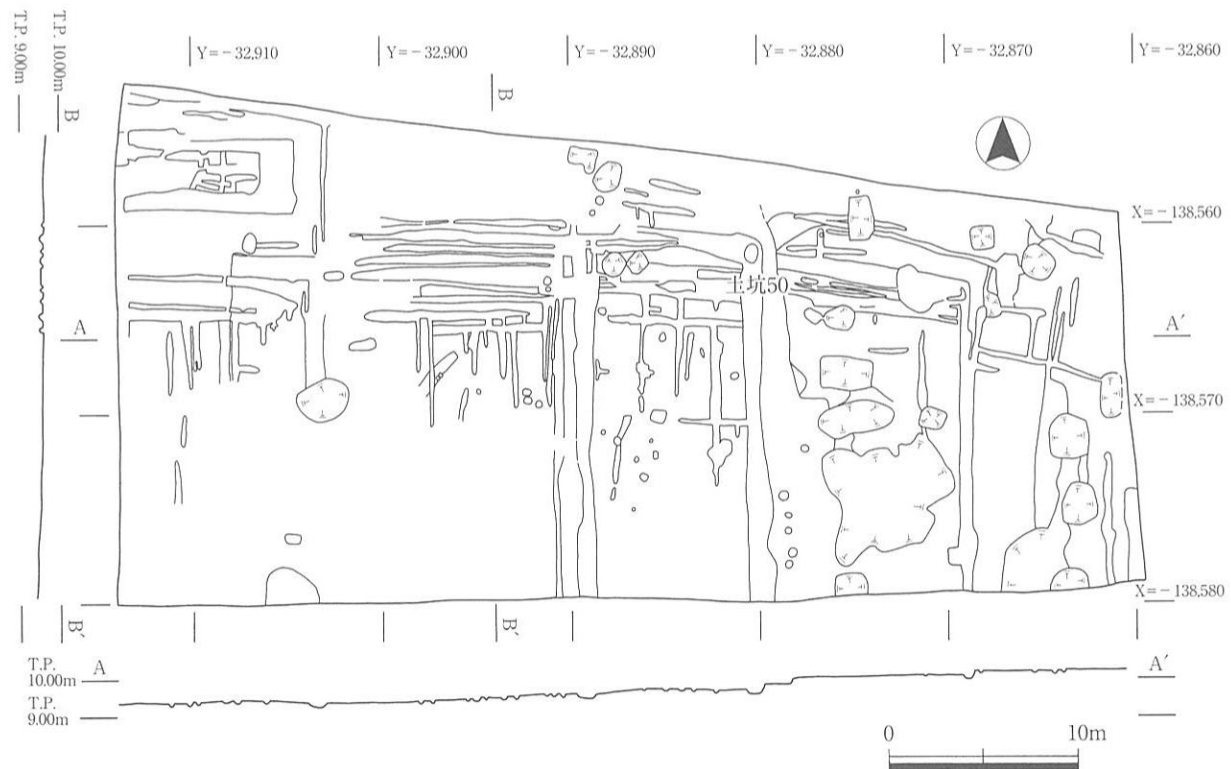


図8 第2面遺構全体図

(2) 第2面の遺構 (図8)

1 A区で、第3層の下面で古代から古墳時代の遺構と重複して検出された新しい遺構を第2遺構面の遺構とした。第2遺構面は、北東から南西に傾斜する自然地形に沿って形成されている。遺構には、東西方向と南北方向にのびる耕作に伴う溝、土坑、小穴がある。土坑50は1 A区のほぼ中央の耕作溝の底部で検出した土坑で、水溜めの施設ではないかと思われる。耕作溝の中には、耕作面を区画しているとみられる南北方向の溝を4条検出した。幅は0.7~1.2m、深さは0.1~0.2mで、通常の溝より規模が大きく、北辺で西斜め上に屈曲し、次の区画溝の手前で途切れる。芯々距離は西から14.5m、9.5m、11.0mを測る。讚良郡条里遺跡の推定東限が1区と3区間の現里道に相当しており、調査地は東へ若干ずれるがこれらの溝は条里制水田地割に伴う遺構の可能性も考えられる。溝内から遺物の細片が出土しており、中世のものと思われる。

(3) 第3面の遺構 (図9~11・付図)

第3遺構面では、古墳時代の前方後方形周溝墓1基、方形周溝墓3基、溝、土坑、古代から古墳時代のものと思われる自然流路を検出した。

自然流路は砂礫が堆積したものが多く、基本的には北東から南西に流れの方向をもつが、蛇行を繰り返したり先端が幾筋にも枝分かれし、途中で突然途切れたりする。降雨が激しかった時に、水が斜面を侵食した痕跡で、深く侵食された部分が残って検出されたものと思われる。平安時代の遺物を含むものと遺物が一切出土しないものがある。中世以降になると、自然流路は検出されていないので、土地は安定したものとなり耕作地が造成される条件が整ったと思われる。

前方後方形周溝墓は自然傾斜と平行に北東-南西に主軸の方向をもつ。全長22.7mで、後方部の長さは12.2m、幅10.2mを測り、縦に若干長い長方形を呈する。検出した三方の隅はほぼ直角に曲がり、明瞭な稜をもつ。前方部端の幅は推定7mで、先端部が若干バチ形に開く。くびれ部での幅は3.4mを測る。周溝は前方後方形に沿って廻り、幅2.5~3.5m、深さ0.4~0.5mである。埋土は、基本的には3層に分かれる。上層は砂層で、周溝の上部を流れた自然流路によってもたらされた洪水砂層と思われる。中層は黒色の粘土層で、封土から転落したと考えられる壺形土器などが主にこの層から出土している。

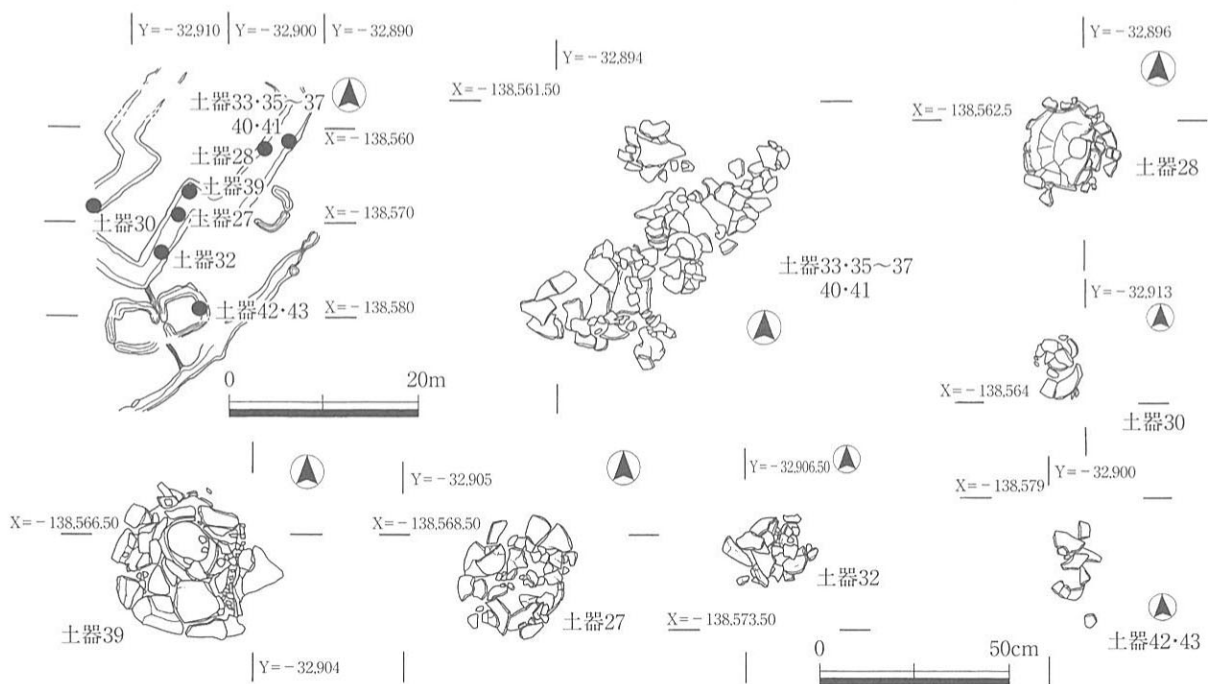


図9 周溝墓内土器出土状況図

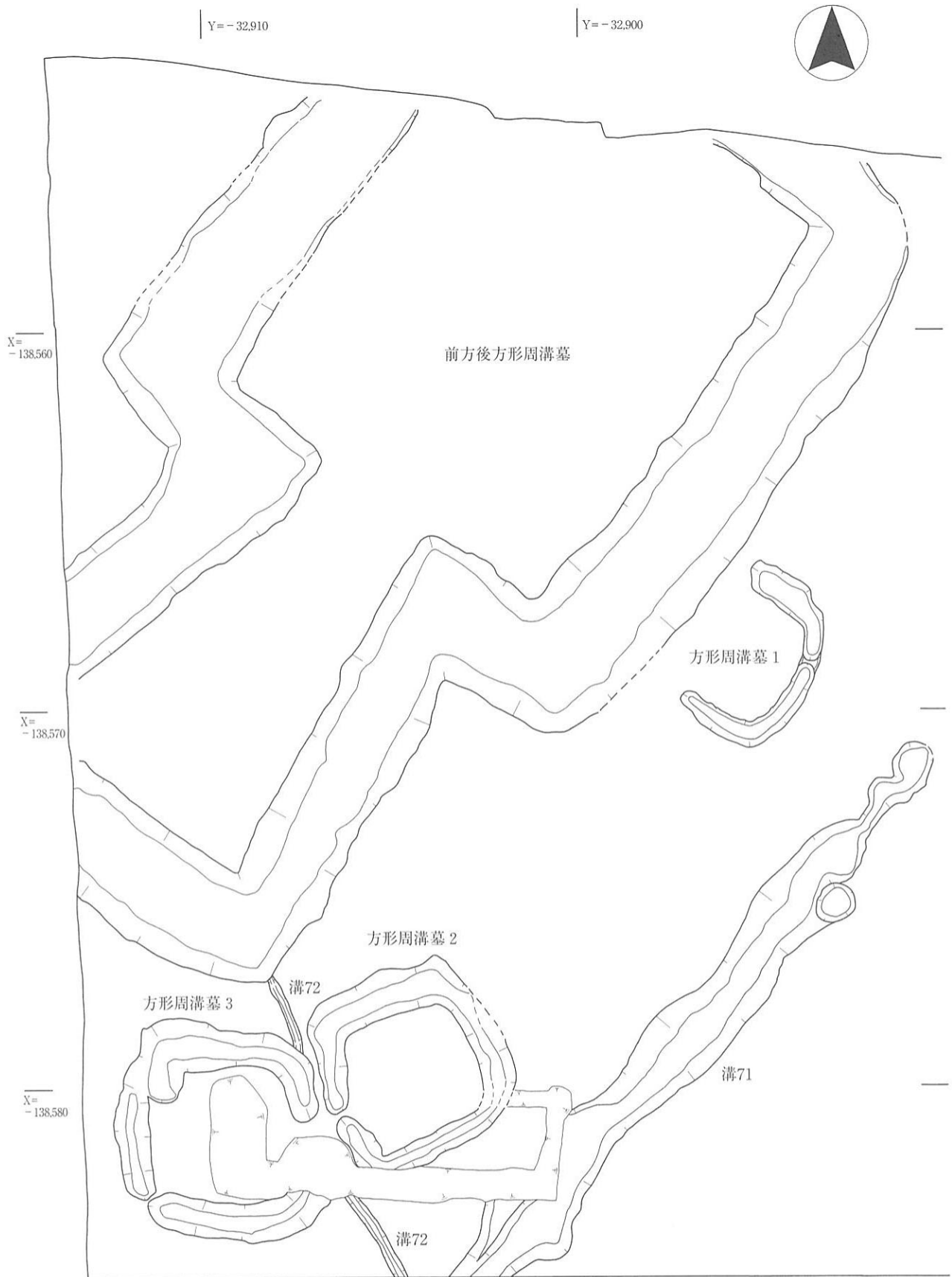


図10 前方後方形周溝墓・方形周溝墓遺構実測図

下層はシルト層である。前方部側の周溝底部はテラス状になっている。周溝内からは点々と遺物が出土し、中には口縁部を下にして封土から転落したような状態で出土した土器もある。出土した土器の大半は口縁部を波状文、円形浮文、竹管文で飾った二重口縁壺で、表面全体に赤色顔料を塗ったものがある。他に器台、生駒西麓の胎土をもつ甕が出土している。封土はすでに流失していると思われ、主体部は検出できなかった。

方形周溝墓1は前方後方形周溝墓の後方部の南東で検出した。北西部を除いた三方にコの字形に溝が巡っている。北西部に溝はないが、前方後方形周溝墓の周溝を利用して方形の区画をなしていると考えられる。方形周溝墓1の幅は2.9mで、周溝の幅は0.6~1.1m、深さは0.3mである。東側周溝の北から約3分の1の地点で、周溝底が島状に高くなっている。

方形周溝墓2・3は前方後方形周溝墓の南東隅で2基並んで検出した。方形周溝墓2は一辺3.4m、周溝の幅0.6~1.1m、深さ0.2~0.4mを測り、西側に陸橋部をもつ。周溝内から二重口縁の壺などが出土している。方形周溝墓3は一辺3.5×3.8m、周溝の幅0.9~1.4m、深さ0.3~0.45mを測る。方形周

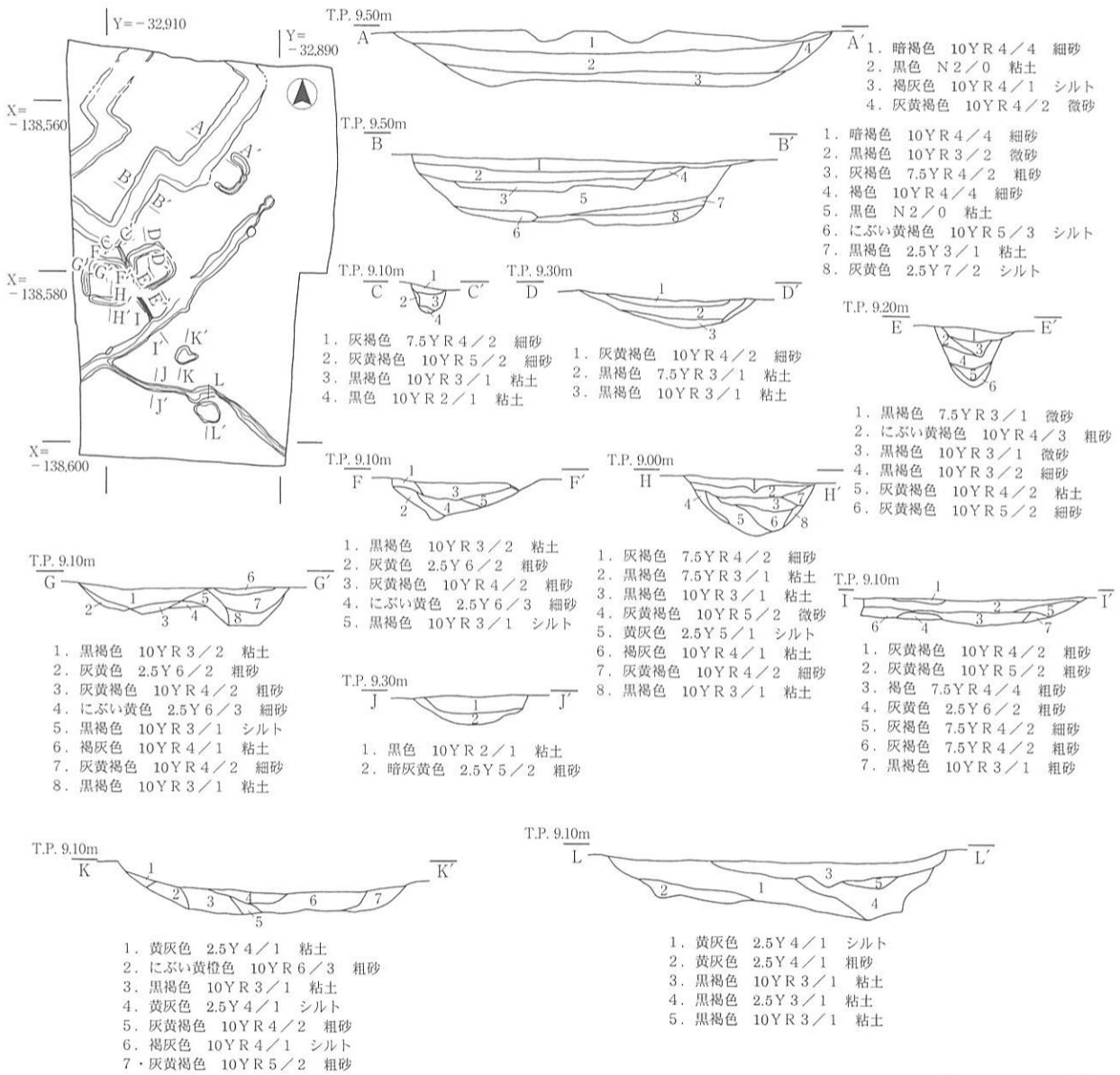


図11 1区遺構断面図



溝墓2と接する東側に陸橋部をもち、方形周溝墓2と繋がっている。また、北溝と西溝の接続部に不整合な部分があり、西溝は南溝とも重なっていない。これらの状況からみて、方形周溝墓3は東側に陸橋部を残して北と南に溝を掘り、最後に西側の溝を掘ったと考えられる。いずれの方形周溝墓も封土が既に流失しており、主体部は検出できなかった。

溝71は前方後方形周溝墓と平行に流れ、幅1.2~1.8m、深さ0.2~0.5mを測る。埋土は基本的に砂層で、水が流れていた状況をよく物語っている。溝73は溝71から分流し南東に流れる。幅は0.4~1.2m、深さは0.3~0.5mである。埋土は上層が黒色の粘土で、下層は粗砂層である。溝72は断面V字形をした溝で、前方後方形周溝墓の南東隅から方形周溝墓3の北溝に繋がり、同墳の東溝から溝71に合流する。幅は0.25m、深さ0.2~0.3mを測る。

土坑は、不整形なものが多く底部の凹凸も激しい。人工的なものか自然なものかを含めて性格は不明なものが多い。2区で検出した土坑の大半は、断面が楕円状を呈し、埋土も砂層が同心円状に堆積しており明らかに急激な水の流れによって形成された所謂ポット・ホールであると思われる。

1A区で、縄文時代の土坑を検出した。円形を呈し、径0.7m、深さ0.7mを測る。底部近くから縄文時代前期初頭の土器が出土している。

(4) 第4面の遺構 (図12)

第4面では、縄文時代の自然流路を検出した。自然流路は、1C区と3C区の下層確認トレンチで検出した。1C区で検出した溝90は、丘陵堆積層の淵に沿うように流れており、幅は6m以上あり、深さは1.5~2.0mである。

3C区では下層確認トレンチの断面観察からではあるが、4条の流路を確認した。第7層下面で重なり合った2条の流路、第8層の下面で2条の流路を検出した。向かい合う壁面の観察から、流路は南東から北西に流れの方向をもつことを確認した。第8層下面で検出した南側の流路の深さは0.8m、北側の流路の底部は確認できなかった。どちらの流路からも縄文時代前期に属する土器が出土している。

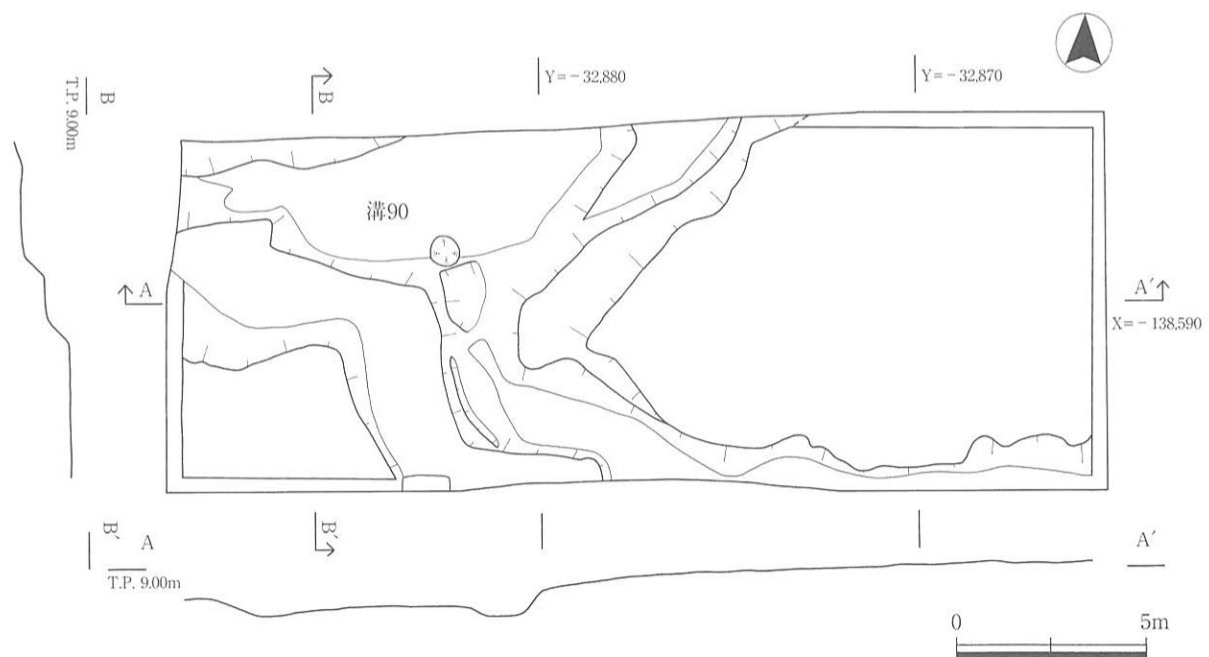


図12 1区下層確認トレンチ (第4面) 平面図

3. 遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査によって出土した主な遺物には、以下のものがある。江戸時代の遺物には美濃・瀬戸系の天目茶碗、唐津陶器、肥前磁器（染付）を含む陶磁器、煙管などがある。

中世の遺物には、土師器、瓦器（椀・皿・火舎）、焼締陶器、輸入磁器（白磁・青磁）、渡来銭（政和通寶・皇宋通寶・太平通寶）などがある。

奈良時代から平安時代の遺物には、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦などがある。

古墳時代の遺物には、土師器（庄内から布留式併行期）があり、主に周溝墓から出土している。他に須恵器（杯身・蓋、甕、器台、臍）、韓式土器、円筒埴輪、紡錘車、砥石などがある。

縄文時代の遺物には、縄文時代前期の土器（大歳山式・北白川下層Ⅲ式）、石鏃、磨石、石皿、サヌカイト片などが出土している。

(2) 中・近世の土器

1は唐津焼の皿で、内面と口縁部に灰緑色の釉がかかる。胎土・焼成ともに良好で、内底面に胎土目が認められる。

2～6は土師器の皿で、2～5は口径7～9cmの小型のものである。いずれも口縁部と内面はナデによる調整を施し、底部は軽く指オサエをしている。色調は黄橙色を呈し、焼成・胎土とも良い。6は口径12cmを測り、口縁部と内面はナデによる調整を施し、底部は軽く指オサエをしている。色調は浅黄橙色で、胎土は精良であるが焼成はやや不良である。

7は瓦器の皿で、底部は丸みをおび内面に鋸歯状の暗文がはいる。口縁部と内面はナデによる調整を施し、底部は軽く指オサエをする。

8は土師質の羽釜の鏝部で、二次焼成を受けて表面が磨滅しているがナデによる調整されていると思われる。

9は東播系の須恵質の播鉢で、体・口縁部が真っ直ぐ外上方にのび、口縁部の外側に面をもつ。口縁外部は重ね焼きの痕跡を残して黒くなっている。色調は灰色で、胎土中に長石などの砂粒を多く含むが焼成は良好である。回転ナデによる調整を施す。

10は陶器の甕で、灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。口縁部は短く立ち上がり、端部は外方に丸みを帯びる。胴部にタタキ調整、他は回転ナデを施す。胴部と口縁部との接合の痕跡が観察できる。

11～13は、中国から輸入された白磁である。椀の口縁部（12）と底部（13）、壺の口縁部（11）がある。12は、所謂玉縁の口縁である。13は削り出しで成形され、低い高台をもつ。壺の口縁部は外上方にのび、端部はほぼ垂直に下がる。

8・11は1A区の第1層、7は1A区の第2層、2・3・9・12は1A区第3層、6・13は2B区第2層、10は2B区第2層、4・5は2B区第3層、1は3B区第3層から出土している。

(3) 古代の土器・瓦

14～16は須恵器の杯蓋である。16は天井・口縁部が平坦で器高は低く、口縁部は短く外反して下り端部は丸い。14・15は、天井部は平坦で、口縁部は下外方にのび端部は内側に屈曲する。いずれも天井部の一部をヘラケズリ、他は回転ナデによる調整を施し、色調は灰白色を呈し、胎土・焼成とも良好であ

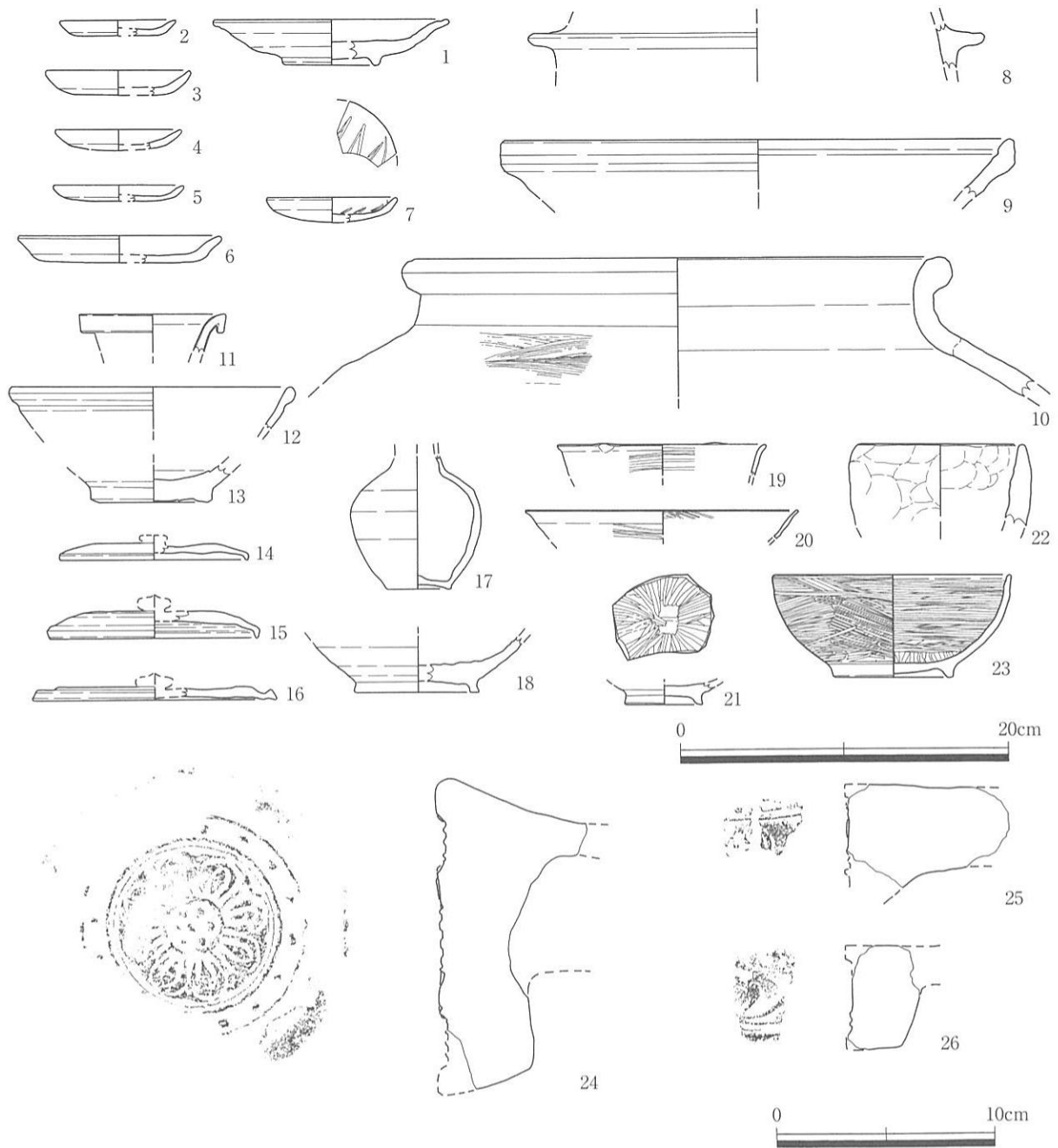


図13 土器・瓦実測図（中世・古代）

る。また、天井部に墨書がされている杯蓋があるが、文字が不鮮明なため読解は不可能である。

18は須恵器の台付壺の高台部で、外表面は灰色、底部と内表面は灰白色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

17は須恵器の小型の瓶子で、口縁部を欠くがほぼ完形である。色調は灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。底部は上げ底気味で糸切り痕を残し、他は回転ナデを施す。

22は製塩土器で、灰色で胎土中に多くの砂粒を含み、焼成は良好である、粘土紐を巻き上げて手捏ねによって成形しており、内外面に指オサエの痕跡が残る。

23は黒色土器のBタイプの椀で、体部は丸みをもって立ち上がり口縁部は若干外反する。口縁端部内面に沈線が廻る。高台断面は台形を呈する。内外面とも緻密なミガキを施し、内底面には鋸歯状の暗文がはいる。

緑釉陶器の椀の口縁部が2点(19・20)出土している。口縁端部が短く外上方に伸び、輪花をもつもの(21)がある。いずれも胎土は須恵質で、内外面とも密にヘラミガキを施し、焼成は良好である。19は緑色、20は濃緑色の釉が施される。21は断面台形の高台がつく緑釉陶器の底部で、胎土は須恵質で、釉は銀化して灰黒色を呈す。内底面を中心にして放射状に密な磨きが施されている。

軒丸瓦(24)は、寝屋川市史第一巻で高宮廃寺軒丸瓦のC類に分類されたものである。複弁四葉の蓮華文軒丸瓦で、中房に1+6の蓮子、外区に16珠子が配される、周縁に鋸歯文が施されている。平城宮出土の6314-Aに分類されているものと同范の瓦である。軒平瓦は2点(25・26)出土しているが、どちらも小片で詳細は不明であるが、寝屋川市史第一巻でC類に分類されたものと思われる。

21は1区第1層、23は2区第1層、19・20は3区第1層、14・16・17・22・25は1区第3層、18は3区第3層、15は1区第4層、24は2区の土坑8から、26は3区第1面の鋤溝から出土している。

(4) 古墳時代の土器

周溝墓出土土器 出土した土器はいずれも土師器で、27～37・39・42は壺である。27は口縁部から胴部下半にかけて残る。端部は僅かに外傾し、上方に摘み上げる。口縁内外面とも上方に波状文を施す。この波状文は、施文具の両端を交互に基点として扇形をつなぐように施文している。口縁内部の波状文の施文方向が左から右であるのに対し、外面は右から左方向へ施文されている。口縁下方は縦方向に丁寧なミガキを施す。このミガキは波状文に消されている。頸部はヨコナデを施す。また、接合状態から頸部は胴部の上へのせられる形で接合されるのが観察された。胴部上位には直線文と扇形を呈する波状文が施される。波状文の施文方向は左から右である。胴部中位から下位にかけては、横方向のハケ目調整の後、斜方向にミガキが施される。このミガキは文様帯の一部を消している。胴部内面は下方にハケ目調整が見られる。外面は口縁から胴部下半、内面は口縁部に朱が僅かに残存している。灰白色を呈し、胎土は精良である。口径19.3cm、残存高21.2cmを測る。

28は口縁部から胴部下半にかけて残る。口縁端部は外傾する面をなし、下方へ小さく肥厚するとともにごく緩い凹線文を配する。口縁部外側には4条の波状文、口縁下端には2個一対の円形浮文と竹管文を配する。胴部上方には上から、波状文、直線文、波状文、竹管文の順番に施文されている。調整は口縁内部にヨコナデの後、細いミガキを施す。頸部はヨコナデ、胴部はハケ調整後、ヨコミガキを施す。胴部内面は下半から上半にかけて斜めにハケ調整が施される。胴部上端から頸部付近にかけて一部シボリと指頭痕が観察される。また頸部は、接合痕の状態から、胴部に嵌め込むように接合されたと考えられる。口径17.5cm、残存高17.0cmを測る。外面は灰白色、内面は黄灰色を呈し、胎土は精良である。

29は口縁部分のみ残る。口縁は外傾し、外上方に小さくひきだす。胴部と頸部の境にはハケ調整が施される。復元口径は18.1cm、残存高は口縁が3cm、頸部が3.3cmを測る。内外面ともに灰白色を呈し、胎土は精良である。

30は口縁部から頸部にかけて残る。口縁は外傾する面をなし、下方へ小さく肥厚する。口縁内部に1条、外部に3条の波状文が施文される。口縁下端には2個一単位の円形浮文を配する。胴部と頸部の境には紐帯がみられ、その紐帯を挟んで2列の刺突文が施される。調整は口縁部と頸部の一部にナデが観察された。復元口径は18.5cm、残存高は7.3cmを測る。内外面とも灰白色を呈し、胎土は精良である。

31は口縁部から頸部にかけて残る。口縁端部は外傾し、やや薄く舌状におさめる。口縁下方に残る接合痕から、粘土を貼り付け、三角形の突帯をなしていたと考えられる。頸部は下方でやや広がる。口縁内外面ともに波状文が施され、ほぼ均等の幅で円形浮文が配される。口縁端部には切り込み状の斜線文

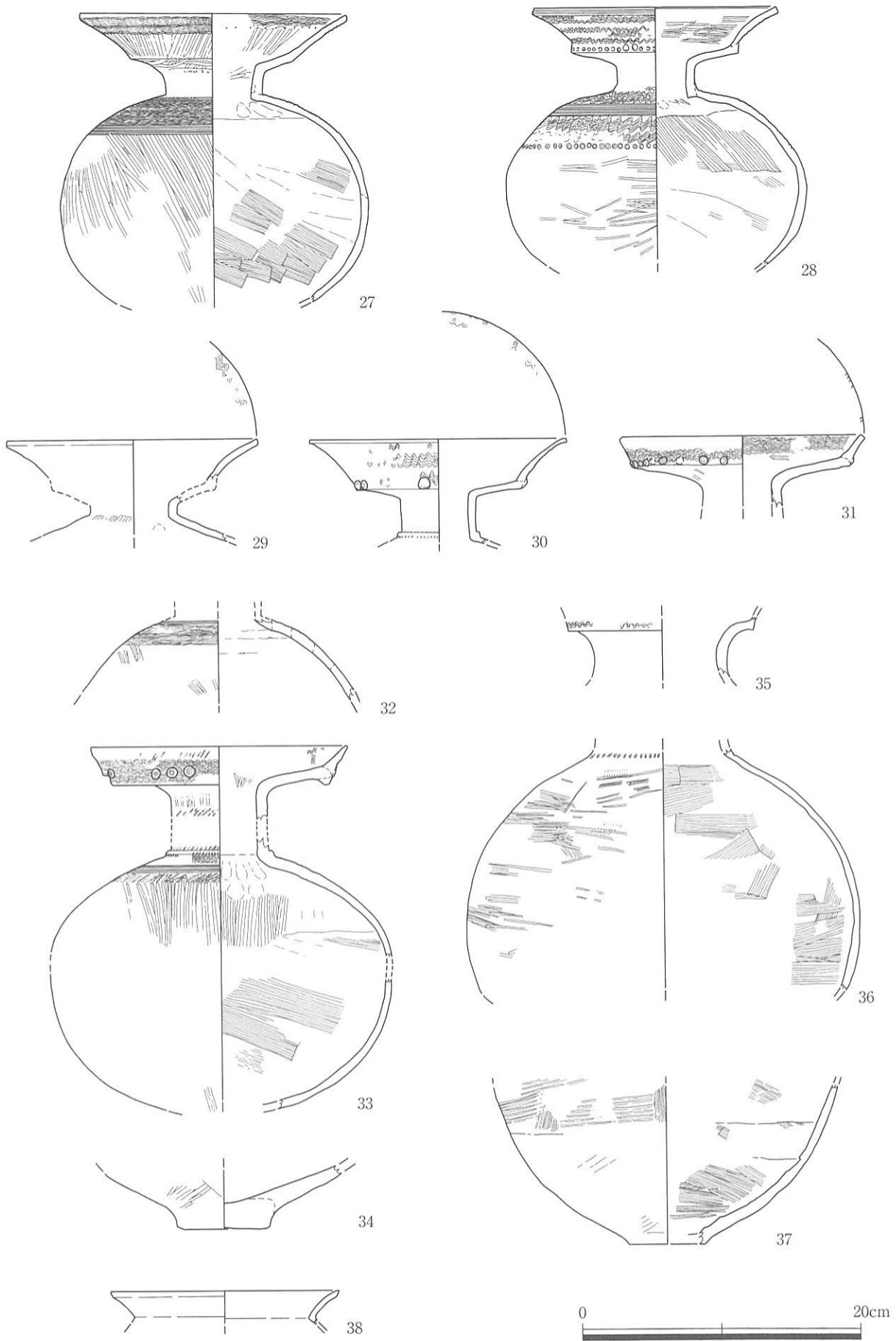


図14 土器実測図（古墳時代）（1）

がみられる。調整は口縁内部にヨコミガキ、口縁外部にタテミガキが僅かに観察される。口径は17.6cm、残存高は5.1cmを測る。灰白色を呈し、胎土は精良である。

32は胴部中位から上半が残存する。胴部上半には上から直線文、波状文が2条施文される。波状文は左から右方向に施文される。外面には僅かに朱が残存している。胴部に斜め方向のミガキが入る。このミガキは波状文を消していない。内面・肩部は斜めにナデを立ち上げたのちヨコナデを施す。肩部に接合痕が観察される。頸部径7.9cm、残存高5.9cmを測る。外面は灰白色、内面は黒色を呈す。胎土は精良である。

33は、口縁端部は外傾し、やや薄く舌状におさめる。口縁下方には三角形の突帯がある。口縁内外面ともに波状文、口縁上端と頸部下半には貝殻の腹縁によると思われる斜線文が施文される。口縁部外面には3個一単位の円形浮文が配される。頸部外面にタテミガキ、内面では口縁部と頸部の境にタテミガキが施される。

胴部上位には波状文、直線文、貝殻の腹縁による斜線文が施される。頸部の突帯部分には刺突文、頸部には貝殻の腹縁によると思われる斜線文が観察された。調整は胴部外面ではタテミガキを施す。このタテミガキは斜線文を一部消している。内面は胴部中位では斜めハケ、上位ではタテハケ、頸部付近では指頭痕が観察された。胴部下半は外面では底部近くに縦ミガキ、内面には斜め方向にハケ目が施された。底部は欠損しているが、穿孔しているものかは不明である。口径18.4cm、復元高は約26cmを測る。外面は浅黄橙色、胴部内面は褐灰色を呈し、胎土は精良である。

34は底部から胴部下位にかけて残存する。胴部外面には斜め方向にミガキが入る。底径6.8cm、残存

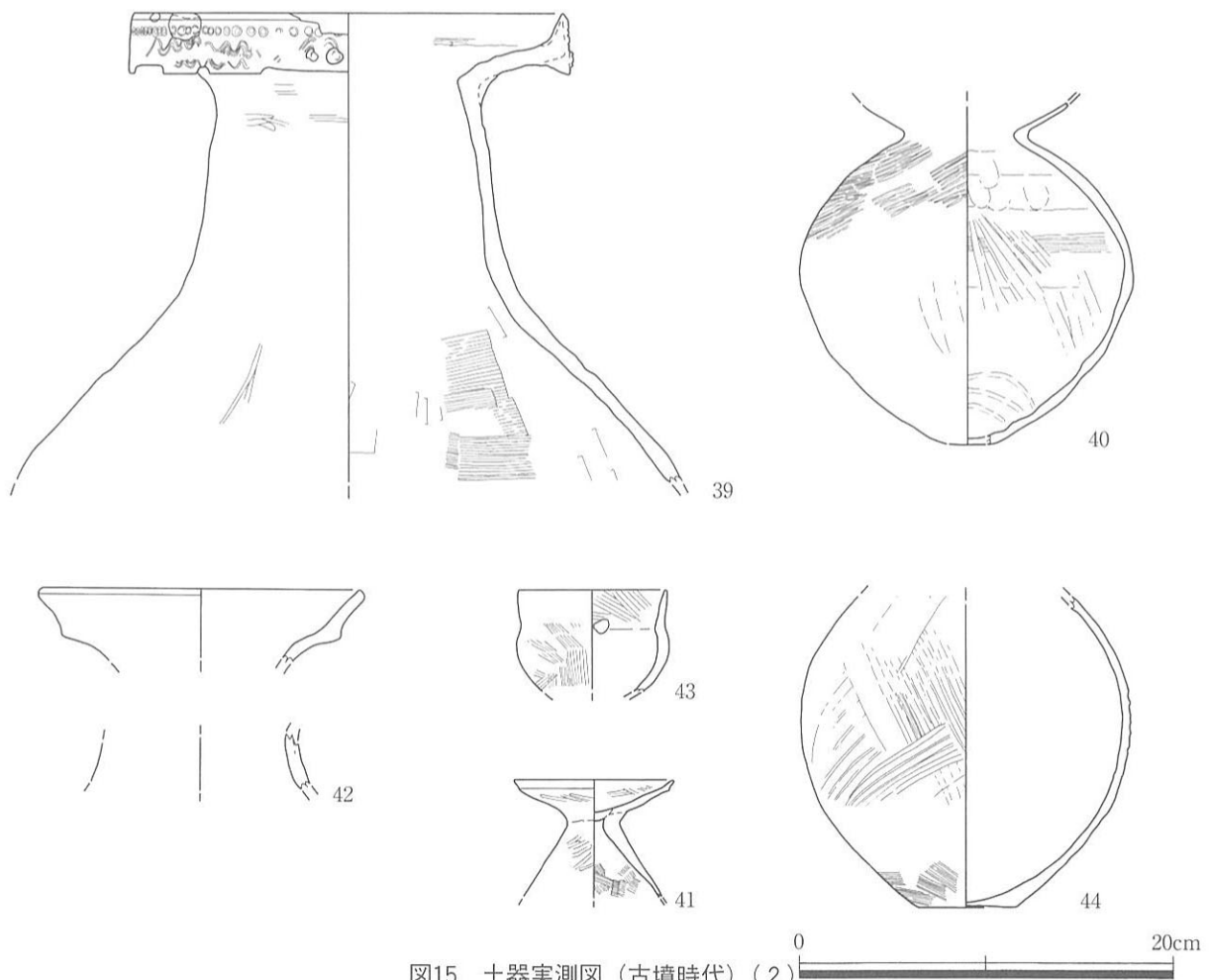


図15 土器実測図（古墳時代）（2）

高4.4cmを測る。内面は灰白色、外面は淡黄色を呈す。胎土は精良である。

35・36は、同一個体と考えられる壺である。頸部は大きく外傾する。口縁部は残存していないが、頸部と胴部の境目には先端部分が二つに分かれる刺突文が施される。調整は頸部では内外面ともにナデが施される。胴部外面は縦・斜め方向にハケ目調整のあと、一部にナデが見られるほかは、横・斜め方向に細いミガキが入る。内面は横、もしくは斜め方向にハケ目が見られた。35は残存口径が13.8cm、残存高は4.2cmを測る。外面は浅黄色、内面は灰白色を呈す。胎土は精良である。36は最大径が28.4cm、残存高21.0cmを測る。外面は浅黄色、内面は灰白色を呈す。胎土は精良である。

37は、胴部下半が残存する。底部は欠損しているが、穿孔したものかは不明である。調整は外面全体にタタキが見られるほか、部分的にタテハケ、ナデを施している。内面には斜方向にハケが施される。残存高は11.8cmを測る。内外面ともに灰黄色を呈す。胎土は精良である。35・36と同一個体の可能性もある。

39は胴部上半から口縁にかけて残存する長頸壺である。口縁部は立ち上がりを見せ、口縁端部外側部分はやや内側に傾く。口縁下方には三角形の突帯が見られる。調整は内側では口縁部にヨコミガキ、頸部にナデ、胴部上半には横方向のハケが観察された。このハケの原体幅は約1.5cmから4cmの差がある。外側では口縁と頸部の境にヨコミガキ、胴部上半にタテミガキが施されている。口縁部には竹管文、波状文、円形浮文が施される。口径23cm、残存高24.8cmを測る。外面は浅赤橙から浅黄橙色、内面は淡黄色を呈す。胎土は精良である。

42は、口縁部と頸部が残存する。口縁部外面にヨコナデが施されている他は、遺存状態が悪く、調整は不明である。口径は17.4cm内外面ともににぶい橙色を呈し、胎土は精良である。

38・40は、甕である。40の口縁部は完存していないが、頸部から外側へ薄く伸びている。胴部の最大径はやや胴部上方にある。調整は外面では口縁部にナデ、胴部上位にタタキが見られる。胴部中位には部分的にハケ目、胴部下位にはスリナデが観察された。内面では口縁部にナデ、胴部上位には輪積み痕、指頭痕が見られる。胴部中位には横方向のハケ目、中位から下位にはケズリが見られる。底部付近には調整によってできた凹凸が顕著に見られる。最大径17.9cm、残存高18.2cmを測る。内面は黒褐色、外面は暗褐色から黒褐色を呈し、所謂生駒西麓の胎土を有する。胎土は精良である。

38は頸部から口縁部にかけて残存する。口縁部は外反し、口縁端部は薄く舌状になる。調整は口縁端部と口縁外面にナデを施す。暗褐色を呈し、所謂生駒西麓の胎土を有する。

41は器台で、受け部との境は貫通している。口縁端部は外上方へ引き出し、舌状におさまる。調整は坏部内面と外面にミガキ、台部内面下位から中位にかけて斜め方向にハケが観察された。口径は8.6cm、残存高は6.2cmを測る。内外面ともに淡黄色を呈し、胎土は精良である。

43は小型鉢で、口縁部から胴部下位まで残存する。小さな扁球形の胴部から、口縁は外上方に舌状におさまる。口縁部内面にはヨコナデの後、粗いハケ目が施される。口縁部外面と胴部内面にはヨコナデ、胴部外面に斜めから縦方向の粗いハケ目が施される。黒色から灰黄褐色を呈す。胎土は精良である。復元口径8.0cm、残存高5.4cmを測る。

26～41は前方後方形周溝墓から、42・43は方形周溝墓2から出土している。

包含層・その他遺構出土土器・埴輪 44～46は、土師器の甕である。44は底部から胴部上位まで残存する。胴部外面中位に貝殻の腹縁によると思われる調整と煤が観察された。また、胴部下半には目の細かいハケ調整がなされる。内外面ともに淡黄色を呈す。胎土はやや粗い。

45は胴部上半がほぼ直線的に内側にのび、口縁部は短く外上方にのび端部は外下方につまみだされる。黄橙色を呈し、胎土中に雲母・長石などの砂粒を多く含む。胴部は横方向の粗い平行タタキ、他はナデによる調整を施している。

46は体部から口縁部へ「く」の字形に屈曲し、端部は丸みをおびる。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に砂粒を多く含み焼成はよくない。表面が磨滅しているが、体部はタタキが施され他はナデによる調整とみられる。

47は二重口縁壺の口縁部で、真っ直ぐ外上方へのび上端は狭い面をつくる。内側はハケ目、他はナデによる調整を施す。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は砂粒を若干含むが精良、焼成も良好である。

49は土師器の壺の底部で、色調は浅黄橙色を呈し、胎土中に長石などの砂粒を多く含み焼成は良好である。表面の磨滅が激しく調整の詳細な観察はできない。48は土師質のかまどの底部分で、成形時の指圧痕が残る。表面は橙色で内部は黒色呈する。

50は須恵器の杯蓋で、天井部は丸みをおび口縁端部は内側に面をなす。天井頂部はヘラ切りのまま、

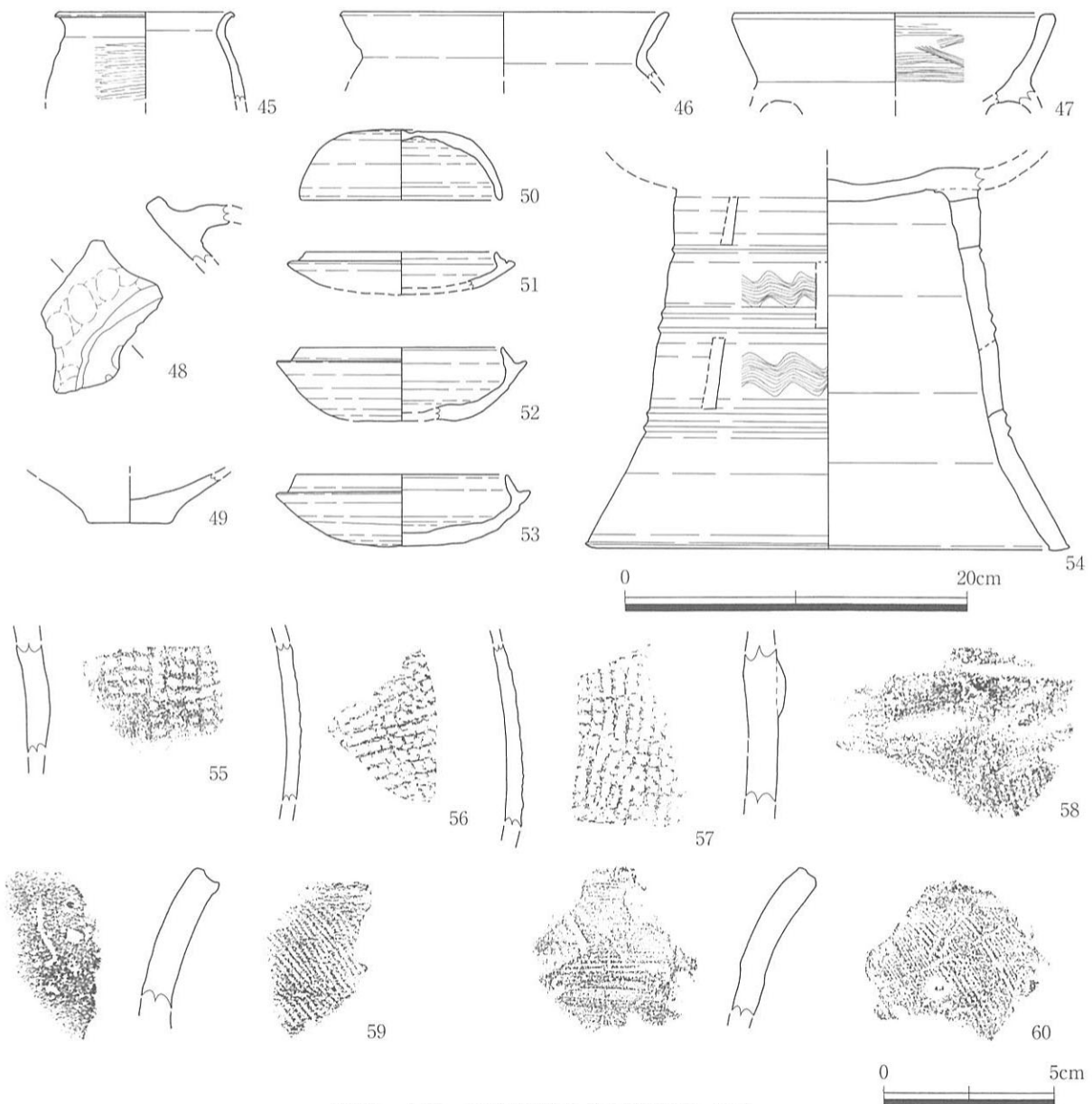


図16 土器・埴輪実測図（古墳時代）（3）

体部との境はヘラ削り、他は回転ナデによる調整を施す。色調は灰白色を呈し、胎土中に黒色の砂粒を含み焼成はあまりよくない。TK209に属する。

51はたちあがり扁平な須恵器の杯身で、受部はほぼ水平に外方にのび、受部の上面に1条の沈線が廻る。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。回転ナデによる調整を施す。TK209に属する。52・53は須恵器の杯身である。たちあがり内傾度が大きく端面は丸くおさめられ、たちあがり先端部も丸みをおびる。底部は逆時計回りの方向にヘラ削り、他は回転ナデによる調整を施している。いずれも色調は灰色を呈し、胎土中に長石粒を若干含むが焼成は良好である。TK43に属する

54は須恵器の器台で、復元ではあるが脚部をほぼ図示することができた。脚部はわずかに外反しながら裾へひろがり、脚端部は断面四角である。上から1条、2条、2条の凸帯によって脚部を4区に分け、上3区に長方形の透かしが設けられ、中央の2区には波状文が巡る。全体に回転ナデによる調整を施している。色調は灰色を呈し、胎土中に空洞になった部分が見うけられるが焼成は良好である。

55～57は、韓式土器の甕の胴部である。いずれも外面には格子目のタタキが残るが、内面は丁寧にナデ消されている。色調は表面が暗灰色、内部はセピア色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

58～60は、円筒埴輪の破片である。58は土師質の埴輪片で、磨滅が激しいが縦方向のハケ目をわずかに確認することができる。幅約2cmの扁平なタガが貼りつく。色調は橙色で、胎土中に長石などの砂粒を含み、焼成は良好である。59・60は須恵質の埴輪で、ともに口縁部で、外方に開き端部は外側に面をもつ。59の色調は外表面が橙色、内部は緑灰色を呈し、外面は縦方向のハケ目、他はナデによる調整

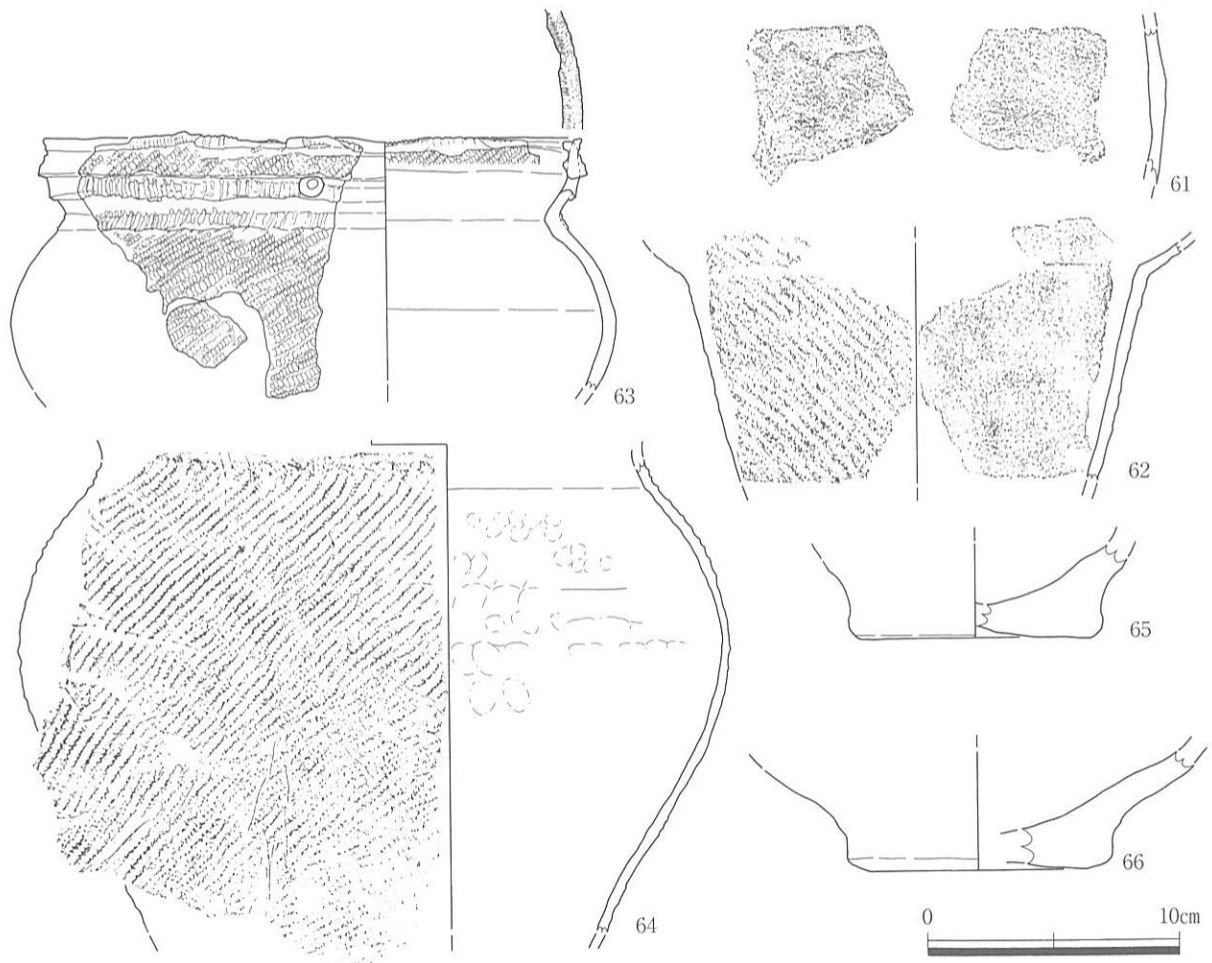


図17 縄文土器実測図

を施す。60は、酸化炎焼成され表面が赤色を呈し、外面は左下がりの斜め方向のハケ目、他はナデによる調整を施す。外面にヘラ記号がみられる。いずれも胎土・焼成とも良好である。

58は3 A区第1面の鋤溝、45は2 A区第1層、55・56・59は2 B区第1層、60は1 A区第2層、57は2 B区第2層、49・53は1 A区第3層、51は1 C区第3層、54は1 B・C区第3層、47は2 A区第3層、50は3 B区第3層、34は1 A区第4層、32は1 B区第4層、28は3 A区の土坑8から出土している。

(5) 縄文時代の土器

61は深鉢の胴部の破片で、外面に斜め方向の条痕がみられるが、内面は丁寧なナデ調整である。色調は外面が黒褐色、内面は灰褐色である。胎土は密で石英・長石・黒雲母を含み、焼成は良好である。前期初頭の土器ではないかと思われる。

64は深鉢の頸部から胴部で、外面は原体の長さが約3cmのLR縄文を地文としており、頸部に原体の端部痕を残す。内面は横方向の指圧痕が認められる。色調は外面がにぶい黄橙色、内面は灰白色である。胎土はやや粗く径0.5~2mmの石英・長石・雲母を含み、焼成は良好である。前期の北白川下層Ⅲ式に属する。

63は深鉢の口縁部から胴部上半にかけての良好な資料である。口唇部をY字状に肥厚させて押し引き、直下の刻み目凸帯に穿孔している。内面はこの孔より上に煤が付着しており、木蓋などの使用が推測される。外面は、口縁部・頸部に凸帯を巡らせ、刺突状の刻みを加える。煤が付着している。胴部は、原体の長さが約3cmのLR縄文を地文としている。内面は口縁部をやや肥厚させ、LR縄文を施す。頸部から胴部は、丁寧な調整である。色調は外面が灰黄褐色、内面はにぶい黄橙色である。胎土は密で、

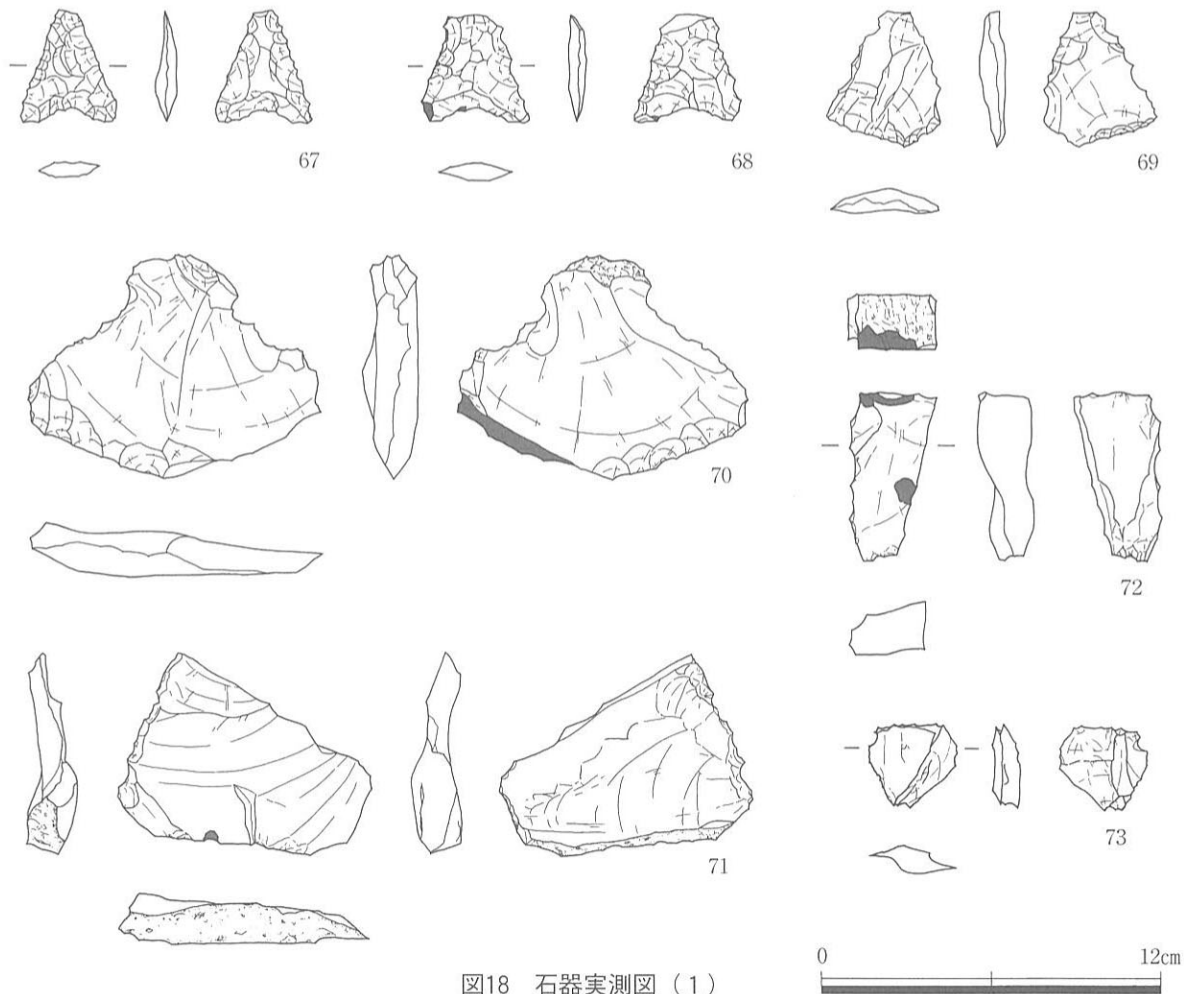


図18 石器実測図(1)

径0.1~1mmの石英・長石を含み、焼成は良好である。前期末の大歳山式に属する。

62は、口縁部から胴部に「く」の字状に屈曲し、胴部はほぼ直線的に下方に伸びる。外面はRL縄文を施し、内面は丁寧なナデ調整である。色調は外面が灰黄褐色、内面はにぶい黄褐色である。胎土はやや粗く、0.1~2mmの長石・石英を多く含む。前期末の大歳山式に属する。65・66は深鉢もしくは浅鉢の底部で、内面は緩やかな曲線を描き、丁寧なナデを施す。65の色調は外面が黒褐色、内面は褐灰色である。胎土は密で径1~5mmの長石・雲母を多く含み、焼成は良好である。66の色調は外面が黒褐色、内面は黄灰色である。胎土はやや粗く径1~5mmの石英・長石を多く含み、焼成はやや甘い。ど

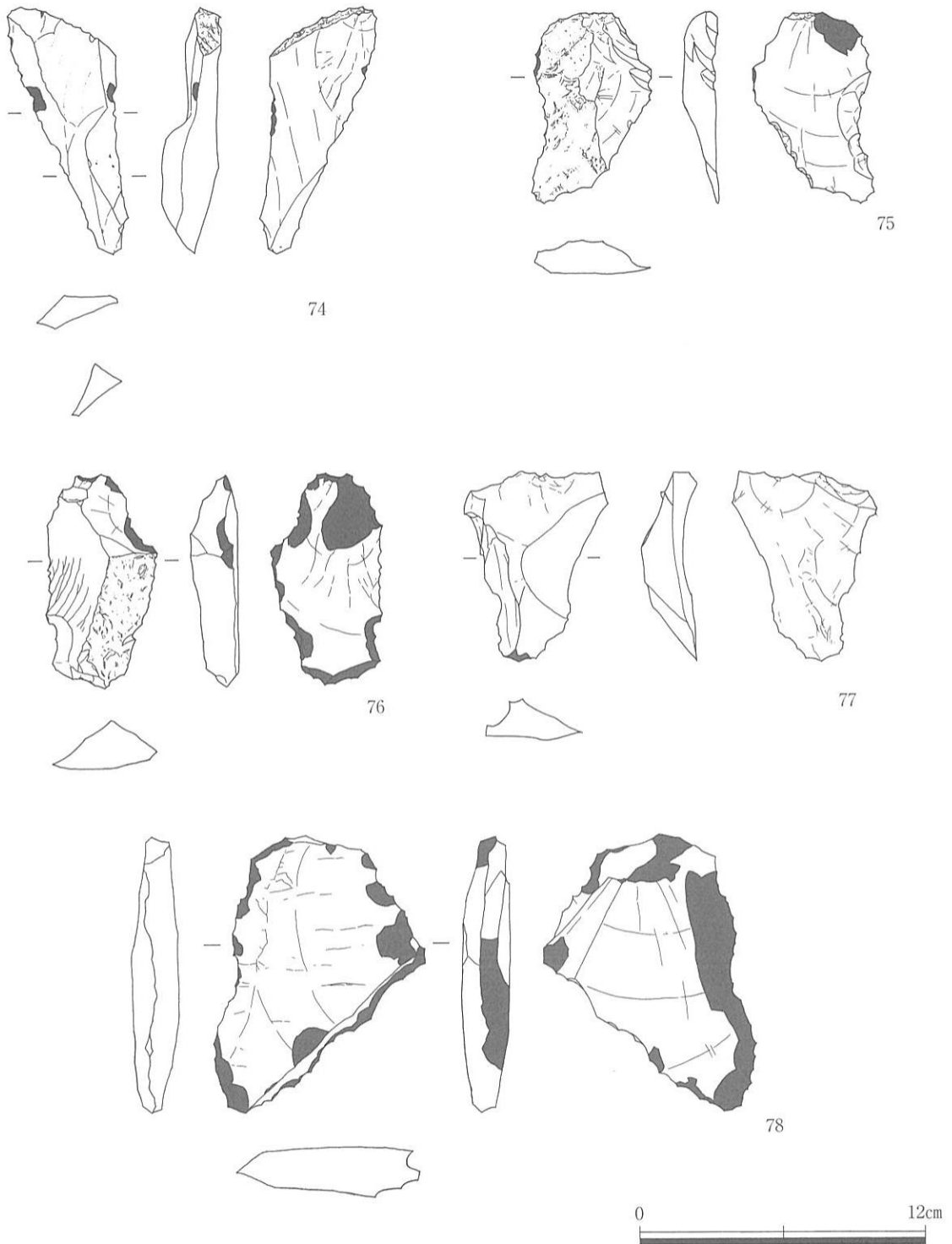


図19 石器実測図(2)

ちらも時期の特定は難しいが、晩期の土器と見られる。

61は1 A区の土坑61、63と64は3 C区下層確認トレンチの第8層下で確認された南側の溝、62は同じく北側の溝、65は1 C区の第3層、66は1 A区の第4層からそれぞれ出土している。

(6) 石器・石製品

全調査区をあわせて39点の石器と石製品が出土している。各石器・石製品は、いずれも平面的なまとまりのない包含層からの出土であって、出土状況から帰属時期を明確にしえないが、ひとまず、いわゆる剥片石器と礫石器、石製品におおきく分け、さらに器種認定をしたかたちで記述を進める。分類の結

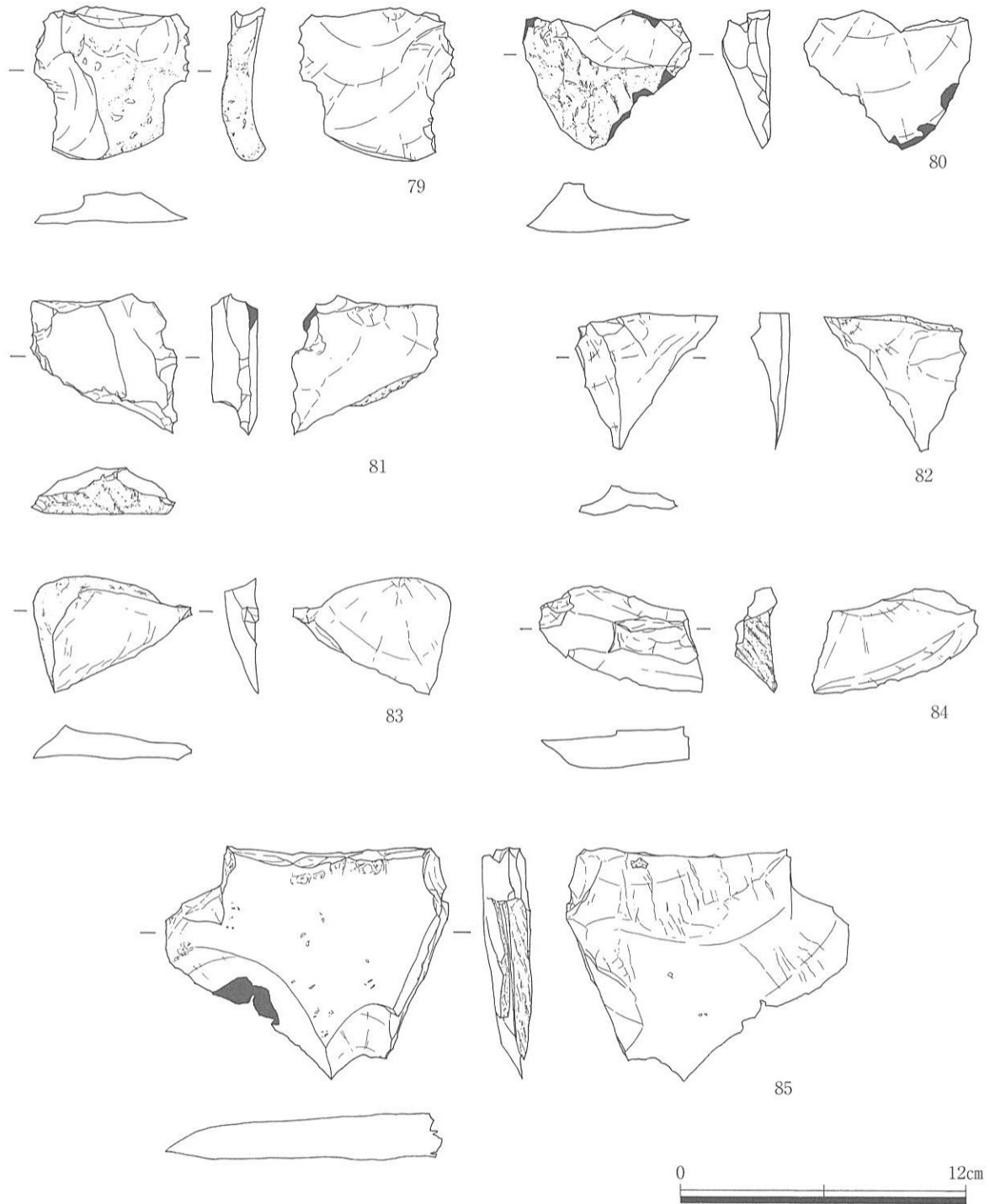


図20 石器実測図(3)

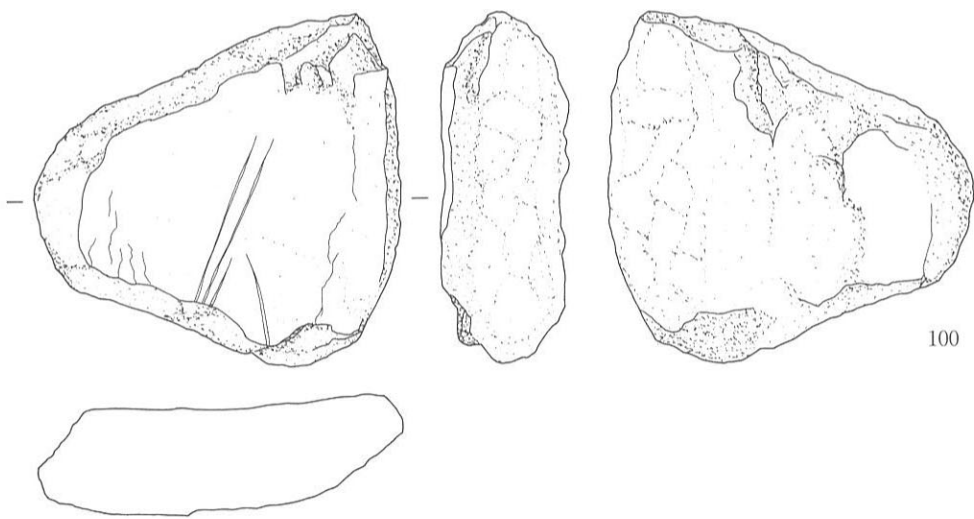
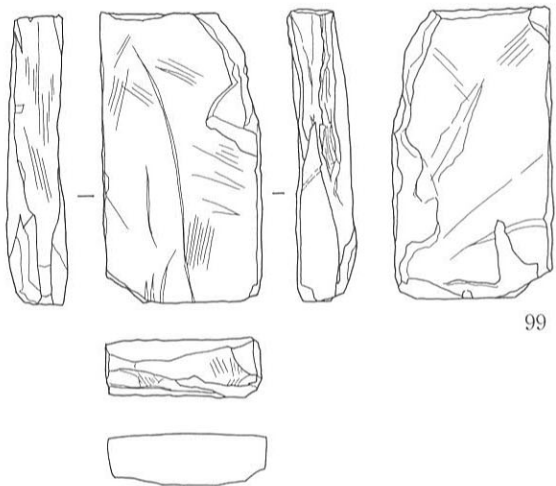
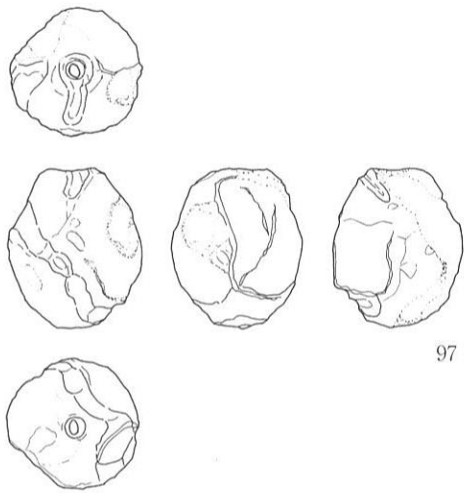
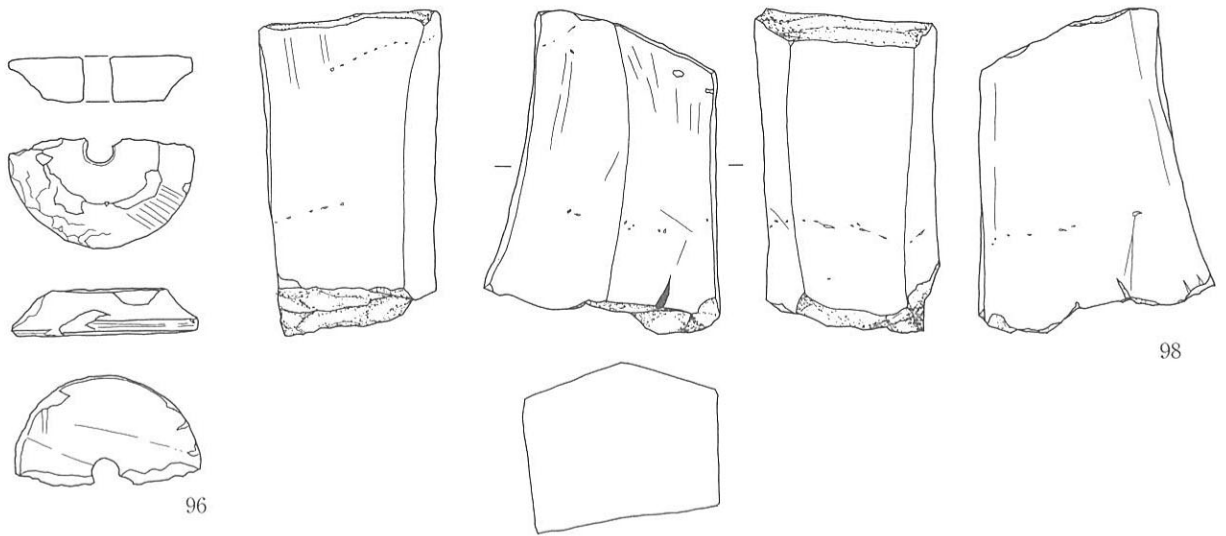


图21 石器实测图（4）

果は、剥片石器が29点と礫石器5点、石製品が5点となる。器種は、剥片石器が石鏃2点と石匙1点、楔形石器2点、二次加工のある剥片1点、剥片23点で、礫石器が磨石4点、石皿1点で、石製品が紡錘車1点と石錘1点、砥石3点である。これらの石材は、剥片石器がサヌカイトを主体としてほかにチャートが、礫石器が花崗岩、石製品が凝灰岩や粘板岩、泥岩を用いている。次に、各石器と石製品の所見を述べたい。なお、各石器と石製品の出土地点や法量などは表1の通りである。

67・68は石鏃で、サヌカイト製の側縁が直線的に整形された凹基無茎のものである。調整剥離は、両側縁と基部に両面から素材の中央部まで及ぶような剥離が不連続になされている。

70は石匙で、サヌカイト製の横長剥片を素材としたものであり、下辺に両面から調整剥離がなされている。打面となる上面に自然面が残っており、上部はつまみ状を呈している。ただ、裏面の側縁部剥離は、下辺の調整剥離などと比べて剥離面の風化具合が割に新しいことから、機能時につまみ部があったどうかの疑念が残る。

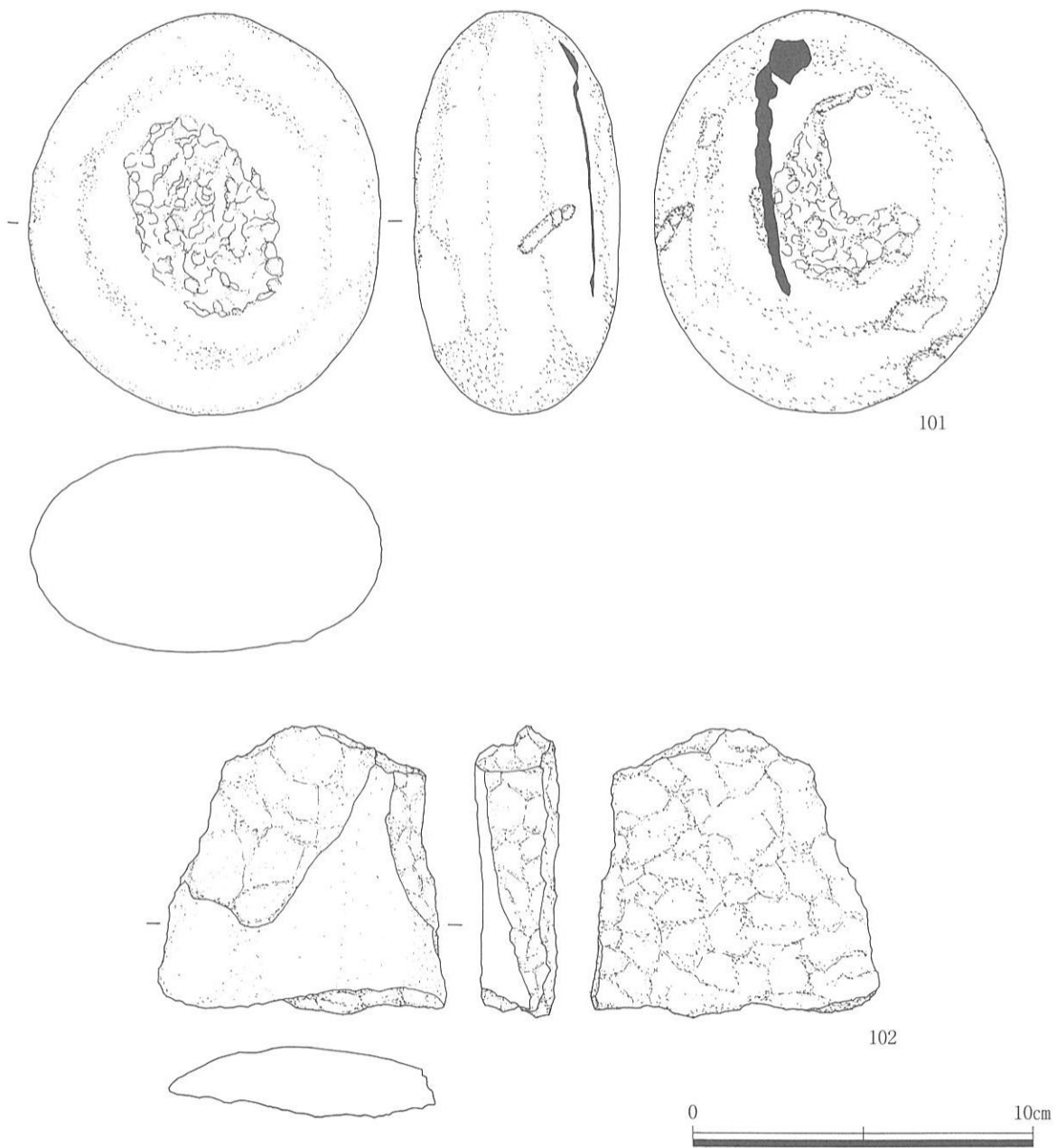


図22 石器実測図(5)

71・72は、サヌカイト製の楔形石器である。素材となる剥片はともに自然面が残っている。剥離は、左・右側辺に対向するものが確認でき、72は下辺で潰れが確認できる。赤茶色チャートの73は、楔形剥片の碎片であろう。

69は二次加工のある剥片で、赤茶色チャート製であり、下辺に両面から細かな調整剥離がなされている。調整剥離は、裏面の上部にも確認できるが、整形を意図したものか定かでない。

剥片は、出土した23点中で比較して大きめのものを任意に抽出し図示した。これらは、形状に縦長を

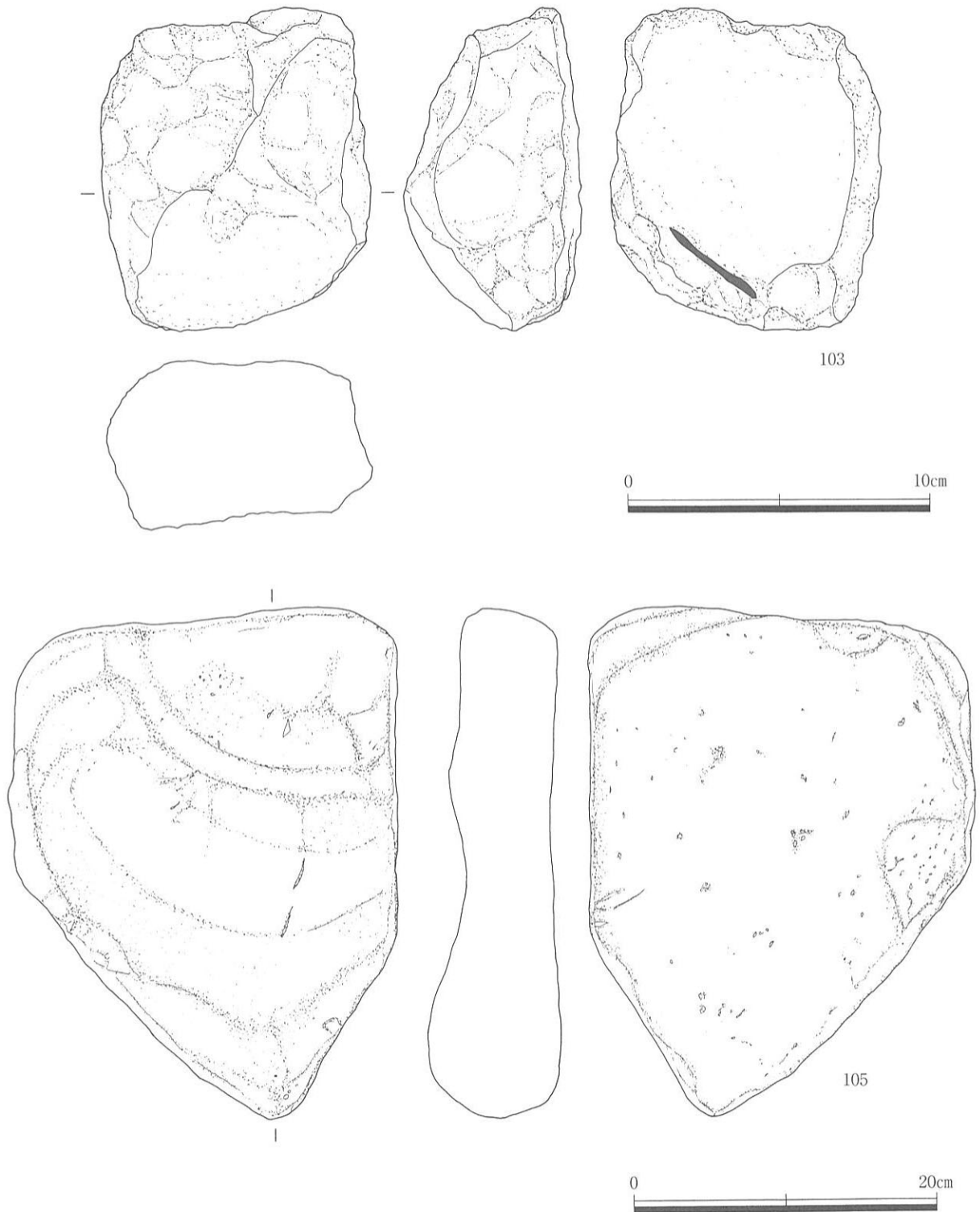


図23 石器実測図（6）

表1 石器・石製品観察表

遺物番号	地区	地点	層位・遺構	時期	器種	法量(mm)			重量(g)	石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚			
67	1 A	F 9-g 7-II	第2層	縄文	石鏃	21	21	4	1.5	サスカイト	
68	2 B	F10-e 3-III・IV	第3層	縄文	石鏃	22	19	3	1.2	サスカイト	
69	2 A	F10	中世竊溝	縄文	石匙	44	58	11	30	サスカイト	
70	1 C	F 9-I 8-III	第7層	縄文	楔形石器	40	50	10	14.2	サスカイト	
71	1 A	F10-g 1	第2層	縄文	楔形石器	34	18	11	7.2	サスカイト	
72	2 B	F10-d 3	第5層	縄文	剥片	17	17	5	1.4	チャート	楔片?
73	1 A	I-6-16	旧耕土	縄文	剥片	27	22	5	2.5	チャート	二次加工
74	2 A	F10	中世竊溝	縄文	剥片	58	28	14	10.3	サスカイト	自然面残
75	2 A	F10-c 5-III	第2層	縄文	剥片	45	28	8	9.5	サスカイト	自然面残
76	2 A	F10-c 4-IV	第3層	縄文	剥片	50	26	11	12.3	サスカイト	自然面残
77	1 A	F 9-g 7-II	第2層	縄文	剥片	44	34	13	10.3	サスカイト	
78	2 A	F10	壁面清掃	縄文	剥片	65	50	12	38.1	サスカイト	
79	1 A	F 9-f10	第2層	縄文	剥片	36	36	10	10	サスカイト	自然面残
80	1 A	F 9-h 7	第2層	縄文	剥片	33	40	11	10.7	サスカイト	自然面残
81	3 C	F10-i 4	第3層	縄文	剥片	33	35	11	12	サスカイト	自然面残
82	3 A	F10-h 4-I	第2層	縄文	剥片	33	34	9	4.5	サスカイト	自然面残
83	2 A	F10-e 3	中世竊溝	縄文	剥片	27	37	8	5.7	サスカイト	自然面残
84	2 B	F10-d 5-III	中世竊溝	縄文	剥片	25	38	10	7.4	サスカイト	自然面残
85	2 B	F10-d 3	第5層	縄文	剥片	55	67	12	44.6	サスカイト	自然面残
86	1 A	F 9-f10、g10、h10	第3層上面	縄文	剥片	26	25	10	5.8	サスカイト	
87	1 C	F 9-k 7	第1層	縄文	剥片	48	27	5	6.1	サスカイト	
88	2 A	F10-c 4	第2層?	縄文	剥片	39	32	8	5.8	サスカイト	
89	3 A	F10-g 3、h 3	中世竊溝	縄文	剥片	34	15	8	3.3	サスカイト	風化著しい
90	1 A	F10-f 1・2、g 1・2	第1層	縄文	剥片	16	20	4	1.3	サスカイト	
91	1 A	F 9-h10、g10	第1層	縄文	剥片	18	40	8	2.8	サスカイト	
92	1 A	F 9-g 7-III	第2層	縄文	剥片	21.5	25	5.5	1.8	サスカイト	
93	1 B	F10-i 1	第2層	縄文	剥片	18	22	4	1.2	サスカイト	
94	2 A	F10-b 4	第2層	縄文	剥片	17	24	4	1.6	サスカイト	
95	2 B	F10-d 4-I・III	第3層	縄文	剥片	21.5	34	10	5.6	サスカイト	
96	1 C	F 9-I 8	第4層	古墳	紡錘車	-	49	12	23	粘板岩	
97	1 C	F 9	竊溝掘り	弥生~古墳	石錘	42	35	-	59.6	凝灰岩	
98	1 A	F10-g 1-III	前方後方形周溝墓	古墳	砥石	79	63	37	315	凝岩	
99	3 A	F10-g 3・4	第1層	弥生~古墳	砥石	76	42	14	75.3	粘板岩	
100	1 B	F10-i 2	第3層	縄文?	砥石	93	97	29	327.9	砂岩?	
101	1 C	F 9-I 8-III	溝90	縄文	磨石	84	84	21	179.5	花崗岩	
102	3 C	F10-i 4-III	第7層	縄文	磨石	118	102	60	1000	花崗岩	
103	1 C	F 9-I 8	第8層	縄文	磨石	102	89	54	660	花崗岩	
104	3 C	F10-i 4-I	第7層	縄文	磨石	81	72	38	290.5	花崗岩	
105	1 C	F 9-I 8-IV	第8層	縄文	石皿	255	334	86	11270	花崗岩	

指向するもの(図19)と横長なもの(図20)があるが、意図的に作出されたものかは判断しかねる。これらは、打面部を折損などで欠くものが多く(80・84)、打面が残るものでは自然面を打面とする(74・82・83)ものや剥離面を打面としたものがある。また、これら剥片は、自然面が残ったものも多くあり、その残り方を見ると表面に残るもの(75・76・79・80)や上面に残るもの(74・82・83)、下面に残るもの(81)、側面に残るもの(84・85)がある。裏・表面の剥離面構成は、裏面が基本的に1枚から、表面が1~3枚からなる。

紡錘車(96)は、粘板岩製で断面形が台形を呈する。中央の軸孔は、上面から底面にむかって穿たれている。表面と側面・裏面には細かな磨痕が確認できる。

石錘(97)は、凝灰岩製で卵形を呈する。軸孔は、上面と下面の二方向から穿たれている。

砥石は、泥岩製で断面形が五角形のもの(98)、粘板岩製で断面形が長方形のもの(99)などがある。磨痕は、98が表面の二面と裏面に、99が上面以外の面に確認できる。表面に線状痕跡が確認できる砂岩製の100も砥石であろう。

磨石(101~104)は、花崗岩製のものである。101は、表面と裏面に敲打痕が、側面に不明瞭ながら播痕が確認できる。102~104は、残存する表面と裏面に明確な播痕が確認できなかった。

石皿(105)は、花崗岩製で、表面の中央付近になめらかな面をもつ凹みがある。側面は、播痕状の痕跡が確認できるが、使用によるものかは判断しかねる。

以上が各石器・石製品の所見だが、ここで改めて帰属時期に触れておきたい。各石器・石製品の帰属時期は、上記のごとく出土状況からの情報を欠くが、石器・石製品に残された技術的・形態的情報から、67~95・100~105が縄文時代に、97・99が弥生時代~古墳時代に、96・98は古墳時代それぞれに属しよう。

(註) 砥石や磨石などで使用痕跡の表記名は、「擦痕」や「磨痕」というのが一般的なようである。しかし、「擦る(掃る)」や「磨る」は、辞書からすると前者が「つぶす、こする」で、後者が「磨く」で用いられている。そこで、今回は、想定される用

途から考えて砥石に「磨痕」を、磨石などに「搨痕」をあてがっている。こうした表記名は、従前と異なるために混乱を招く恐れがあるが、上記の理由からこの表記名に理解いただきたい。

(7) 金属製品

中国からの輸入銭貨が3点出土している。皇宋通寶(106)・太平通寶(107)・政和通寶(108)で、いずれも宋銭である。鉄製品(109)は、手斧状を呈するが、両側に刃状の傾きをもつが、先端部には刃部がみられず平坦であり、用途は不明である。他の1点(110)は板状を呈し、厚さが約5mmを測り両側に鈍い刃を持つ。両端は失われている。用途は不明である。また、二次堆積層からの出土と思われる、詳細な年代は不明である。

106~108は1A区の第2層、109は3A区の第1層、110は3B区の第1面の耕作溝から出土している。

(8) 土製品

111は土製の円盤で、土師器の皿の底部もしくは甕の胴部を円形に打ち欠いて成形している。用途は不明である。

112は不明土製品で、手捏ねで成形され何かの器物または動物を模して作られたものと思われるが詳細は不明である。一部に線刻がみられる。

113は須恵器の甕腹片を転用した硯で、内面は磨滅し墨痕が残る。

111は1C区・第1面の鋤溝、112は2A区第3層、113は1B区第3層から出土している。

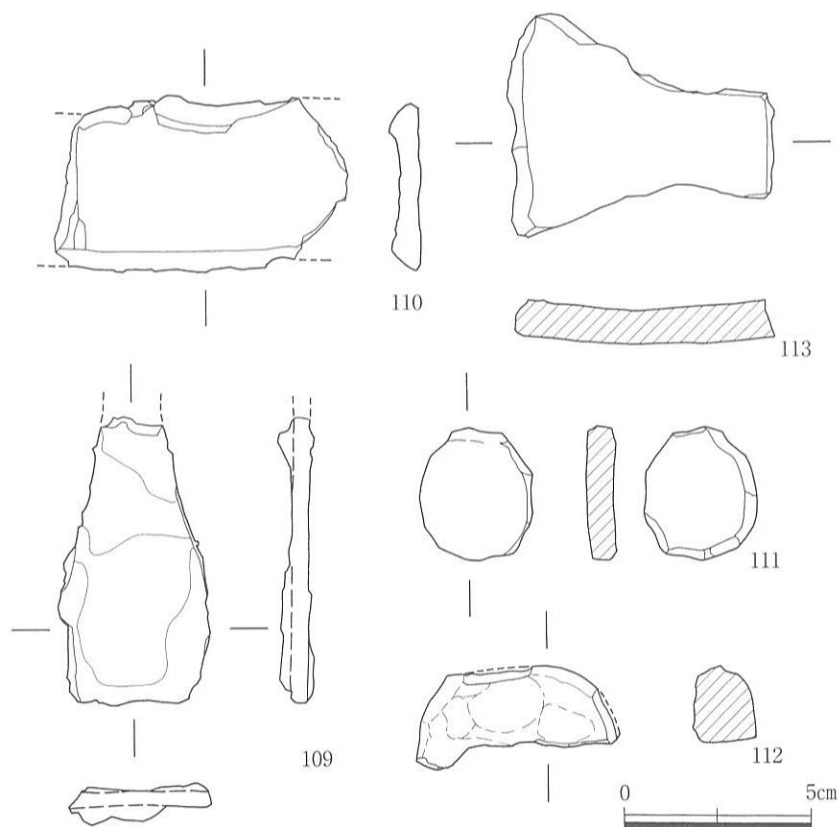


図24 鉄器・土製品実測図

VI. 自然科学的分析

1. 放射性炭素年代測定

山形秀樹 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

小路遺跡 (その3) より検出された木片の加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定法を実施した。

(2) 試料と方法

試料は、小路遺跡 (その3) から出土した木材の年輪の外側部分より採取した木片2点である。木片その3 Sh-1は、1C区下層確認トレンチで検出した溝90の北壁断面の最下層から、木片その3 Sh-2は、3C区下層確認トレンチの13層 (北側の下層流路) から出土している。

これらの試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定した¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

(3) 結果

表2に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値 (yrBP) の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確立が68%であることを意味する。

なお、暦年代の較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期5,730 \pm 40年) を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

¹⁴C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB4.3 (CALIB3.0のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正值は¹⁴C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

(4) 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として

示された。

表2 放射線炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	資料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{pdb}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-2089 (AMS)	木片 その3 Sh-1	-27.1	4710 \pm 25	cal BC3515 cal BC3395 cal BC3385	cal BC3620-3600 (20.8%) cal BC3525-3500 (22.5%) cal BC3430-3380 (56.7%)
PLD-2090 (AMS)	木片 その3 Sh-2	-27.0	4675 \pm 25	cal BC3500 cal BC3455 cal BC3445 cal BC3435 cal BC3380	cal BC3515-3495 (22.2%) cal BC3470-3410 (67.2%) cal BC3385-3375 (10.6%)

引用文献

中村俊夫 2000年『放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代』p. 3-20

Stuiver, M. And Reimer, P. J. 1993 Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p. 215-230

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. 1998 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0cal BP, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083

2. 小路遺跡の花粉化石群集

新山雅広 (パレオ・ラボ)

(1) 資料

花粉化石群集の検討は、1 C区A地点壁断面より採取された7資料 (A 1～A 7) および1 C区B地点壁断面より採取された8資料 (B 1～B 8) の合計15資料について行った。以下に、各資料の簡単な記載を示す。なお、資料の時代については、縄文時代以前と考えられており、15資料全てについて珪藻化石群集の検討も行われた。

◎1 C区A地点壁断面採取資料 (7資料: A 1～A 7)

A 1は、暗灰黄色シルト。A 2は、暗灰黄色シルトで褐鉄鉱が認められる。A 3は、黒褐色砂質粘土で小礫 ($\phi 1 \sim 3$ mm程度) を多く含む。A 4、は黄灰色シルト質粘土で褐鉄鉱が認められる。A 5は、黄灰色シルト質粘土。A 6は、灰黄色シルト質粘土。A 7は、黄灰色粘土混じり砂礫。

◎1 C区B地点壁断面採取資料 (8資料: B 1～B 8)

B 1はA 1と同一層で、以下A 2 - B 3、A 3 - B 4、A 4 - B 5、A 5 - B 6、A 6 - B 7、A 7 - B 8が各々対応している。B 2は、黒褐色～黄灰色シルト。

(2) 方法

花粉化石の抽出は、資料約2～3gを10%水酸化カリウム処理 (湯煎約15分) による粒子分離、傾斜法による粗流砂除去、フッ化水素酸処理 (約30分) による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理 (水酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分) の順に物理・科学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離 (臭化亜鉛を比重2.1に調整) による有機物の濃集を行った。プレパラート作成には、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後にマイクロペットでとり、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。

(3) 化石群集の記載

全資料で同定された分類群数は、草本花粉2、形態分類で示したシダ植物孢子1であり、樹木花粉は全く産出しなかった。草本花粉は、B 3でカヤツリグサ科、A 5でヨモギ属が僅かに産出した。シダ植物孢子は、単条型孢子がA 5、B 3で産出し、A 5ではやや目立った。なお、A 5、B 3を除く13資料は、B 4で不明花粉が産出した他は、花粉・孢子化石は、全く産出しなかった。

(4) 考察

検討した結果、合計15資料のうち12資料は、花粉・孢子化石は全く産出せず、残りの3資料も産出した花粉・孢子化石はごく僅かであった。花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、花粉化石が全くないし殆ど産出しないことから、資料とした堆積物は水成環境で安定して堆積したものは考え難い。なお、珪藻化石群集の検討においても、確認された珪藻化石は僅かであることから、水成堆積物の可能性は非常に低いと考えられる。

表3 花粉化石産出一覧表

和名	学名	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B8
草本																
カヤツリグサ科	Cyperaceae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
ヨモギ属	Artemisia	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シダ植物																
単条型孢子	Monolete spore	—	—	—	—	19	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
草本花粉	Nonarboreal pollen	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
シダ植物孢子	Spores	0	0	0	0	19	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
花粉・孢子総数	Total Pollen and Spores	0	0	0	0	20	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
不明花粉	Unknown pollen	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0

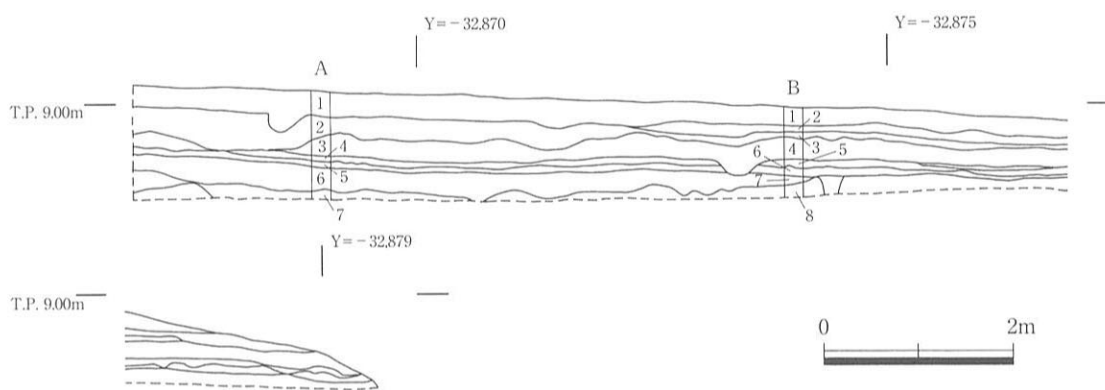


図25 花粉・珪藻化石採取地点

3. 小路遺跡の珪藻化石群集

黒澤一男 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

珪藻は、淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小 (0.01~0.5mm程度) ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また、種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。

ここでは、小路遺跡から採取された堆積物試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

(2) 試料及び分析方法

分析試料には、1 C区A地点から採取された7試料 (Sh-A 1~7) と、B地点から採取された8試料 (Sh-B 1~8) の計15試料を用いた。1・2・9層 (Sh-A 1・2・4、Sh-B 1・3・5) の堆積物は概ね粘土からなる堆積物、4~6・8・11層 (Sh-A 3・5~7、Sh-B 2・4・6~8) の堆積物は概ね砂が卓越した堆積物である。それらの試料について以下の珪藻分析を行った。

①試料を湿潤重量で約2~10g程度取り出し、秤量した後にトールビーカーに移し、30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

②反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回以上繰り返し行った。

③ビーカーに残った残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア (封入剤) で封入し、プレパラートを作成した。

④各プレパラートを光学顕微鏡下400~1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が200個体に満たない試料についてはプレパラート前面を精査した。

(3) 藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤 (1990) のより設定された環境指標種群に基づいた。安藤 (1990) は淡水域における環境指標種群を設定した。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、広布種として扱った。また、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に安藤 (1990) において設定された環境指標種群の概要を記す。

[上流性河川指標種群 (J)] : 河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群。

[中~下流性河川指標種群 (K)] : 中~下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。

[最下流性河川指標種群 (L)] : 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群。

[湖沼浮遊性指標種群 (M)] : 推進が1.5m以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する種群。

[湖沼沼沢湿地指標種群 (N)] : 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種として優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群。

[沼沢湿地付着生指標種群 (O)] : 水深が1m内外で、一面に植物が繁茂している所および湿地で、付着状態で優勢な出現が見られる種群。

[高層湿原指標種群 (P)] : ミズゴケを種とした植物群落および泥炭地の発達が見られる場所に出現す

る種群。

[陸域指標種群 (Q)]：前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群（陸生珪藻）。

表4 珪酸化石産出表（種群は小杉・1988に基づく）

分類群	1 C区A地点							1 C区B地点								
	種群	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	A 7	B 1	B 2	B 3	B 4	B 5	B 6	B 7	B 8
<i>Cymbella aspera</i>	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Melosira</i> spp.	?	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Unknown	?	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
沼沢湿地付着生 (O)		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明 (?)		-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-	2	-	-
珪藻殻数		1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	2	0	0

(4) 検出された珪藻化石（表4）

全試料で珪藻化石が非常に少なく、検出されない試料が多くを占める（Sh-2～5、Sh-1・3・5・7・8）。そのため前述の珪藻化石の環境指標種群を用いた堆積環境の検討は不可能である。

(5) おわりに

小路遺跡の堆積物中に含まれる珪藻化石を分析した結果、全体的に珪藻化石が非常に希薄であった。珪藻は、水成植物であるため水分の少ない乾燥した環境においては生育しないことから、乾燥した環境下であったことが考えられる。同一の試料で行った花粉化石の検討でも同様に非常に希薄であった。花粉化石は明らかな水成堆積物においては良好に保存されるが、土壌などでは保存されない。このことから比較的乾燥した環境であったと考えられる。

引用文献

安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42号 73-88頁

IV. まとめ

小路遺跡は、1977年小学生が水田から弥生時代後期の土器を採集したことによって発見された遺跡であるが、今までその実態は明らかではなかった。今回の調査で、縄文時代から近世までの遺構を検出し、小路遺跡の実態とその変遷の一端を窺い知ることができた。

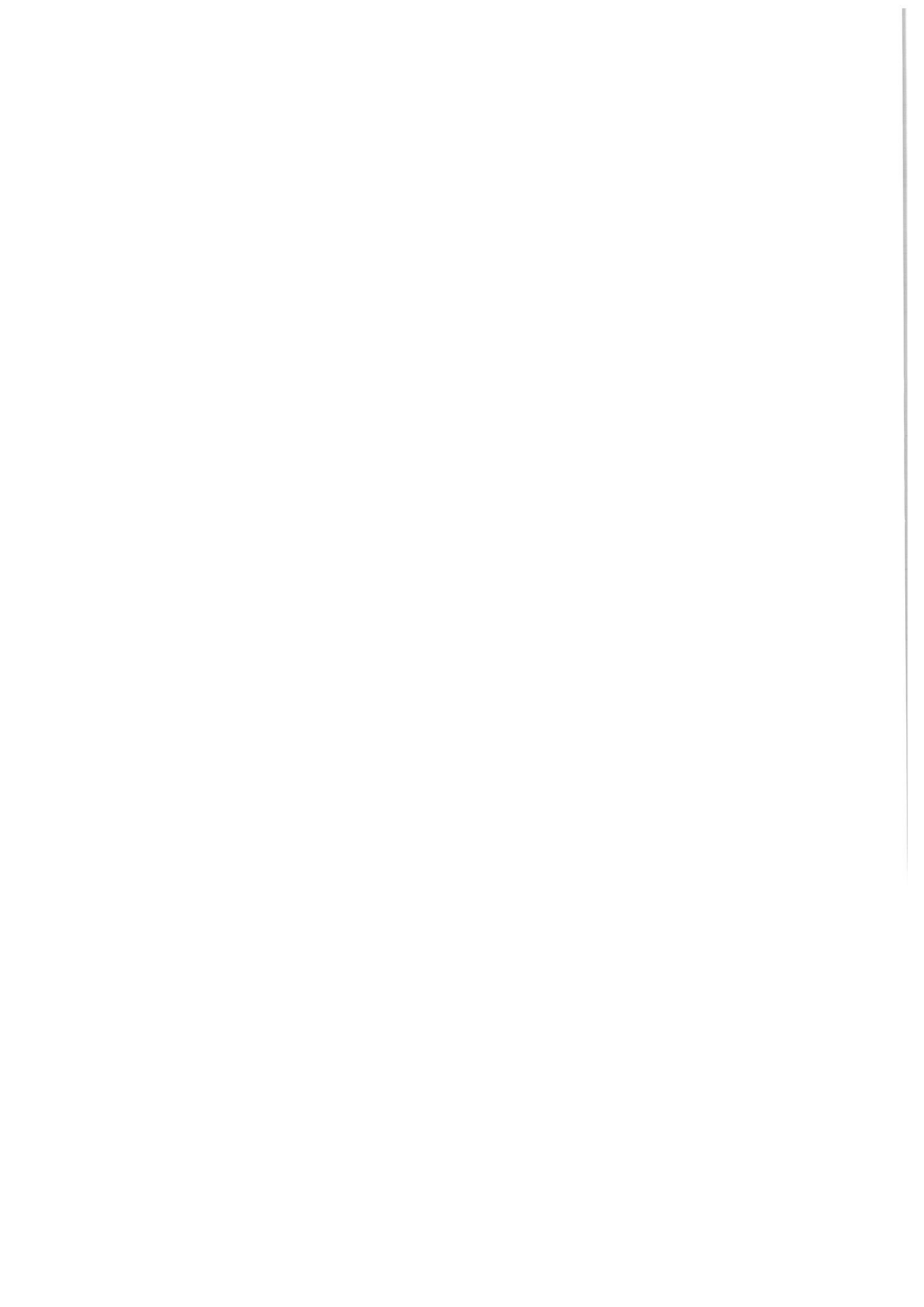
小路遺跡での人の足跡は、縄文時代前期まで遡れることが分った。縄文前期の土器は、流路から出土しているものが多いが、ほとんど磨滅しておらず比較的破片も大きいことから、調査区周辺で生活跡が検出される可能性が高いと思われる。

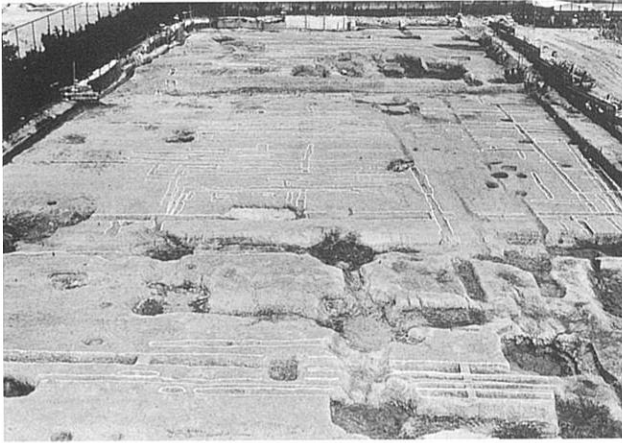
古墳時代には、墓地が営まれる。検出した周溝墓は前方後方形周溝墓を含む4基で、他に古墳時代の墳墓であると確認されたものはない。4基の周溝墓は比較的密集しており、各周溝墓が有機的な繋がりをもって造営されたことが窺われる。方形周溝墓2と方形周溝墓3は、陸橋部で繋がっており2基ほぼ同時に埋葬が行われ、最後に方形周溝墓3の西溝を掘ってその造営を終わっていると考えられる。また、方形周溝墓1が前方後方形周溝墓の周溝を利用して方形の区画を得ていること、方形周溝墓2と前方後方形周溝墓を繋ぐ溝が存在することによってそれを裏付けている。前後に系譜を辿ることなく、比較的短期間に4基という小規模な周溝墓群が形成されている。

また、周溝墓から二重口縁で円形浮文・竹管文・波状文などで飾られた土師器の壺が出土している。器形・文様構成からみて、壺27～34は伊勢地方、壺39は瀬戸内東部の影響を受けたものと思われる。甕はその胎土からみて、甕44は北陸地方、甕38・40は所謂生駒西麓のものと考えられる

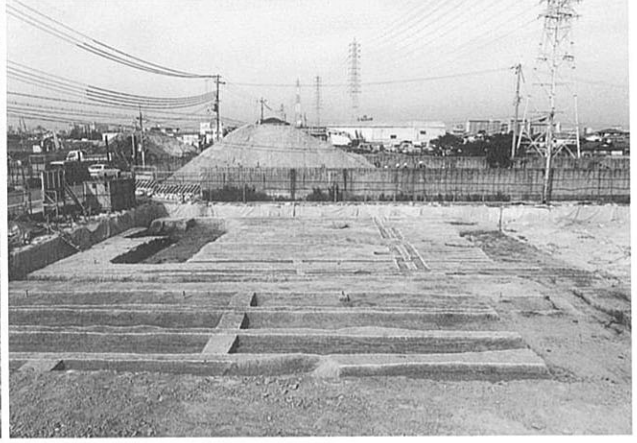
この地で耕作地が営まれるのは、中世になってからであり、それ以前は降雨が激しければ水が侵食するような不安定な土地であったようである。中世の耕作地には明確な区画溝が存在しており、条里制との関連が考えられる。また、中世の終わりから近世にかけて耕作地が幅20m前後の段状に造成され、現代にいたっていることが分った。

写真図版

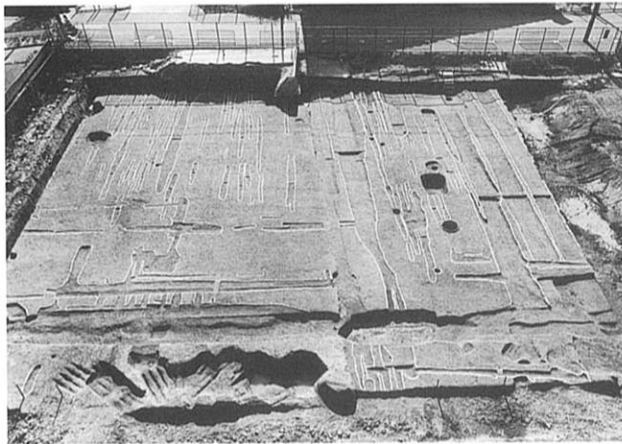




1. 1A区第1面全景 (西より)



2. 1B区第1面全景 (東より)



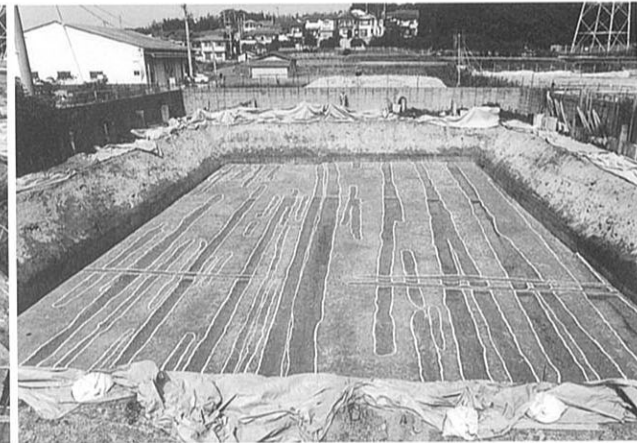
3. 1C区第1面全景 (北より)



4. 2A区第1面全景 (南より)



5. 2B区第1面全景 (南より)



6. 3A区第1面全景 (南より)



7. 3B区第1面全景 (北より)



8. 3C区第1面全景 (北より)

図版2 遺跡



1. 1A区第2面全景(西より)



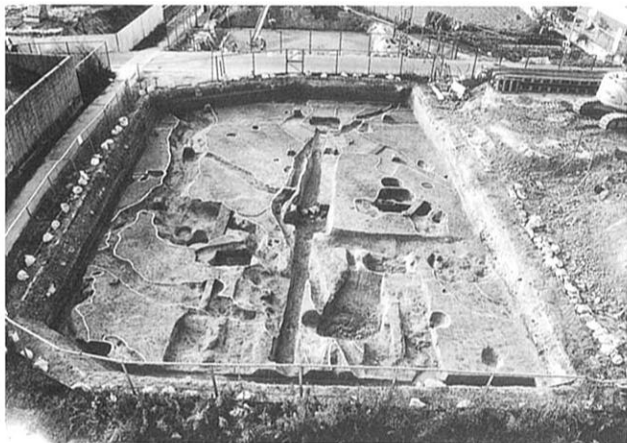
2. 1A区東半第2面全景(南より)



3. 1C区第3面全景(北より)



4. 2A区第3面全景(南より)



5. 2B区第3面全景(東より)



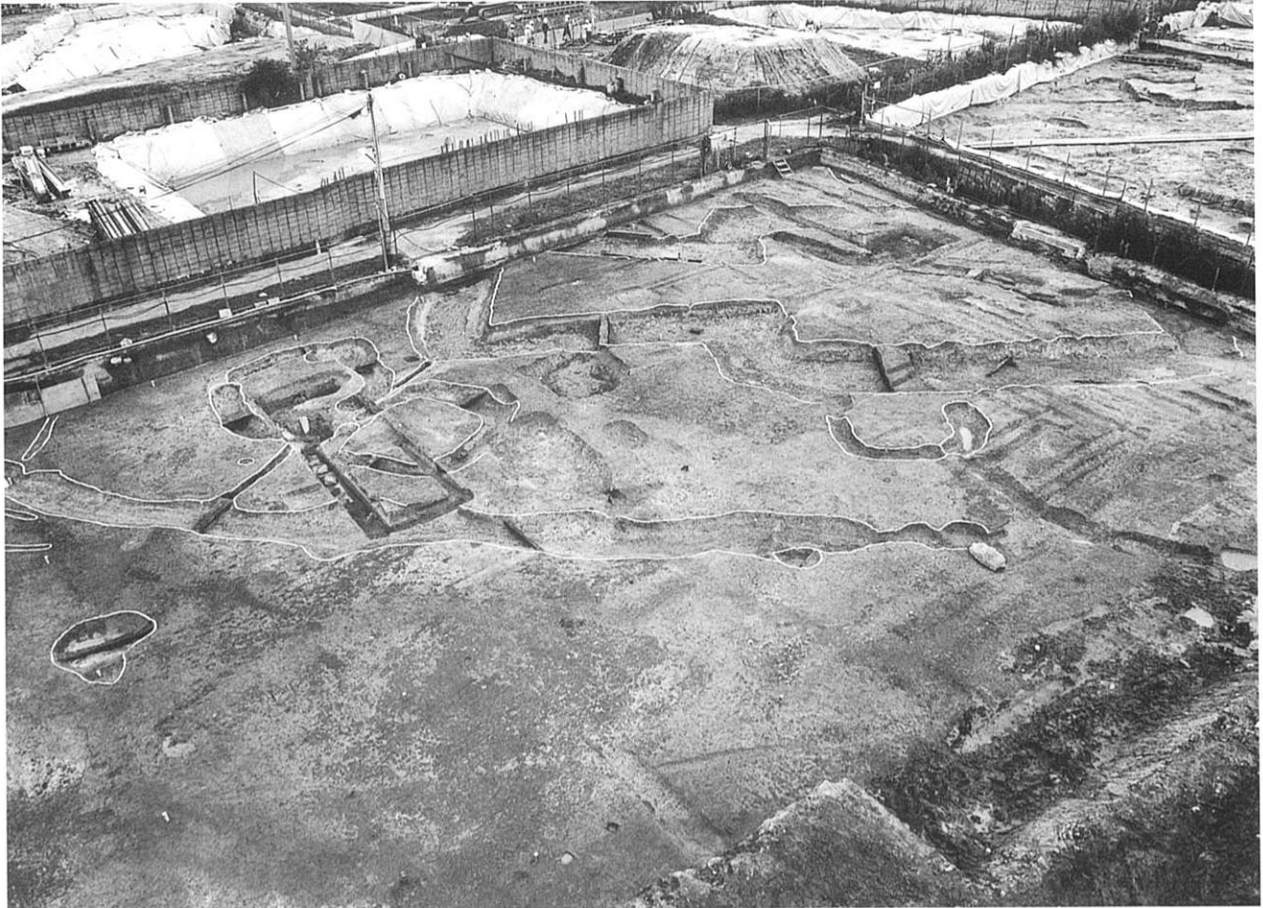
6. 3A区第3面全景(南より)



7. 3B区第3面全景(北より)



8. 3C区第3面全景(北より)



1. 1A区第3面全景（南東より）



2. 1B区第3面全景（東より）

図版4 遺跡



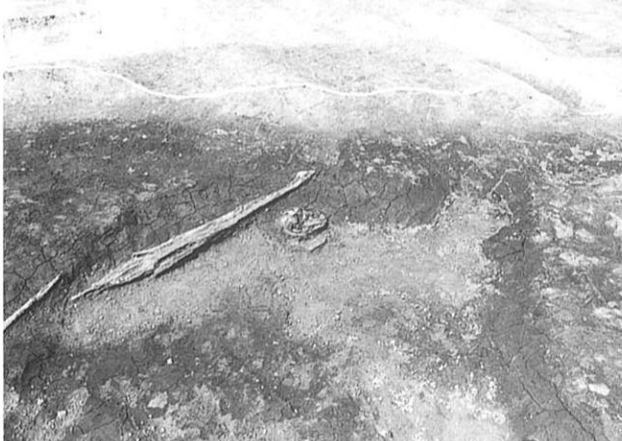
1. 前方後方形周溝墓（西より）



2. 土器29出土状況（南東より）



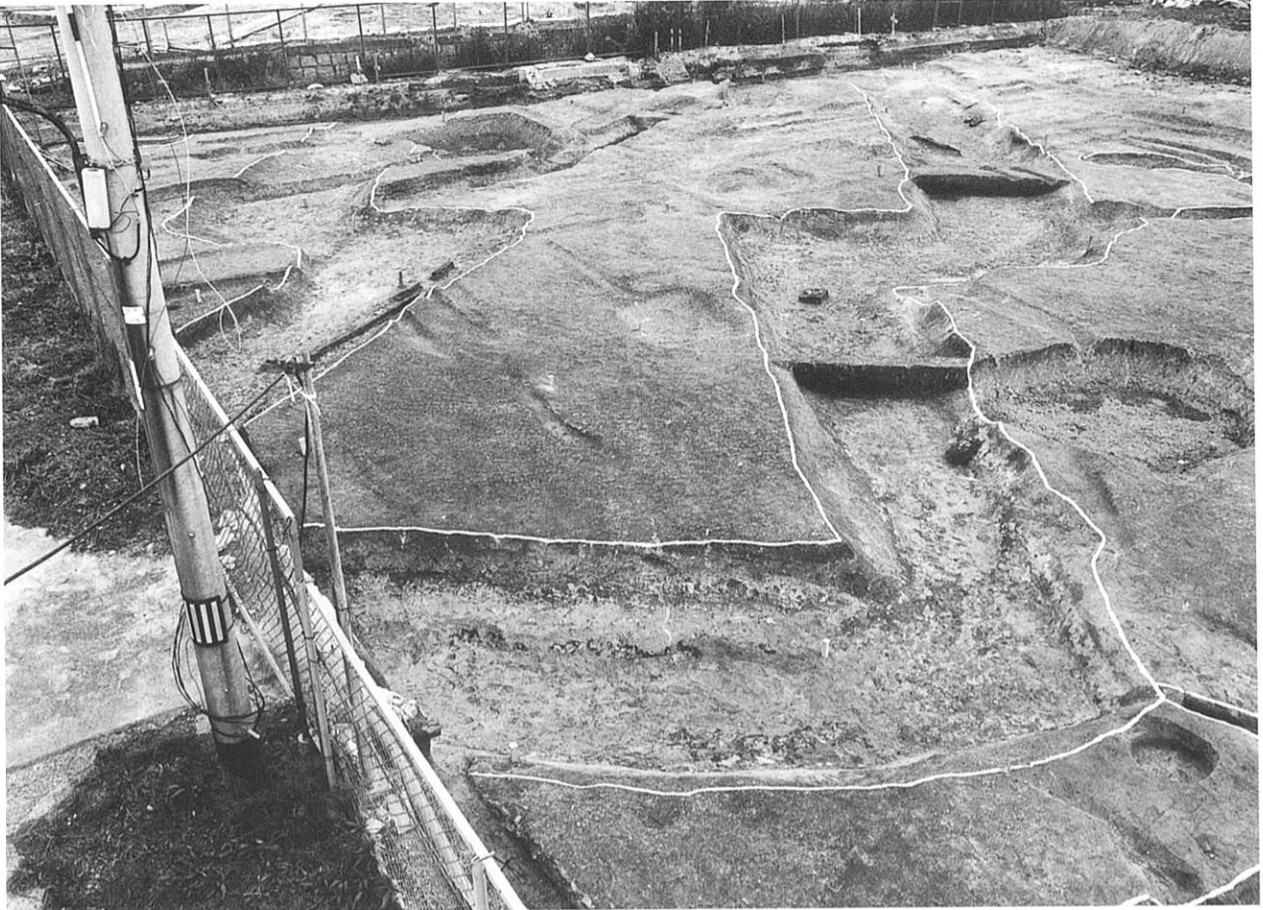
3. 土器33・35～37・40・41出土状況（南西より）



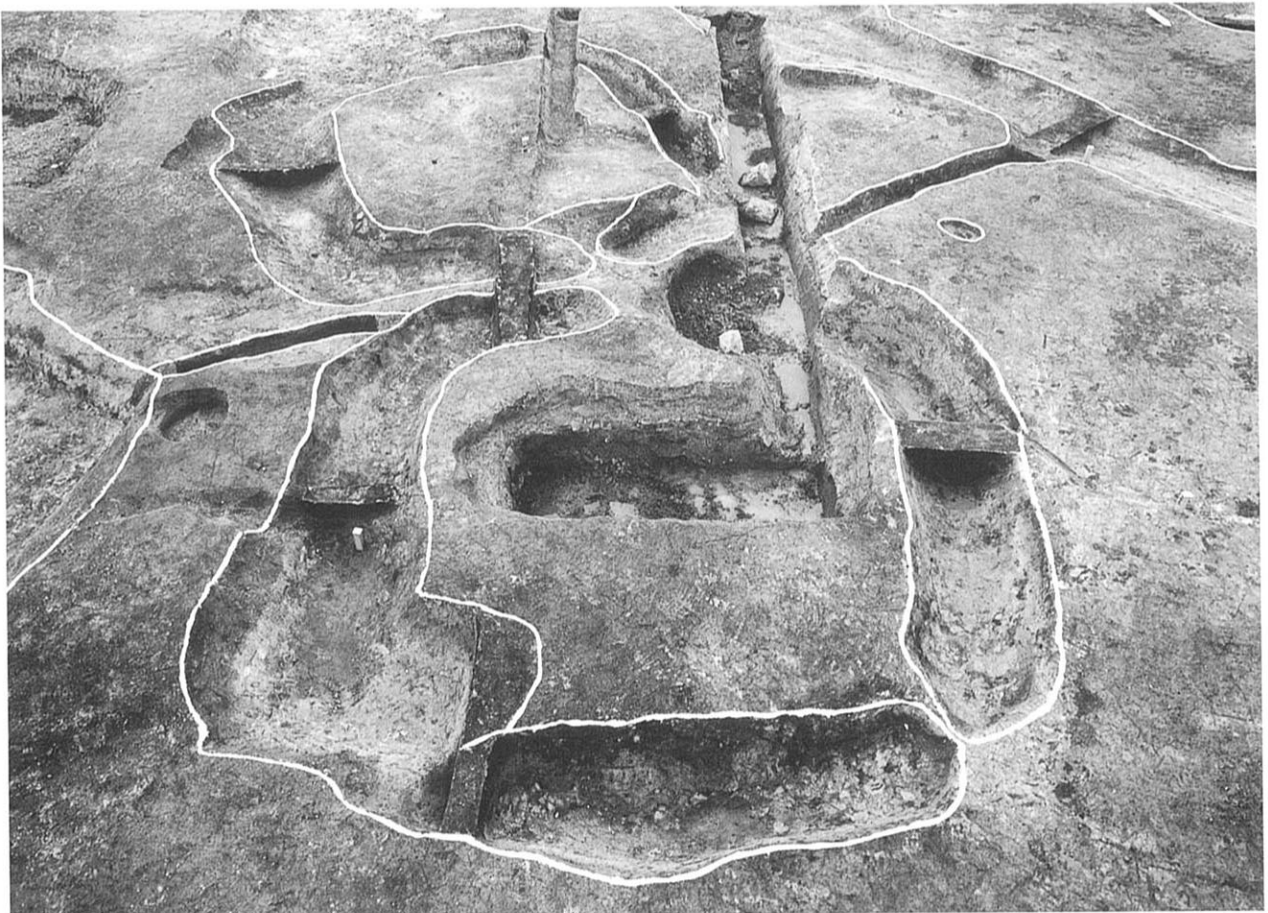
4. 土器28出土状況（南東より）



5. 土器39出土状況（南東より）



1. 前方後方形周溝墓（南西より）



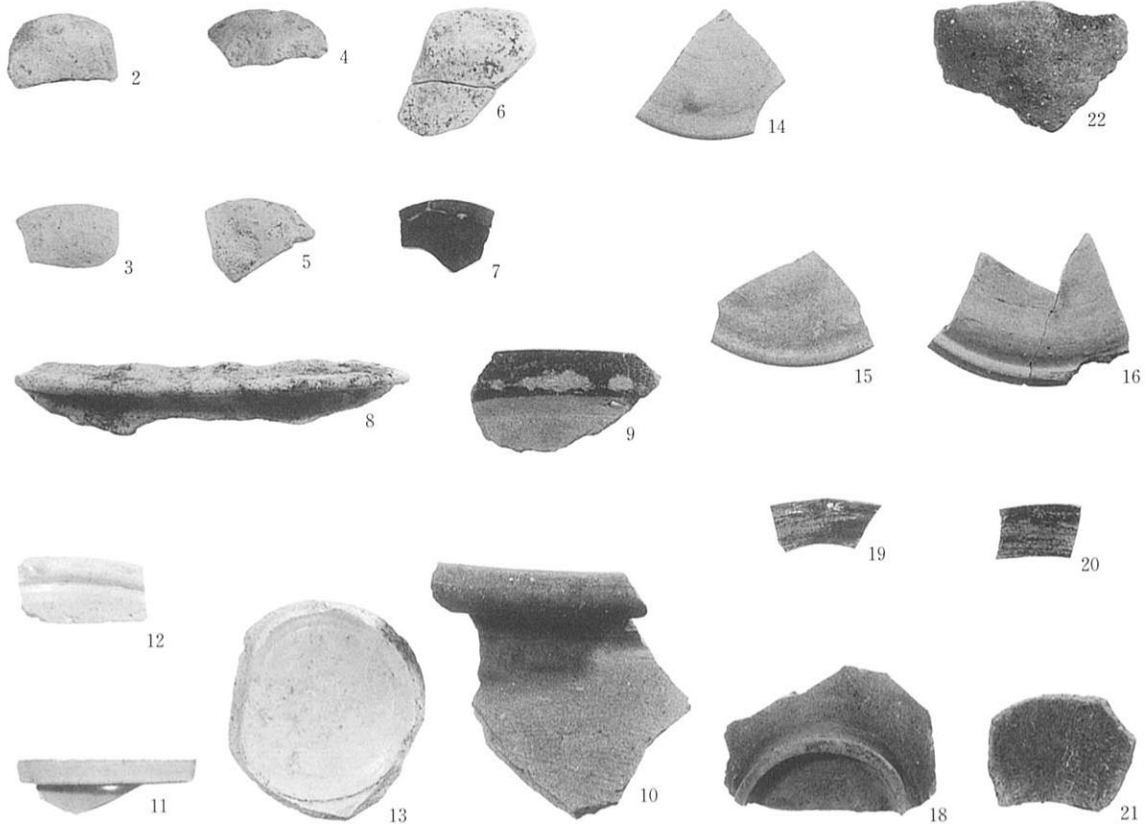
2. 方形周溝墓2・3（手前）（西より）



1. 1C区下層確認トレンチ (西より)



2. 3C区下層確認トレンチ (北より)



1. 土師器；皿（2～6）・羽釜（8）、瓦器；皿（7）、中世陶器；插鉢（9）・甕（10）、白磁；壺（11）・椀（12・13）、須恵器；杯蓋（14～16）・壺（18）、緑釉陶器；椀（19～21）、製塩土器（22）



2. 軒丸瓦（24）



1



23



50



52



53



17



54



48



44

唐津焼；碗（1）、黒色土器；碗（23）、須恵器；瓶子（17）・杯蓋（50）・杯身（52・53）・器台（54）、土師器；竈（48）・甕（44）



30



31



28



33



27



40

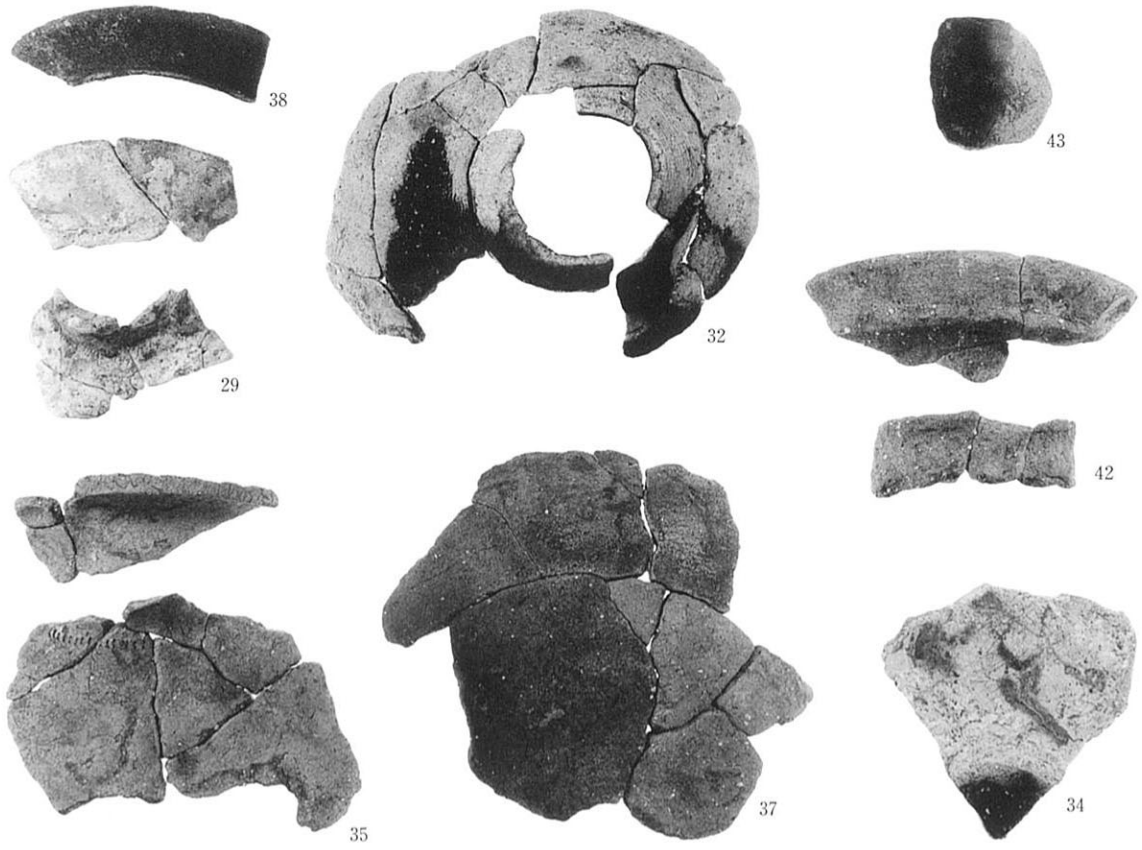


39

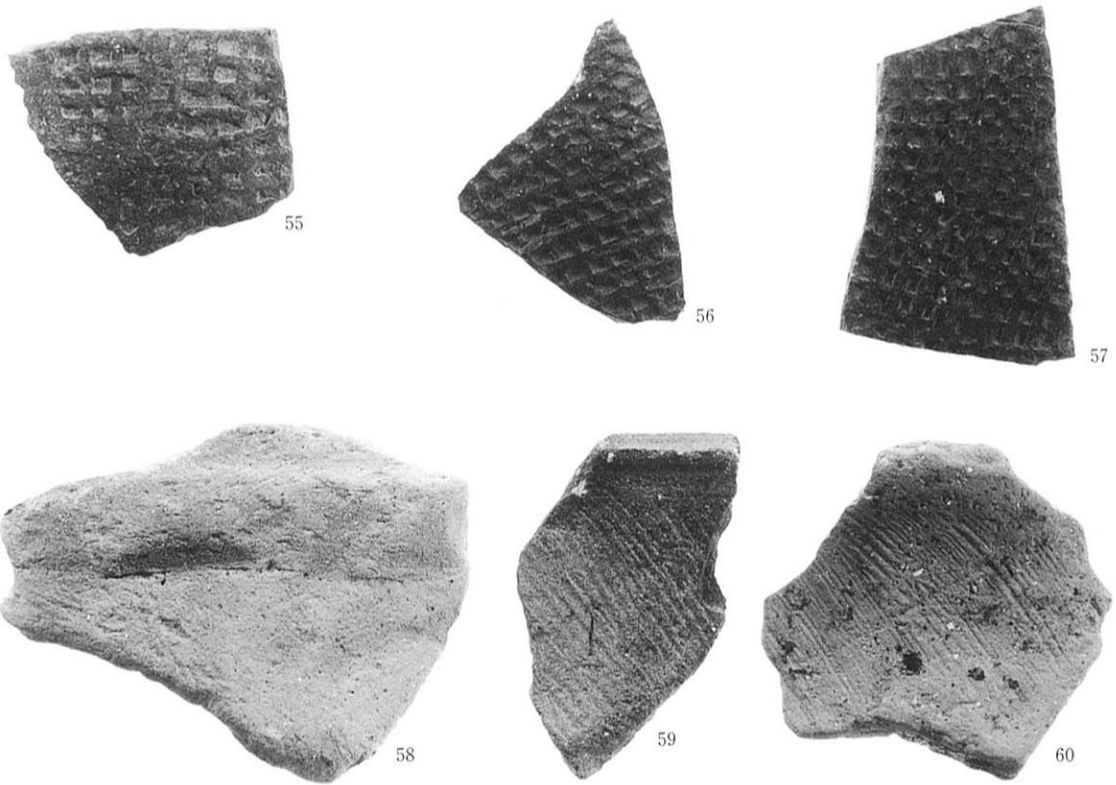


41

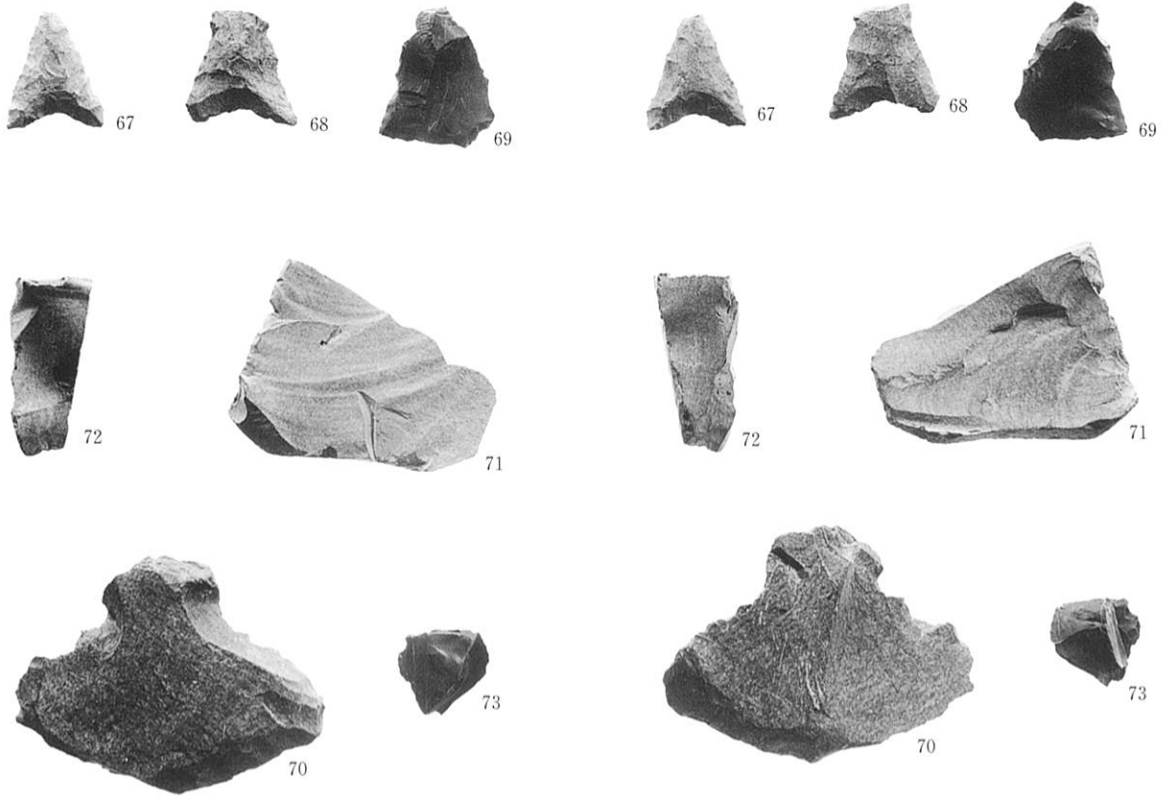
土師器；甕 (40)・壺 (27・28・30・31・33・39)・器台 (41)



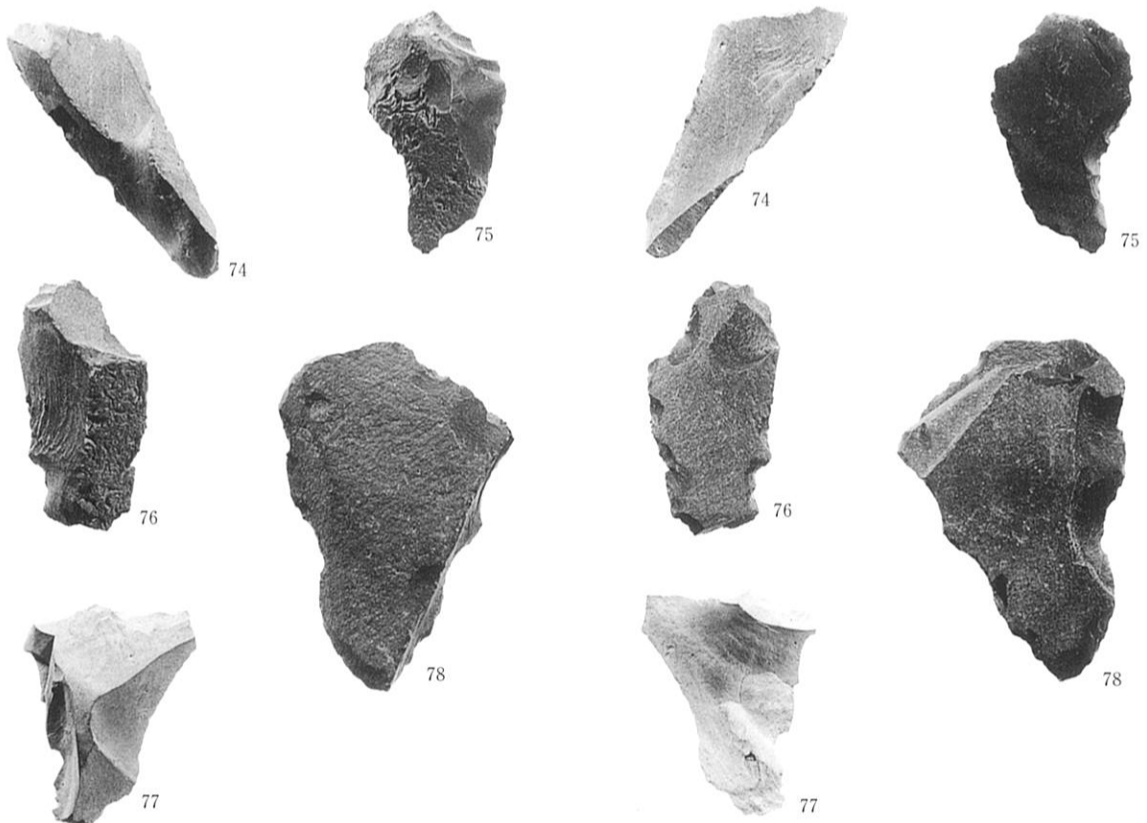
1. 土師器；壺（29・32・34・35・37・42）・甕（38）・鉢（43）



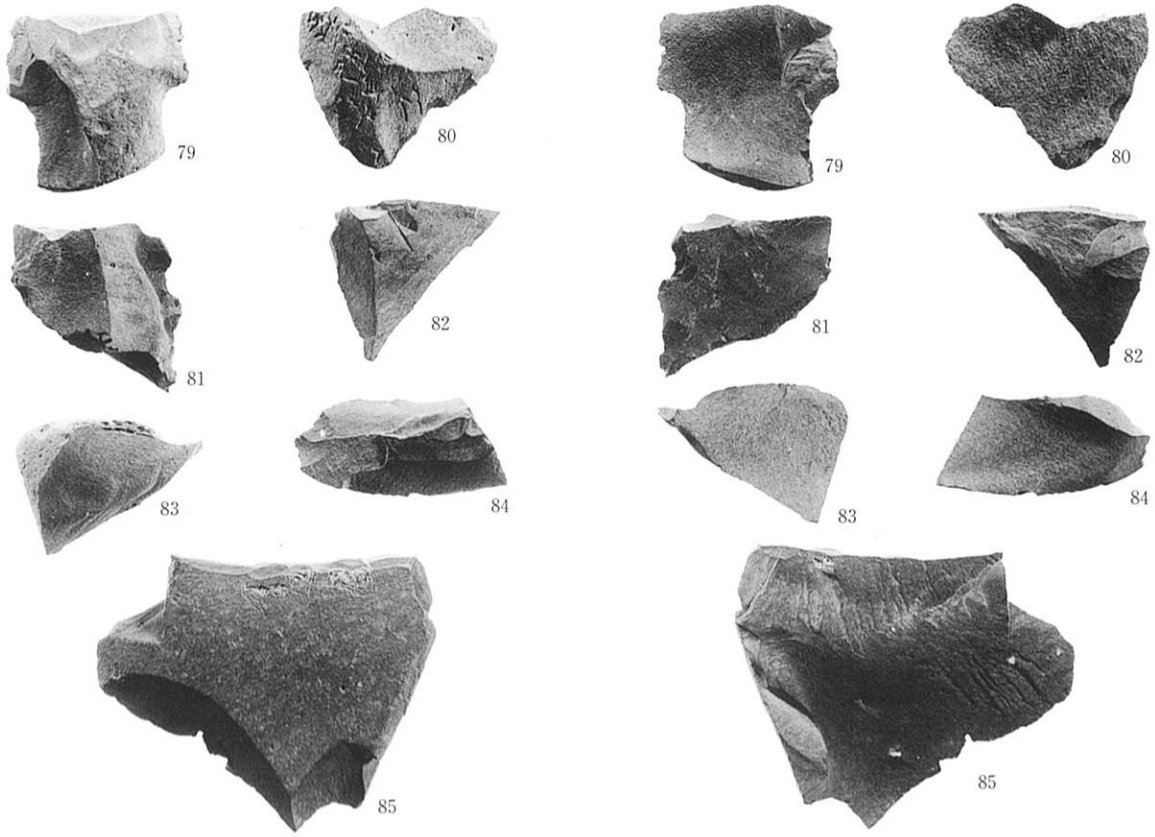
2. 韓式土器（55～57）、円筒埴輪（58～60）



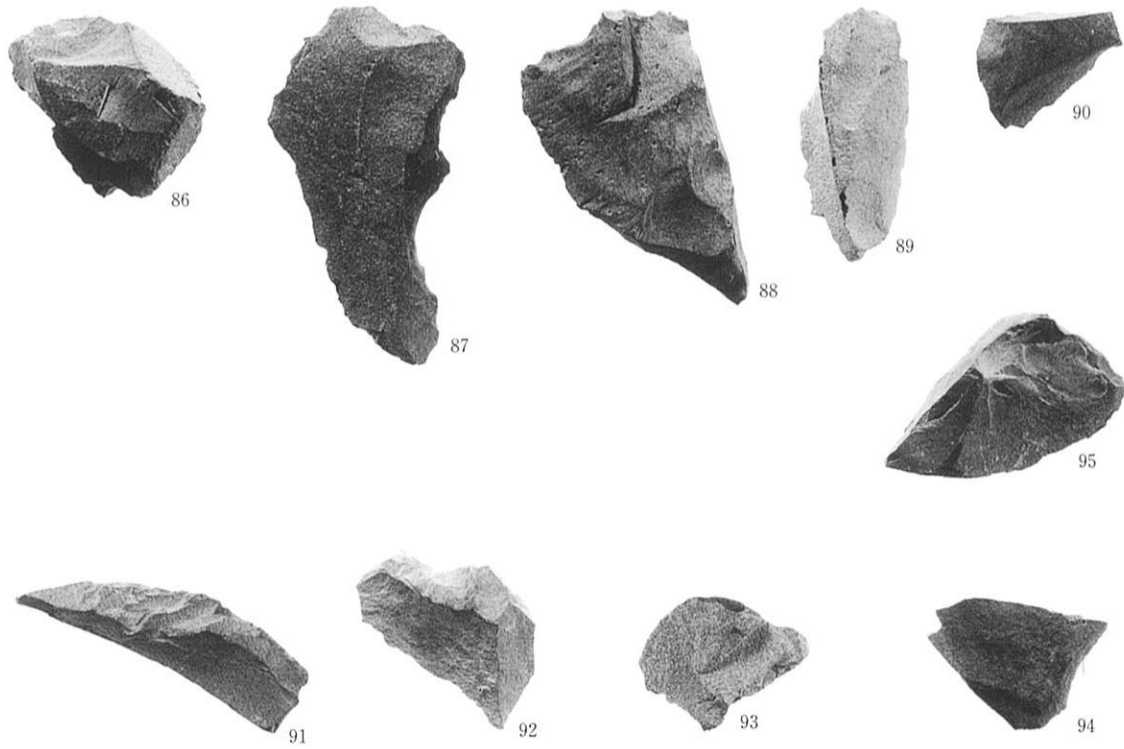
1. 石鏃 (67・68)、石匙 (70)、楔形石器 (71・72)、剥片 (69・73)



2. 剥片 (74~78)



1. 剥片 (79~85)



2. 剥片 (86~95)



1. 紡錘車 (96)



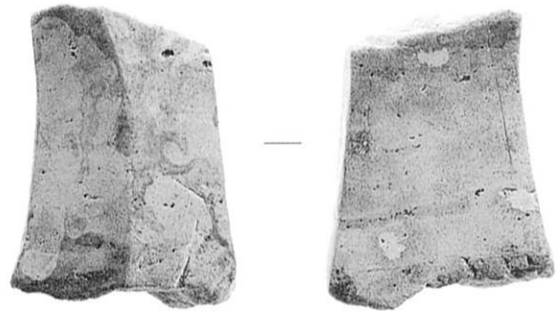
96

99

3. 砥石 (99)



2. 石錘 (97)



97

98

4. 砥石 (98)

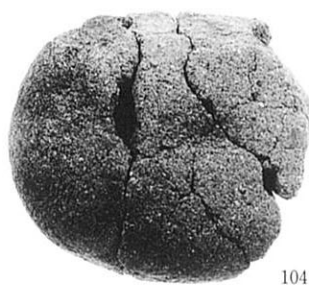


5. 磨石 (101)

101



100



104



102



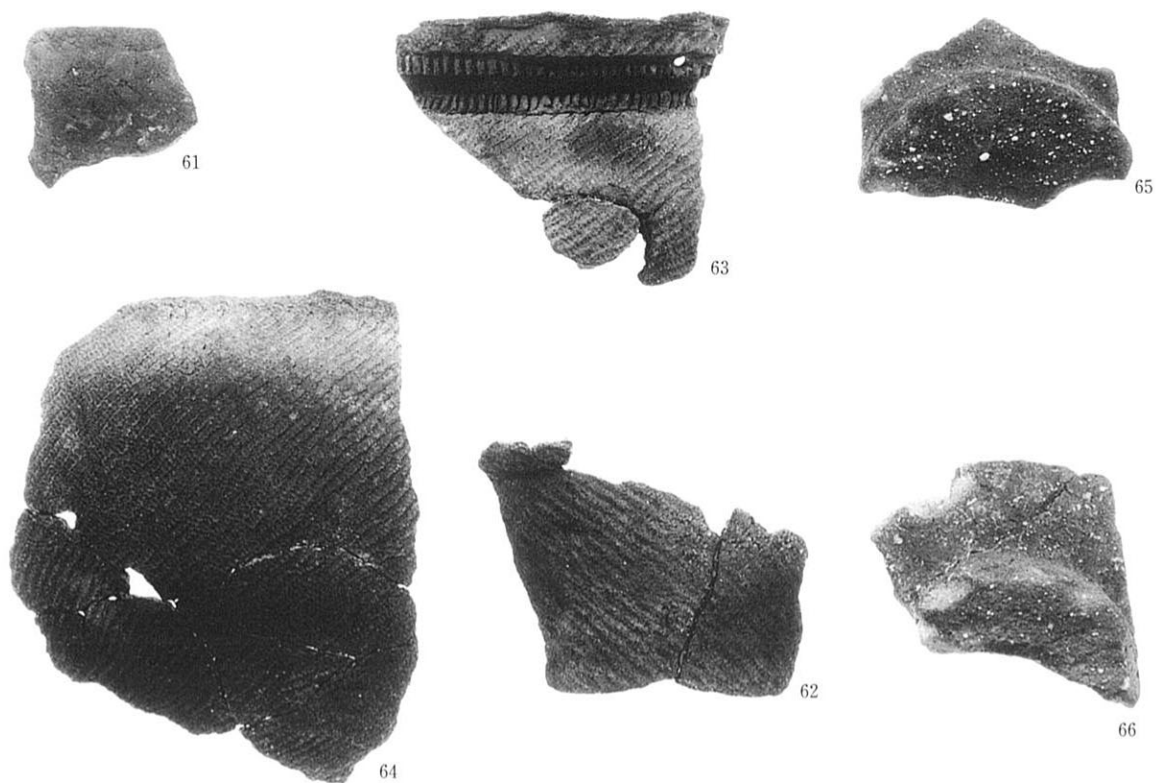
103

1. 砥石 (100)、磨石 (102)

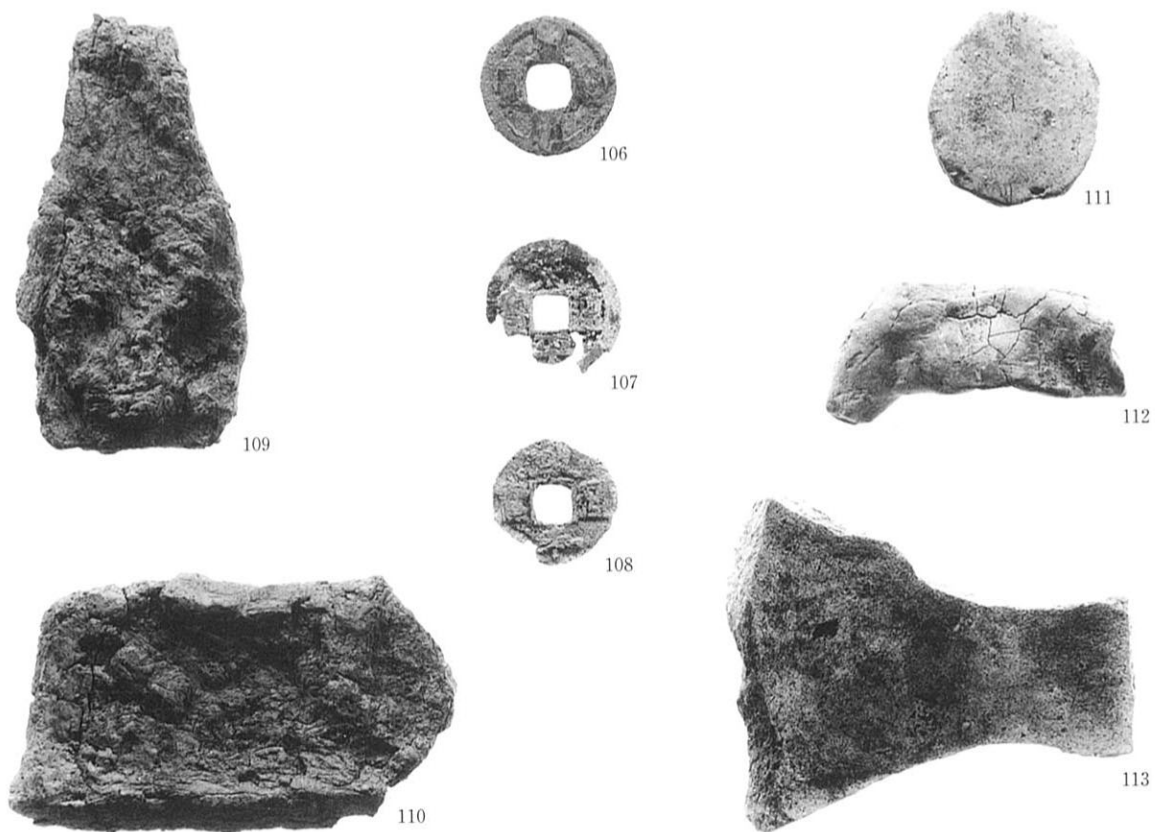
2. 磨石 (103・104)



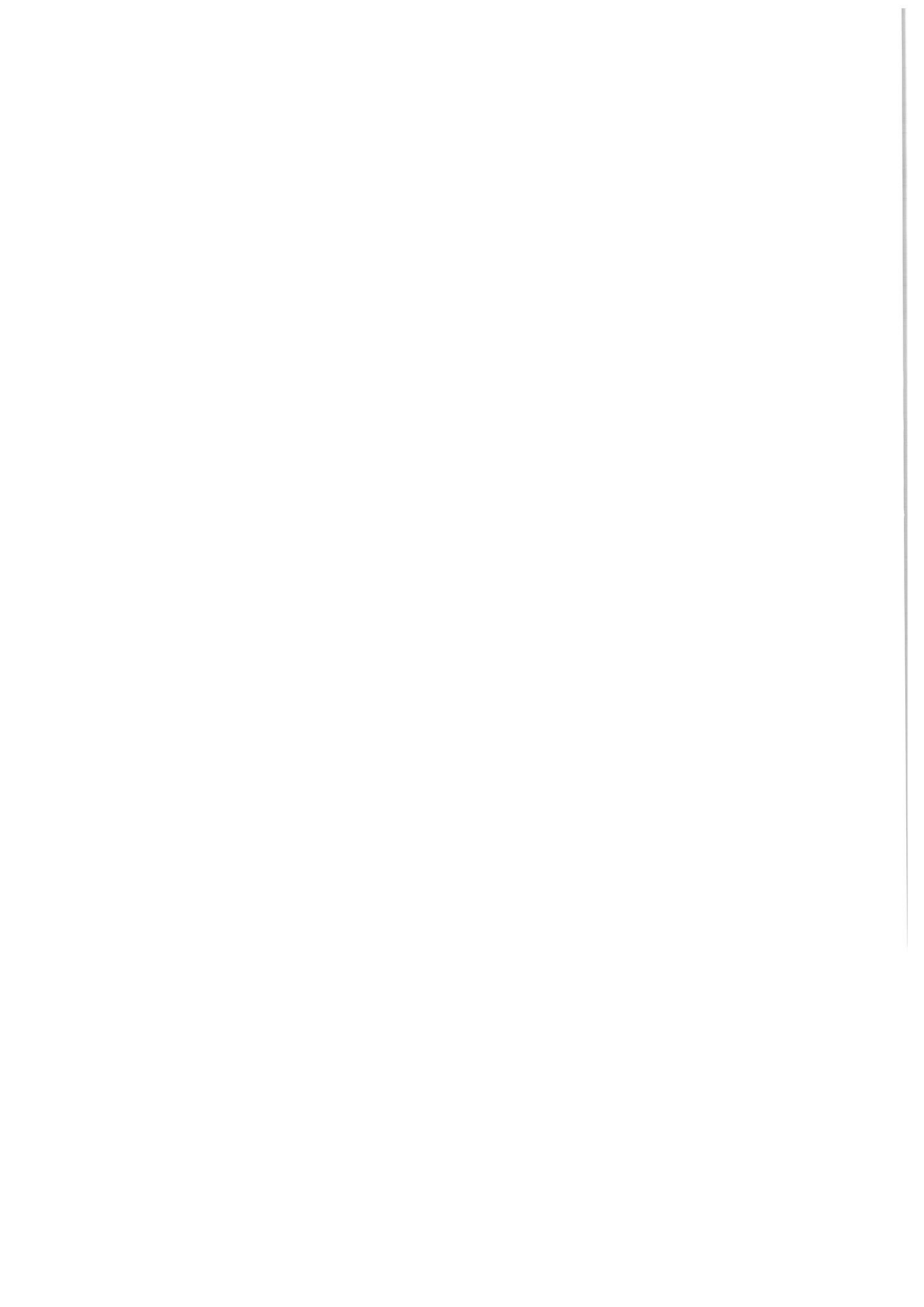
3. 石皿 (105)



1. 縄文土器 (61~66)



2. 輸入銭貨 (106~108)、金属製品 (109・110)、土製品 (111~113)



報告書抄録

ふりがな	しょうじいせき							
書名	小路遺跡（その3）							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第113集							
編著者名	木下保明							
編集機関	（財）大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうじいせき 小路遺跡	ねやがわししょうじ 寝屋川市小路 たかみや 高宮	27215	28	34° 45′ 12″	135° 38′ 17″	2002年4月10日) 2003年1月31日	3,530㎡	第二京阪道路 （大阪北道路） 建設に伴う
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小路遺跡	自然流路	縄文時代		縄文土器・石器		縄文時代前期の土器が出土		
	墓域	古墳時代	前方後方形周溝墓	土師器		古墳時代前期（庄内式期）の前方後方形周溝墓1基と方形周溝墓3基を検出		
	自然流路	奈良時代～ 平安時代		土師器・須恵器・緑釉陶器・軒丸瓦		高宮廃寺の軒丸瓦が出土		
	生産域	中世	溝・足跡	土師器・瓦器				

（財）大阪府文化財センター調査報告書 第113集

小路遺跡（その3）

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・
第二京阪道路建設に伴う発掘調査報告書

発行年月日：2004年3月31日

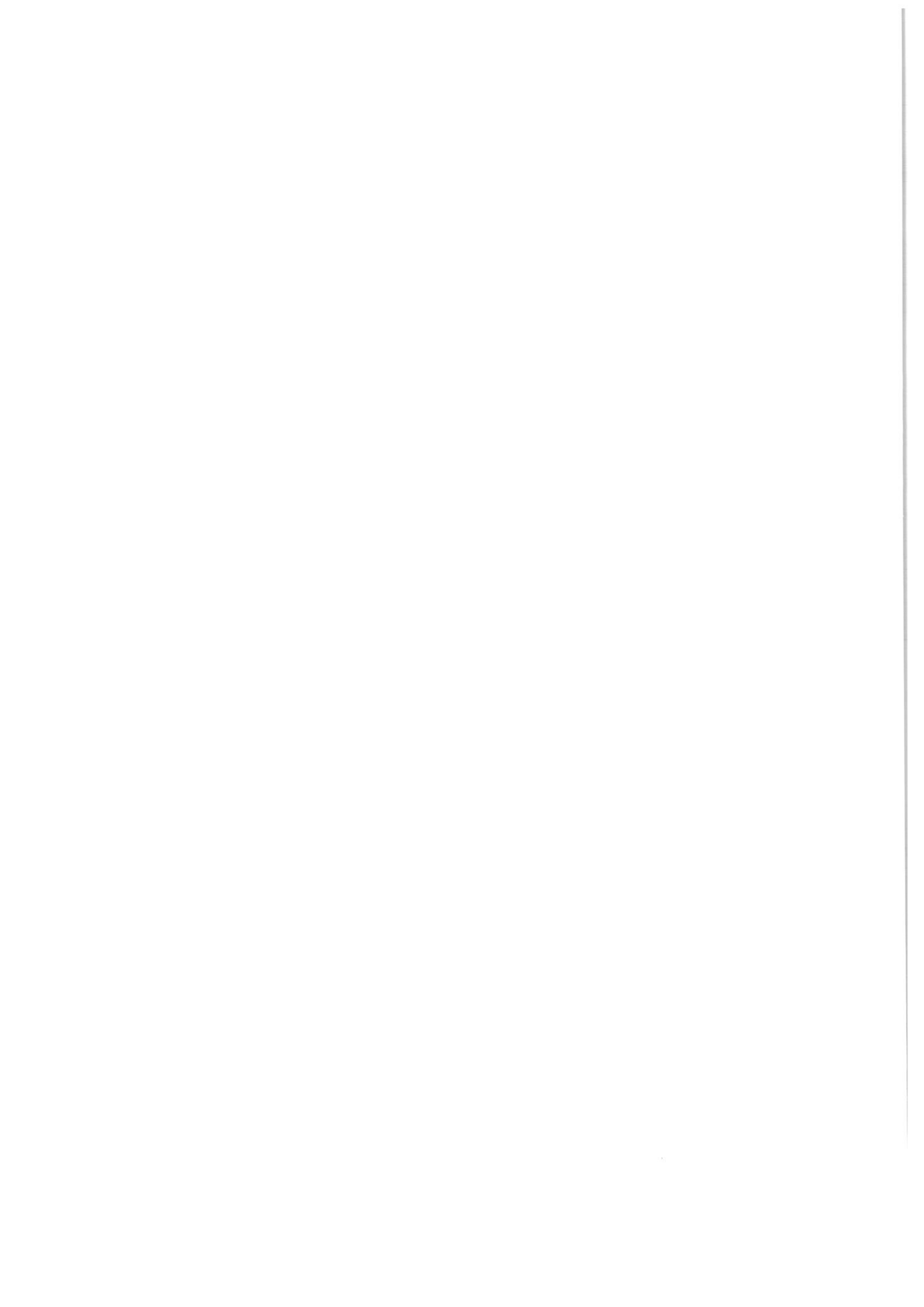
編集・発行：（財）大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

大阪府教育委員会文化財調査事務所3階

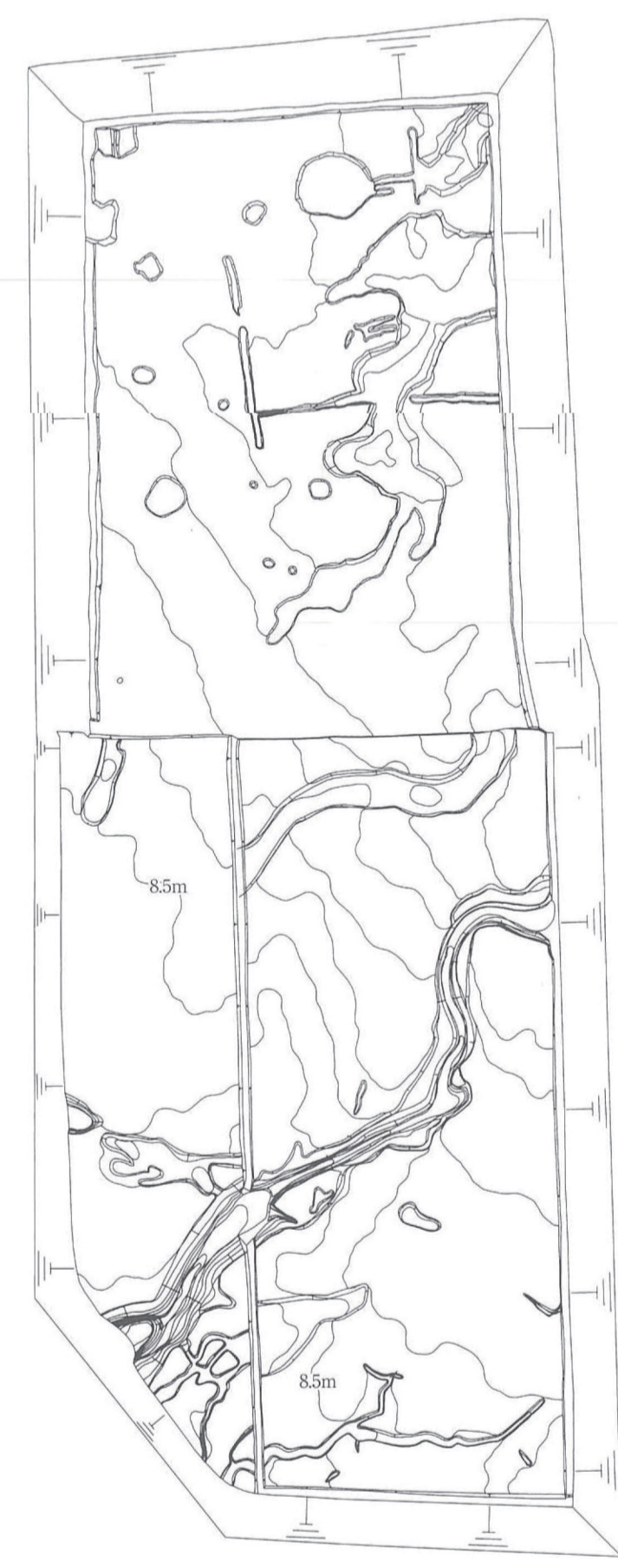
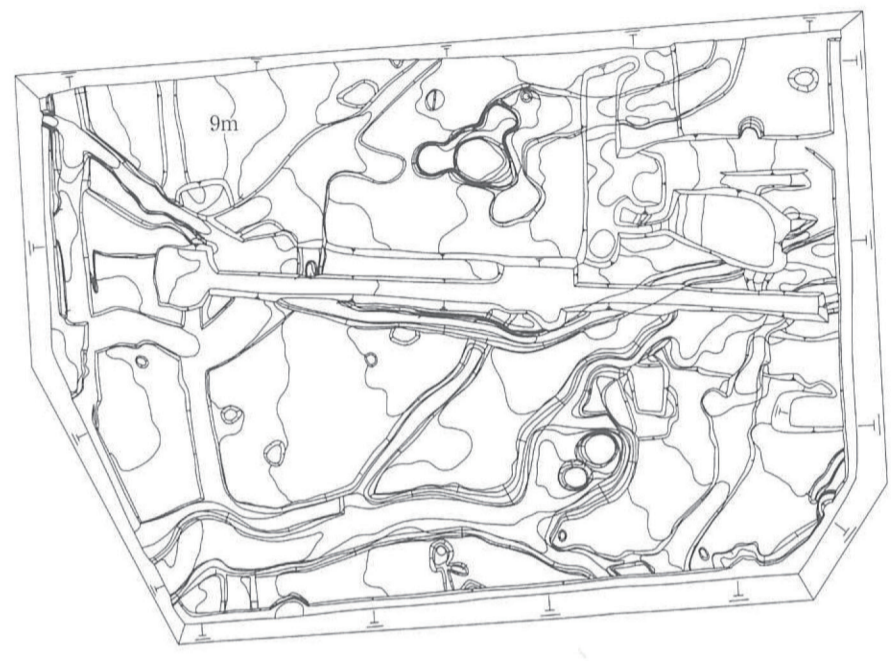
T E L 072-299-8791 F A X 072-299-8905

印刷・製本：株式会社 中島弘文堂印刷所



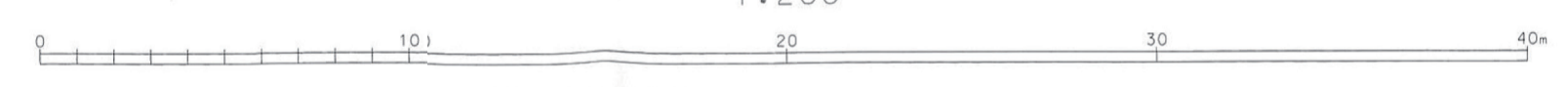


X = 138520
 X = 138530
 X = 138540
 X = 138550
 X = 138560
 X = 138570
 X = 138580
 X = 138590
 X = 138600
 X = 138610



Y = 32960 Y = 32950 Y = 32940 Y = 32930 Y = 32920 Y = 32910 Y = 32900 Y = 32890 Y = 32880 Y = 32870 Y = 32860 Y = 32850 Y = 32840 Y = 32830 Y = 32820

1:200



付圖 航空測量平面圖